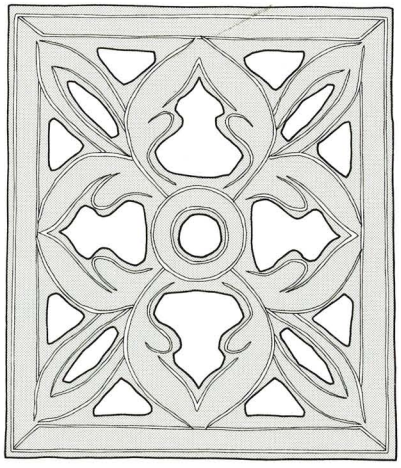
飛鳥・藤原宮発掘調査概報 25



1995年5月

奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮発掘調査概報25　正誤表

頁	行	誤	正
4	13	ＳＤ（井戸）	ＳＤ（溝）
39	Fig.32	六条条間路	七条条間路
		六条大路	七条大路
53	Fig.40	ＳＫ3247	ＳＸ3247
78	5	ＳＤ260	ＳＤ289
81	5	ＳＸ3391	ＳＸ3390
84	8	22.8ｍ	20.4ｍ
88	17	ＳＤ260	ＳＤ289
112	32	諸施設ともに	諸施設とともに

飛鳥・藤原宮発掘調査概報25

目　　次

1994年発掘調査地一覧表……2

Ⅰ　藤原宮の調査……5
1　西方官衙地区の調査……7
A　第76次……7
B　第75－6次……13
C　第71－15次……17
D　第75－7次……18
E　第75－12次……20
2　東二坊大路・宮東面・東方官衙地区の調査（第75－13次）……25
3　宮西面外濠の調査（第75－1次）……35
4　宮内その他の調査……36
A　第75－5次……36
B　第75－9次……36

Ⅱ　藤原京の調査……37
1　左京七条二・三坊の調査（第74次）……39
2　左京七条一・二坊の調査（第75次）……45
3　左京八条四坊（日向寺）の調査（第75－4次）……51
4　左京十一条三坊（雷丘北方遺跡第4次）の調査（第71－13次）……52
5　左京十二条三坊（雷丘東方遺跡）の調査（第75－3次）……58
6　左京その他の調査……61
A　左京五条三坊の調査（第75－10次）……61
B　左京十一条四・五坊の調査（第75－8次）……62
7　右京七条二坊の調査（第75－11次）……63
8　本薬師寺の調査……66
A　本薬師寺1993－3次……66
B　本薬師寺1994－1次……74

Ⅲ　飛鳥地域の調査……75
1　水落遺跡第7次調査……77
2　山田道第7次調査……89
3　甘橿丘東麓の調査……94
A　第71－12次……94
B　第75－2次……95
4　川原寺の調査……102
A　川原寺1993－2次……102
B　川原寺1993－3次……107
5　橘寺の調査（橘寺1993－1次）……108
6　山田寺第9次調査……109

ＰＬ.（写真図版）
1：第76次、2：第75－6次、3：第75－7次、4：第75－12次、5・6：第74次、
7：第75次、8：第71－13次、9：第75－3次、10：第75－10次、11：第75－11次、
12：本薬師寺1993－3次、13：水落遺跡第7次、14：山田道第7次、15：第75－2次、
16：川原寺1993－2次、17：山田寺第9次

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考	担当者	概報頁
藤原宮 71－12	6ＡＭＫ－Ｄ	73㎡	94. 1.10～ 94. 1.12	高市郡明日香村豊浦（甘橿丘東麓）	国有地	登山道建設	金子　裕之	94
71－13	6ＡＭＨ－Ｊ	434㎡	94. 1.10～ 94. 4. 7	高市郡明日香村雷字稲葉縄手（左京十一条三坊）	奈良県	道路建設（雷丘北方）	西口　壽生	52～57
71－15	6ＡＪＦ－Ｑ	80㎡	94. 3. 7～ 94. 3.14	橿原市縄手町170－1（宮西方官衙地区）	中西利一	擁壁工事等	村田　和弘	17
74	5ＡＷＧ－Ｈ・Ｐ	2368㎡	93.12. 1～ 94. 3.24	橿原市木之本町54－2他（左京七条二・三坊）	橿原市	市道飛騨～木之本線建設	島田　敏男	39～44
75	5ＡＷＨ－Ａ　5ＡＷＧ－Ｐ　5ＡＪＨ－Ｆ	2200㎡	94. 4. 4～ 94. 8. 8	橿原市木之本町326他（左京七条一・二坊）	橿原市	市道飛騨～木之本線建設	上原　真人	45～50
75－1	5ＡＪＬ－Ｆ	100㎡	94. 4. 4～ 94. 4.21	橿原市四分町302（宮西面外濠）	橿原市	道路拡幅	深澤　芳樹	35
75－2	5ＡＫＧ－Ｌ・Ｍ	360㎡	94. 5. 9～ 94. 6.30	明日香村川原（甘橿丘東麓）	国有地	駐車場建設	次山　淳	95～101
75－3	5ＡＭＨ－Ｄ・Ｅ・Ｆ 5ＡＭＪ－Ａ	500㎡	94. 6.14～ 94. 7.13	明日香村雷東浦（左京十二条三坊）	奈良県	道路拡幅（雷丘東方）	大脇　潔	58～60
75－4	5ＢＮＧ－Ｅ	16㎡	94. 6.16～ 94. 6.22	橿原市南浦888（左京八条四坊）	西井輝男	住宅建設	深澤　芳樹	51
75－5	5ＡＪＨ－Ｐ・Ｈ・Ａ 5ＡＪＧ－Ｆ・Ｎ 5ＡＪＣ－Ｕ・Ｎ	630㎡	94. 6.28～ 94. 7.18	橿原市四分町他（宮内）	橿原市	四分木之本線水道管布設替	深澤　芳樹	36
75－6	5ＡＪＧ－Ｕ	84㎡	94. 7.14～ 94. 8. 2	橿原市四分町 293－2・294（宮西方官衙地区）	橿原市	四分団地建替	大脇　潔	13～16
75－7	5ＡＪＦ－Ｑ	160㎡	94. 7.19～ 94. 8. 5	橿原市縄手町167－6（宮西方官衙地区）	田村進・隆久	作業小屋建設	大脇　潔	18～19
75－8	5ＡＭＣ－Ｑ・Ｒ 5ＡＭＨ－Ｂ・Ｃ	68.7㎡	94. 8. 1～ 94. 8.10	明日香村奥山（左京十一条四・五坊）	明日香村	下水道竪坑	伊藤敬太郎	62
75－9	5ＡＪＣ－Ｐ	14.6㎡	94. 9.14～ 94. 9.22	橿原市高殿町245（宮内）	三橋栄次	住宅建替	島田　敏男	36
75－10	5ＡＪＣ－Ｂ	50㎡	94.10. 3～ 94.10.11	橿原市下八釣町141（左京五条三坊）	山尾吉史	住宅建替	島田　敏男	61
75－11	5ＡＪＭ－Ｃ・Ｄ	528㎡	94.10. 3～ 94.11. 1	橿原市四分町 256－3・12・13（右京七条二坊）	奈良県	バイパス建設	金子　裕之	63～65
75－12	5ＡＪＥ－Ｕ	436㎡	94.10.11～ 94.11.15	橿原市醍醐町43－5（宮西方官衙地区）	森口清信他	宅地造成	佐川　正敏	20～24

Tab.1　1994年度発掘調査地一覧（1）

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考	担当者	概報頁
75－13	5ＡＪＢ	384㎡	94.11.10～94.11.28 94.12. 1～94.12. 8	橿原市高殿町（宮内）	橿原市	道路拡張	金子　裕之 橋本　義則	25～34
75－14	5ＡＪＫ－C	70㎡	95. 1.23～95. 1.27	橿原市縄手町199－4・192－1・6（宮内）	橿原市	歩道拡張	橋本　義則	未収録
75－15	5ＡＷＨ	300㎡	94.12.12～95. 2. 1	橿原市飛騨町94－1（右京七条一坊）	橿原市	住宅建設	荒木　浩司	未収録
75－16	5ＡＭＨ－J	710㎡	95. 1. 9～95. 4. 8	明日香村雷上地内（左京十一条三坊）	奈良県	県道新設（雷丘北方）	川越　俊一	未収録
75－17	5ＢＮＧ	10㎡	95. 2.13～95. 2.15	橿原市南浦49（左京八条四坊）	田中博史	住宅建替	藤田　盟児	未収録
75－18	5ＡＪＧ	200㎡	95. 3. 7～95. 3.27	橿原市四分町（宮西方官衙地区）	橿原市	四分団地造成	藤田　盟児	未収録
76	5ＡＪＧ－S・R	2050㎡	94. 8. 1～94.10. 5	橿原市四分町288・289（宮西方官衙地区）	橿原市	四分団地造成	佐川　正敏	7～12
77	5ＡＪＬ－E 5ＡＪＧ－T	900㎡	94.12. 1～95. 2. 6	橿原市四分町（宮西方官衙地区）	橿原市	四分団地造成	藤田　盟児	未収録
本薬師寺1993－3次	6ＢＭＹ－D	307㎡	94. 2.10～94. 4.15	橿原市城殿町282・283・284（右京八条三坊）	西田佐芋	計画調査	花谷　浩	66～73
本薬師寺1994－1次	5ＢＭＹ－L・K	170㎡	94. 9.21～94.10. 6	橿原市城殿町231－1・232－1（右京八条三坊）	太田憲佑	住宅新築	島田　敏男	74
本薬師寺1994－2次	5ＢＭＹ－N	558㎡	95. 2. 3～	橿原市城殿町282・283・284（右京八条三坊）	西田佐芋	計画調査	花谷　浩	未収録
川原寺1993－2次	5ＢＫＨ－A	83.5㎡	93.12. 7～94. 1.27	明日香村川原	関西電力等	電線等埋設	花谷　浩	102～106
川原寺1993－3次	5ＢＫＨ－G	1㎡	94. 1.13	明日香村川原876	河合義照	住宅増築	村田　和弘	107
橘寺1993－1次	5ＢＴＢ－C	4.1㎡	94. 1.26～94. 2. 7	明日香村橘字北ノ門	関西電力等	電線等埋設	花谷　浩	108
山田寺第9次	5ＢＹＤ－A・F	80㎡	94.11. 7～94.12. 7	桜井市山田994－1・1040・1245・1246	国有地	計画調査	黒崎　直	109～112
山田道第7次	5ＡＭＤ－P	255㎡	94. 4.18～94. 5.24	明日香村雷・飛鳥	奈良県	ポケットパーク設置	伊藤　武	89～93
水落遺跡第7次	5ＡＭＥ－P・Q	600㎡	94. 8. 1～94.12.15	明日香村大字飛鳥291－1	豊田純行	計画調査	西口　壽生	77～88

Tab. 2　1994年度発掘調査地一覧（2）

凡　　例

1．本書は奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1994年１月から同年12月までにおこなった藤原宮跡・藤原京跡および飛鳥地域の発掘調査の概要報告である。1993年度の調査で未報告分については本書に収録した。各調査の執筆は、原則として各現場の発掘担当者がおこなった。なお、写真は井上直夫が撮影し、宮川伴子が整理した。

2．発掘調査一覧表には、1994年度の調査地をすべて示すとともに、本書に収録した1993年度の調査地を再録した。なお、各寺院では年度毎の通し番号を次数として付けた。

3．発掘遺構図に用いた座標値は、平面直角座標第Ⅵ座標系によった。高さはすべて海抜高で示す。

4．本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』を『報告』、『奈良国立文化財研究所年報』を『年報』、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』と省略した。

5．遺構には、個々の遺跡もしくは大地区割ごとに一連の番号を付け、番号の前に、遺構の種類を示す、ＳＡ（塀）、ＳＢ（建物）、ＳＤ（井戸）、ＳＦ（道路）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（その他）などの番号を付けた。

6．７世紀の土器の時代区分は飛鳥Ⅰ～Ⅴと表す。詳しくは『報告』Ⅱp.92～100を参照されたい。

7．第75－６次調査（p.14～16）、第75－13次調査（p.30～34）の寄生虫卵分析・花粉分析・種実同定を、天理大学附属天理参考館の金原正明氏と古環境研究所の金原正子女史・中村亮仁氏に依頼し、その結果について御寄稿いただいた。

8．本書の編集は、部長猪熊兼勝の指導のもと、島田敏男が行った。

飛鳥藤原宮発掘調査部1994年度現場班

1993年12月～1994年３月	４月～７月	８月～11月	12月～1995年３月
金子裕之	大脇潔	黒崎直	川越俊一
		金子裕之	
西口壽生	上原真人	西口壽生	橋本義則
花谷浩	深澤芳樹	佐川正敏	花谷浩
島田敏男	次山淳	島田敏男	藤田盟児
村田和弘	伊藤武	伊藤敬太郎	村田和弘
伊藤敬太郎	羽鳥幸一	肥塚隆保	荒木浩司

表紙カット：本薬師寺出土金銅製垂木先金具復元図（１：２）

本薬師寺1993－３次調査で出土した垂木先金具である。全形のほぼ¼が出土し一辺12cm×10.5cmの長方形に復元できる。金銅製で、対葉花紋を透かし彫り毛彫りの輪郭線を刻んでいる。同形・同紋の垂木先金具が平城薬師寺からも出土している。（本文70Ｐ参照）

I　藤原宮の調査

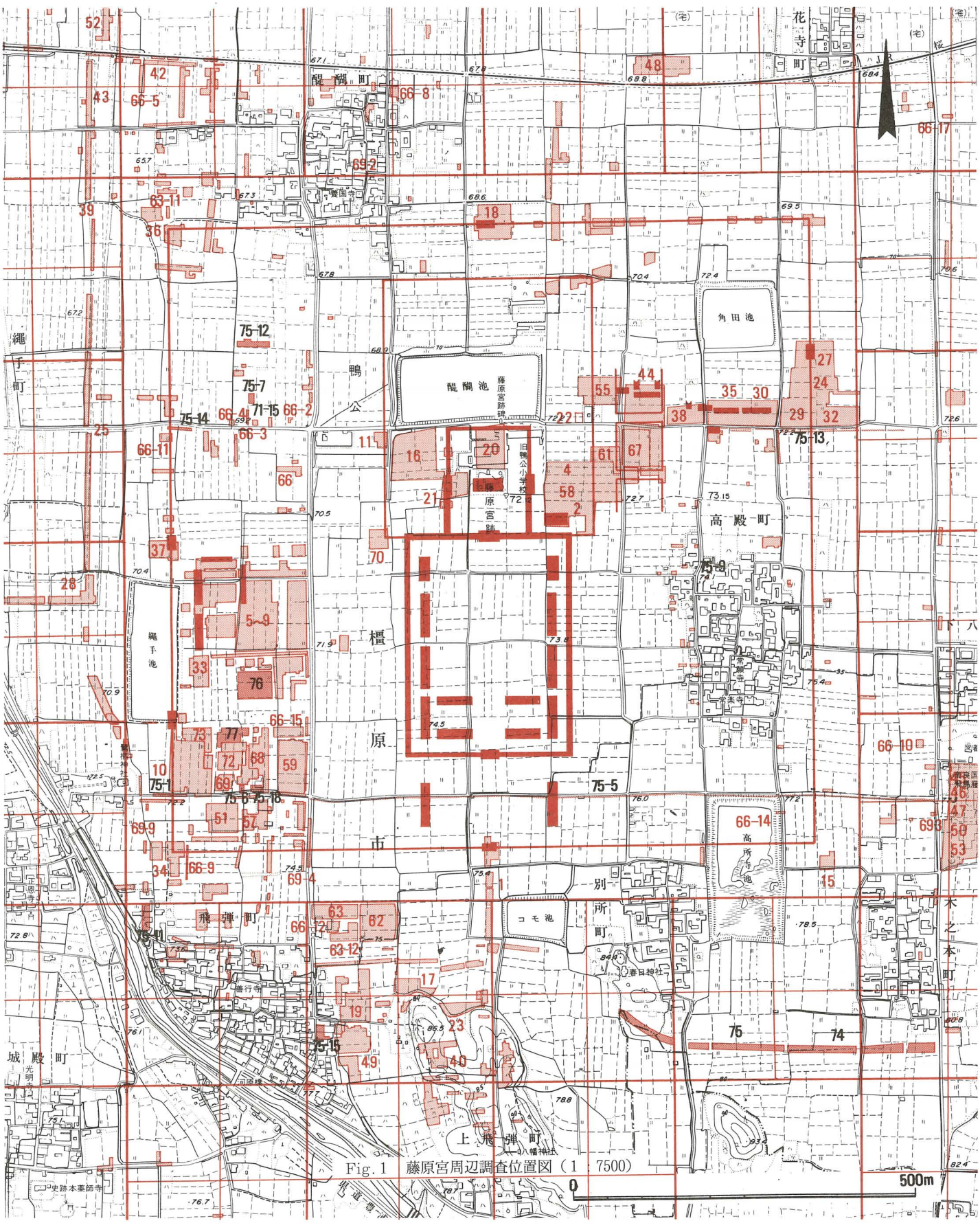


Fig. 1　藤原宮周辺調査位置図（1：7500）

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考	担当者	概報頁
藤原宮 71－15	6ＡＪＦ－Q	80㎡	94. 3. 7～ 94. 3.14	橿原市縄手町170－1（宮西方官衙地区）	中西利一	擁壁工事等	村田　和弘	17
75－1	5ＡＪＬ－F	100㎡	94. 4. 4～ 94. 4.21	橿原市四分町302（宮西面外濠）	橿原市	道路拡幅	深澤　芳樹	35
75－5	5ＡＪＨ－P・H・A 5ＡＪＧ－F・N 5ＡＪＣ－U・N	630㎡	94. 6.28～ 94. 7.18	橿原市四分町他（宮内）	橿原市	四分木之本線水道管布設替	深澤　芳樹	36
75－6	5ＡＪＧ－U	84㎡	94. 7.14～ 94. 8. 2	橿原市四分町293－2・294（宮西方官衙地区）	橿原市	四分団地建替	大脇　潔	13～16
75－7	5ＡＪＦ－Q	160㎡	94. 7.19～ 94. 8. 5	橿原市縄手町167－6（宮西方官衙地区）	田村進・隆久	作業小屋建設	大脇　潔	18～19
75－9	5ＡＪＣ－P	14.6㎡	94. 9.14～ 94. 9.22	橿原市高殿町245（宮内）	三橋栄次	住宅建替	島田　敏男	36
75－12	5ＡＪＥ－U	436㎡	94.10.11～ 94.11.15	橿原市醍醐町43－5（宮西方官衙地区）	森口清信他	宅地造成	佐川　正敏	20～24
75－13	5ＡＪＢ	384㎡	94.11.10～ 94.11.28 94.12. 1～ 94.12. 8	橿原市高殿町（宮内）	橿原市	道路拡張	金子　裕之 橋本　義則	25～34
75－14	5ＡＪＫ－C	70㎡	95. 1.23～ 95. 1.27	橿原市縄手町199－4・192－1・6（宮内）	橿原市	歩道拡張	橋本　義則	未収録
75－18	5ＡＪＧ	200㎡	95. 3. 7～ 95. 3.27	橿原市四分町（宮西方官衙地区）	橿原市	四分団地造成	藤田　盟児	未収録
76	5ＡＪＧ－S・R	2050㎡	94. 8. 1～ 94.10. 5	橿原市四分町288・289（宮西方官衙地区）	橿原市	四分団地造成	佐川　正敏	7～12
77	5ＡＪＬ－E 5ＡＪＧ－T	900㎡	94.12. 1～ 95. 2. 6	橿原市四分町（宮西方官衙地区）	橿原市	四分団地造成	藤田　盟児	未収録

Tab.3　藤原宮の調査一覧

1　西方官衙地区の調査

A　第76次調査

（1994年８月～10月）

本調査は奈良県橿原市が四分町288・289番地において予定している住宅改良事業用地の造成に伴う事前調査である。調査区は東西50m、南北40mで設定し、東を若干拡張したので、調査面積は2050㎡となった。1994年８月１日から上土掘削を開始、同年10月５日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。本調査区は藤原宮西方官衙地区にあたり、宮西面南門の北東部、すなわち宮内先行条坊の五条西二坊東南坪に位置する。調査区の北では鴨公小学校の移転（第５～９次調査）や個人住宅の建設に伴い（第54－９、58－２、60－13、63－10次調査）、西では鴨公幼稚園の建設に伴い（第33次調査）、東では倉庫の建設などに伴い（第27－９、63－５、63－８次調査）、南では四分団地の建て替えに伴い、発掘調査が数次にわたって行われてきた。その結果、宮内先行条坊五条西二坊東南坪の北半には、四周を掘立柱塀ＳＡ1215・1216・6985・7000で囲まれた長方形の区画があることが判明した。この区画の北辺の塀ＳＡ1215は宮内先行条坊の五条々間路南側溝の内側に、東辺の塀ＳＡ6985は宮内先行条坊の西一坊大路西側溝想定位置の内側に、それぞれ位置するので、区画は先行条坊側溝の掘削後の宮直前期に設置されたと考えられている。本調査区では、その区画の南辺の塀ＳＡ7000の西半部と西辺の塀ＳＡ1216への曲がり角、さらにその区画の南の利用状況が明らかになると予想された。また四分団地にあった弥生時代の集落に北接する空間の利用状況についても、情報が得られると期待された。

遺　構

調査の結果、弥生時代から藤原宮期までの遺構を検出した（Fig.３）。なお、多くの土坑の所属時期は出土遺物の整理を待って決めたい。

藤原宮期とその直前の遺構　遺構は耕土・床土直下で確認できるが、本来の生活面はすでに削平されている（Fig.２）。掘立柱建物４棟（ＳＢ8200～8203）、掘立柱塀４条（ＳＡ1216・7000・8204・8205）がある。ＳＢ8200は調査区東南隅にある桁行５間以上（柱間寸法約2.1m）、梁行２間（柱間寸法約2.4m）の南北棟で、柱掘形は一辺1m強と大きい。ＳＢ8201は調査区南寄り中央にあり、桁行３間、梁行２間の東西棟で、柱間寸法は1.5～1.8mである。ＳＢ8202は調査区西南隅にあり、桁行３間、梁行２間の南北棟で、柱間寸法は1.5mである。北で若干西に振れ

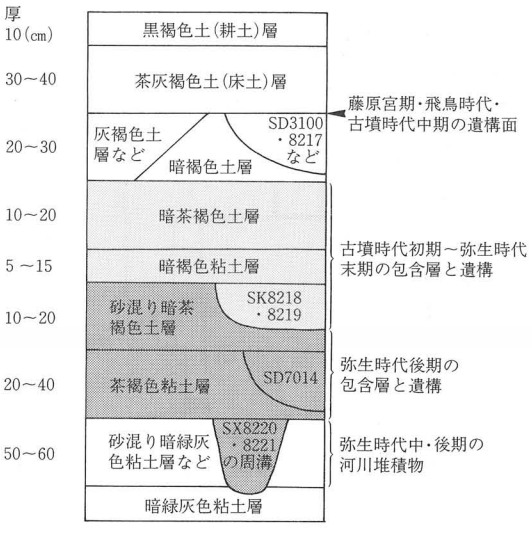


Fig.２　第76次調査基本層序模式図

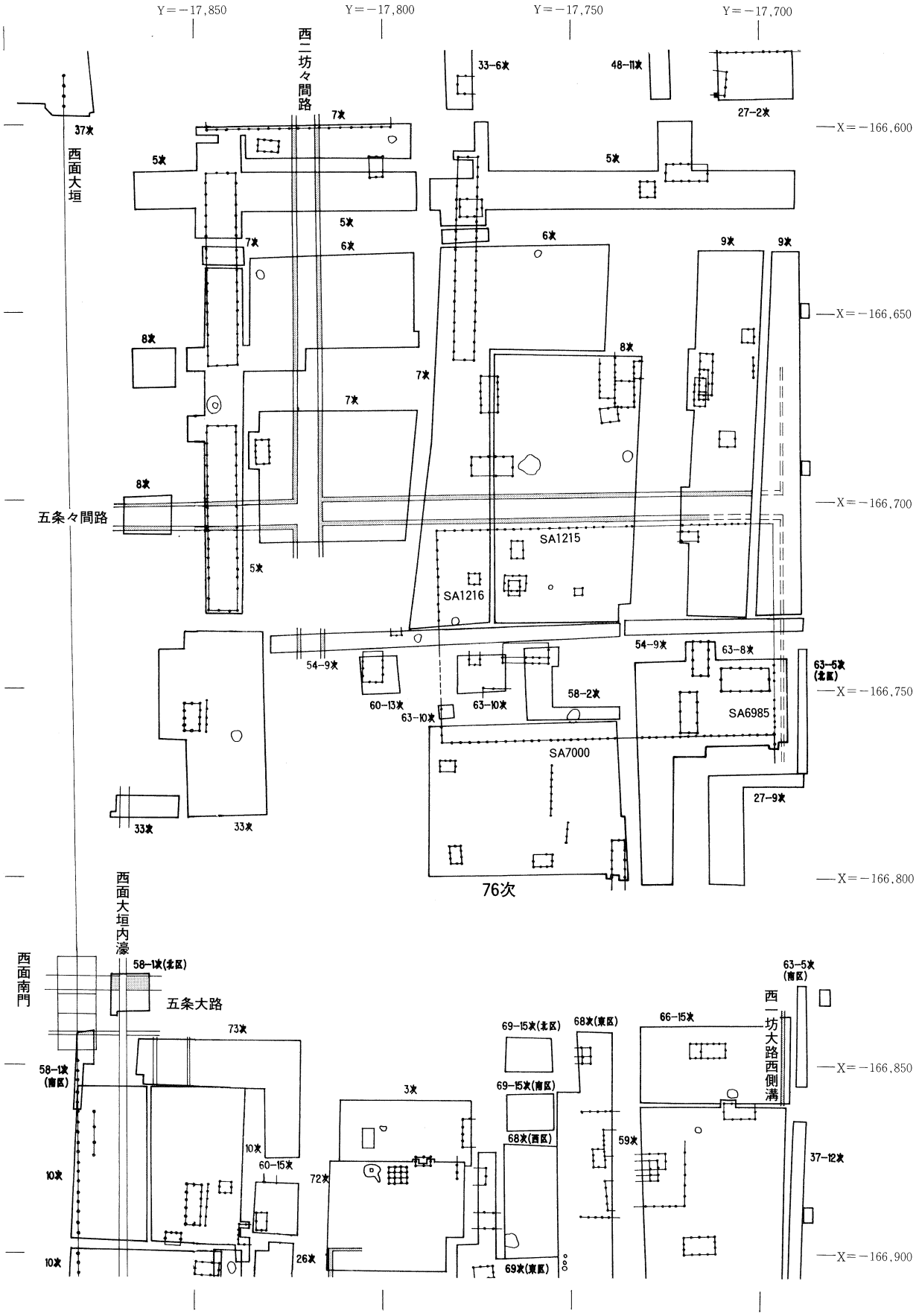


Fig. 3　第76次調査位置図および周辺調査の藤原宮期等の遺構（1：1500）

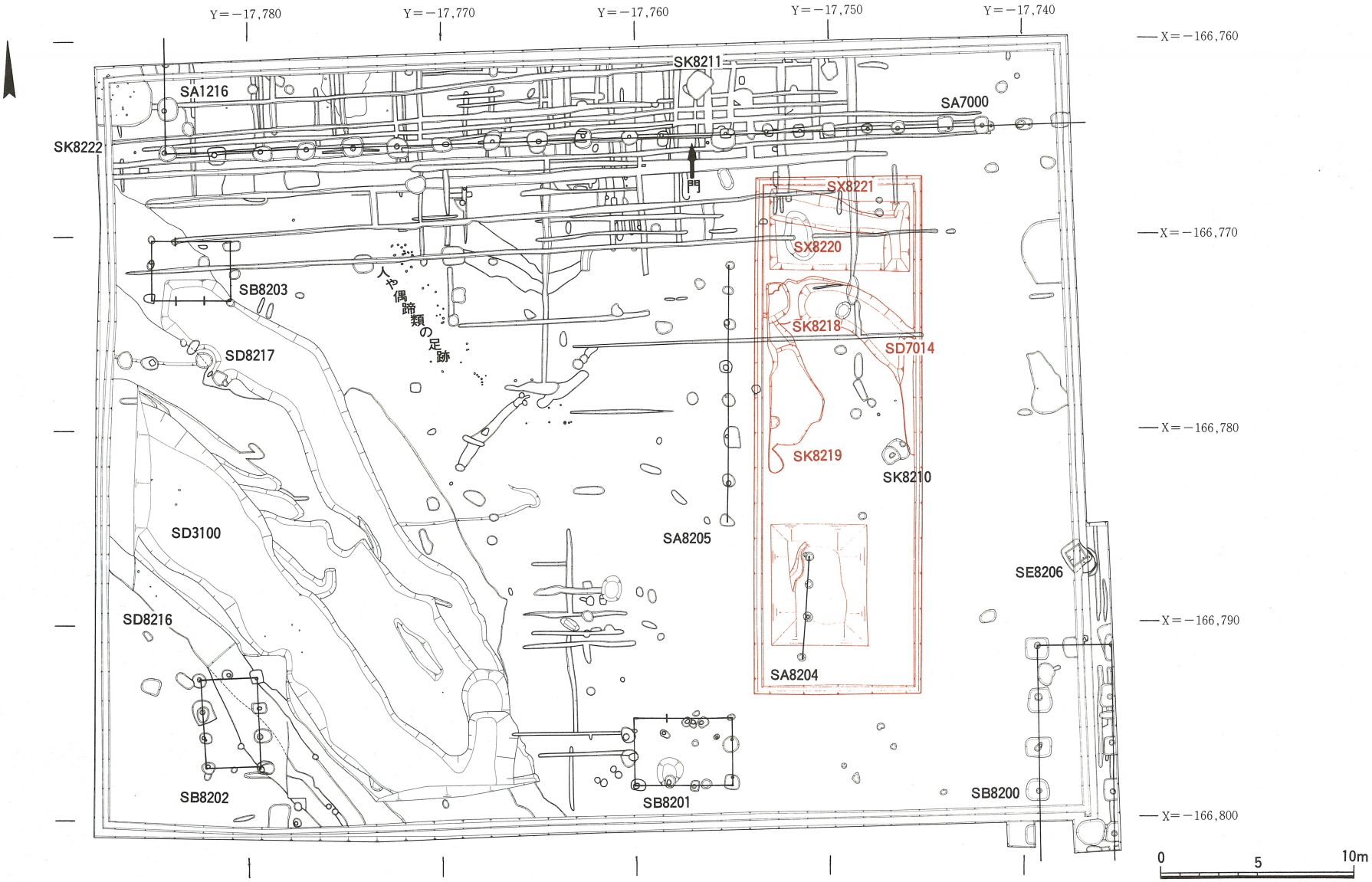


Fig. 4　第76次調査遺構図（1 : 300）

る。ＳＢ8203は調査区西寄り中央にあり、東西２間（約４ｍ）、南北２間（約３ｍ）で、柱間寸法は不揃いである。第63－８次調査で検出されたＳＡ7000の西半が、21間分検出できた。さらにこれが調査区西北隅で北に曲がり、第６次調査で検出されたＳＡ1216につながることが判明した。ＳＡ7000は柱間寸法が1.5～2.4ｍで、西寄りの掘形平面は東のものに比べて大きく、かつ深い。ＳＡ1216は２間分を検出した。その柱間寸法は2.1ｍである。ＳＡ8204はＳＢ8201の東北にあり、柱間寸法が1.5～2.1ｍの南北塀（３間）で、掘形は浅い。北で東に若干振れる。ＳＡ8205はＳＡ8204の西北にあり、柱間が1.5～2.4ｍの南北塀（７間）である。

飛鳥時代の遺構　井戸**ＳＥ8206**は調査区東壁中央の床土直下で検出した（Fig.５）。北で西に45°振れることから、その所属時期を飛鳥時代と推定している。掘形は一辺1.3～1.5ｍの方形で、深さは1.5ｍと浅い。井戸底は後述する弥生時代の河川ＳＤ7014の埋土である灰色砂層の上にあたる。井戸底に三枚組接ぎによる蒸籠組の井戸枠が一段分残されている。男木は長さ80～83㎝、幅18～24㎝、厚さ３㎝の板を材料とし、枘の長さは4.5～５㎝である。女木は長さ92～94㎝、幅24㎝、厚さ３㎝の板を材料とし、枘の長さは6.5～７㎝である。井戸の掘形の深さからみて、井戸枠は少なくとも三段分あったと推定される。井戸枠の内面に沿って、自然木の先を削って尖らせた木杭10数本を井戸底から地下１ｍほど打ち込み、井戸枠の外面に土と木切れを入れて裏込めして、井戸枠を固定していたらしい。井戸枠のうち２枚の井戸底に接していた面に、太枘穴が残っているので、これらは別の井戸枠もしくは建築部材を転用したと考えられる。この太枘は再利用の際に、すでに抜かれている。

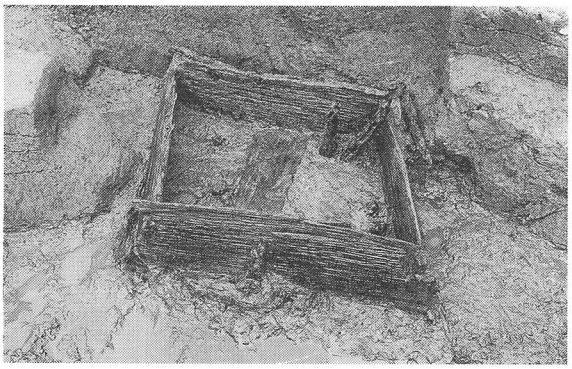


Fig.５　飛鳥時代の井戸ＳＥ8206（西から）

Fig.６　古墳時代の河川ＳＤ3100（北西から）

古墳時代の遺構　床土下の灰褐色土層を掘り下げ、現地表下0.7～１ｍで旧河川３条（**ＳＤ3100・8216・8217**）を検出した。いずれも東南から西北へ流れる。切り合いから、ＳＤ8217→3100→8216の順に新しくなる。ＳＤ8217は幅２ｍ前後、深さ0.5ｍで、その埋土には土師器のみを含む。ＳＤ3100は第33次調査でも検出されており、幅４～８ｍ、深さが最も深い所で２ｍ以上ある本格的な河川である。岸が崩落する危険があったので、川底の検出は断念した。その埋土の大半は砂層と礫層の互層からなる。そこから５世紀後半の土師器と須恵器、韓式土器が出土し、とくに埋土最上層からの出土量が最も多い。ＳＤ8216は幅約１ｍ、深さ10㎝程で、埋土には土器の細片を含む。なおＳＤ8217にほぼ平行して、人

と偶蹄類の足跡を多数検出した。

弥生時代の遺構　弥生時代の遺構・遺物を検出するために、下層調査区（面積243㎡）を設定した。基本層序灰褐色土層下の暗茶褐色土層とその下の暗褐色粘土層からは、弥生時代末期～古墳時代初期の過渡期の土器が出土した。それらを順次掘り下げて、砂混り暗茶褐色土層上面で土坑２基（ＳＫ8218・8219）を検出した。出土土器からみて、弥生時代末期～古墳時代初期の土坑である。砂混り暗茶褐色土層からは弥生時代後期の土器が多量に出土した（Fig.７）。その下位の茶褐色粘土層上面で旧河川1条（ＳＤ7014）を検出した。埋土の灰色砂層から弥生時代後期の土器が出土した。ＳＤ7014は第63－８次調査でみつかっている河川のつづきである。下層調査区の南北にさらに深掘区を設定した。その結果、まず北区では、砂混り暗緑灰粘土層上面で方形周溝墓２基（ＳＸ8220・8221）を部分的に検出した。ＳＸ8220の北側の溝がＳＸ8221の南側の溝となり、両者の東側の溝は南北方向に連続する。その一辺は６ｍ以上あり、残存する周溝の上幅は２ｍ、深さは1.5ｍである。砂混り暗緑灰色粘土層から暗緑灰色粘土層までの土層を削り出し、上に封土を盛ったのであろう。封土部分はすでに削平されている。周溝から土器片が１点出土したが、細片のため時期は特定できない。しかし、層位的にみれば、ＳＸ8220・8221は弥生時代後期のものと推定される。なおＳＤ7014より北の砂混り暗緑灰色粘土層から暗緑灰色粘土層までの土層は、後述する南区に比べて安定している。つぎにＳＤ7014より南は砂とシルト、粘土の互層の厚い堆積物が確認され、流れを何度も変えた旧河川の堆積土の一部であったことが判明した。堆積土からは弥生時代中～後期の土器と流木が出土した。

Fig.７　弥生時代後期土器の集中（西北から）

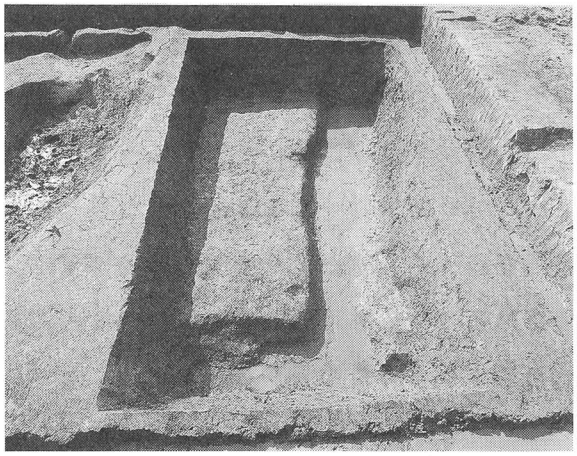


Fig.８　方形周溝墓ＳＸ8220・8221（東から）

まとめ

先行条坊五条西二坊東南坪の北半の区画　本調査によって、この区画の東西幅が87.5～88ｍ、南北幅が58.2～58.8ｍであることが判明した。南辺の塀ＳＡ7000は東西41間である。西から12間目が幅3.8ｍと広く、12間目の柱がＳＡ8205の延長上にあることから、ここが門だった可能性がある（Fig.４↑印）。北辺の塀ＳＡ1215は41もしくは42間、西辺の塀ＳＡ1216は推定25間である。さて区画の位置や規模は何を基準に設定されたのだろうか。ＳＡ1215の位置が先行条坊五条々間路に、ＳＡ6985の位置が西一坊大路に規制されていることから、この区画の造営時期は従来、

先行条坊の側溝を掘削した宮直前期に近い時期と考えられてきた。区画の東西幅87.5～88mは、藤原京の地割りの基準値である750大尺の⅓の250大尺である。区画の南北幅58.2～58.8mは、完数尺が得られないが、先行条坊五条大路北側溝と五条々間路南側溝の間の敷地のほぼ½にあたる。その後この区画内の建物配置が大きく改変されるとか、区画塀を切る新しい建物が建てられることはなく、この区画は先行条坊の西一坊大路を宮内道路とする藤原宮期にも存続した可能性がある。第63－8次調査では、この区画の東南隅のＳＡ6985が南へ少なくとも1間延びることが確認されている。しかし、ＳＡ6985はさらに南の第27－9次調査区までは延びていなかった。また、本調査区で検出したこの区画の西南隅で、ＳＡ1216が南へ延びることはない。したがって、この区画の南側に同規模の区画はない。また、区画の南側で検出された建物も少ない。藤原宮の西側の西面中門寄りの官衙については、馬寮が候補に挙げられている（『報告』Ⅱ）。平城宮では西面中門佐伯門に接してその南北に馬寮があり、さらに藤原宮西面中門の東南部でも桁行18～20間の長大な建物4棟が整然と建てられているからである。ともあれ、文字資料の発見を待って、官衙の機能に結論を下すことになろう。

推定飛鳥時代の井戸ＳＥ8206　井戸ＳＥ8206は、蒸籠組井戸としては飛鳥・藤原地域で最古の部類に属する。この井戸の時期をさらに絞り込む遺物はみつからなかった。本調査区にはＳＥ8206と同様の振れをもつ建物遺構はないが、約100m西方の第33次調査区にはＳＥ8206と同様の振れをもつ掘立柱建物ＳＢ3085～3088がある。あるいは両者の間になんらかの関連があるのかもしれない。

古墳時代の旧河川ＳＤ3100の土器はどこから捨てられたか　ＳＤ3100の埋土最上層は暗褐色土で、出土土器には完形品が多く含まれており、しかも遠方から流されてきた形跡がない。本調査区でこの時期の住居跡はみつかっていないが、本調査区の南で行われた第3次調査で、土坑ＳＫ580と井戸ＳＥ555・669から同時期の土師器と須恵器が出土している（『報告』Ⅲ）。したがって、四分遺跡には土坑や井戸を含む古墳時代の集落があって、そこからＳＤ3100に土器が廃棄された可能性が高い。

弥生時代四分遺跡の北側の様相　弥生時代後期の土器を比較的多く含む土層は、下層調査区以外に、古墳時代の河川ＳＤ3100の両岸断面でも確認できるので、四分遺跡の北側にも後期のある段階の生活廃棄物の廃棄場があったようだ。つぎに第69－12次・第71－1次調査などによって、弥生時代四分遺跡の北側には、方形周溝墓がまとまって存在した可能性が高まっている。今回検出した2基の方形周溝墓ＳＸ8220・8221は、それらの一群をなすものであり、従来検出されたもののなかで、集落に最も近接している。その時期は層位的にみて、弥生時代後期と推定される。さらに下層調査区の深掘南区の土層の堆積状況からみて、弥生時代中期から後期にかけてのある段階に、四分遺跡の北側で、洪水が頻繁に発生したと推定される。

B　第75－6次調査

（1994年7月～8月）

本調査は、市営住宅の建設に先立ち、橿原市四分町で実施したものである。調査地は、藤原宮西方官衙地域にあたり、第69次東区の南、第69次西区の東に位置する。今回の調査では、藤原宮期における当地域の利用状況と、下層の弥生時代集落の広がりを確認することを目的とした。東西7m、南北12mの範囲を上層と下層にわけて調査した。調査面積は84㎡である。

遺　構

上層遺構　調査区の基本的層序は、上から現代の盛土、水田の旧耕土・床土・黄灰色砂質土・灰褐色微砂質土の順であり、上層遺構は、灰褐色微砂質土の上面で検出した。

上層で検出した主な遺構には、小規模な掘立柱建物ＳＢ8340と、東西溝ＳＤ8335がある。

ＳＢ8340は、桁行3間、梁行2間の南北棟建物である。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m前後でばらつきがあり、直径約10cmほどの柱痕跡が残る。柱穴出土の遺物が少ないため、その所属時期は明らかではないが、藤原宮期直前から藤原宮期にかけての遺構と考えられる。

東西溝ＳＤ8335は、幅約1m、深さ約0.1mの浅い溝であるが、周辺の調査区では延長部分を検出しておらず、その性格は不明である。7世紀後半の土器が少量出土した。

下層遺構　東西5.5m・南北11mの調査区で、下層の調査を実施した。層序は、藤原宮期の遺構を検出した灰褐色微砂質土から下に順に、明黄灰色粘質土、黒褐色土、黄色土混黒褐色土、青灰色砂質土（地山）である。弥生時代の遺構検出は青灰色砂質土上面で行った。その結果、弥生時代中期に属する土坑や溝などがみつかり、調査地北端の井戸ＳＥ8332からは特に豊富な遺物が出土した。

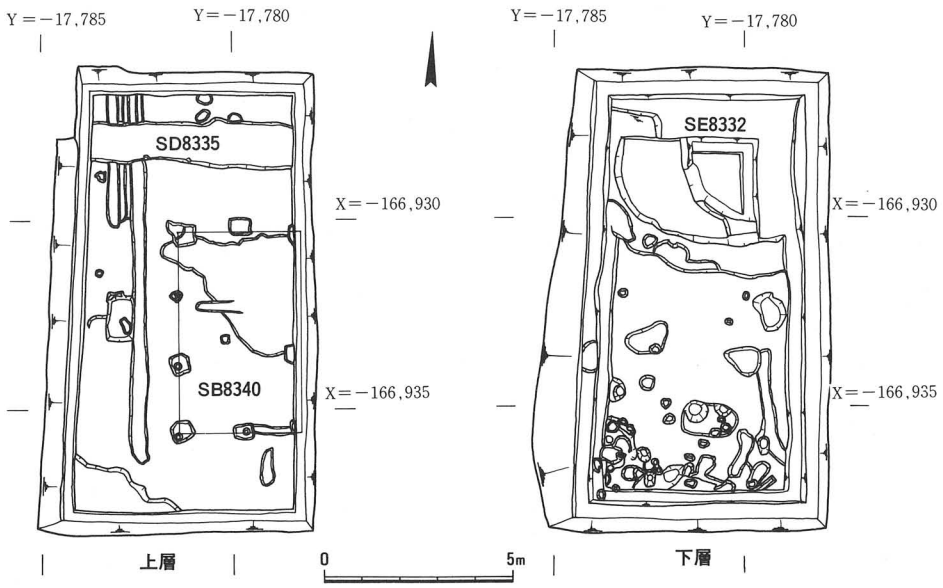


Fig.9　第75－6次調査遺構図（1：200）

ＳＥ8332は掘形上面が直径5.5ｍ内外の円形に近い素掘り井戸で、深さは1.7ｍである。底から30㎝ほどは礫混青灰色砂に達しており、特に湧水が激しかった。この井戸からはおもに弥生中期前半の土器に伴って木製の鍬・斧柄・腰掛・容器、用途不明の鹿角製品、さらにクマネズミ属（Rattus sp.）頭骨・穿孔されたイノシシの下顎骨などが出土した。

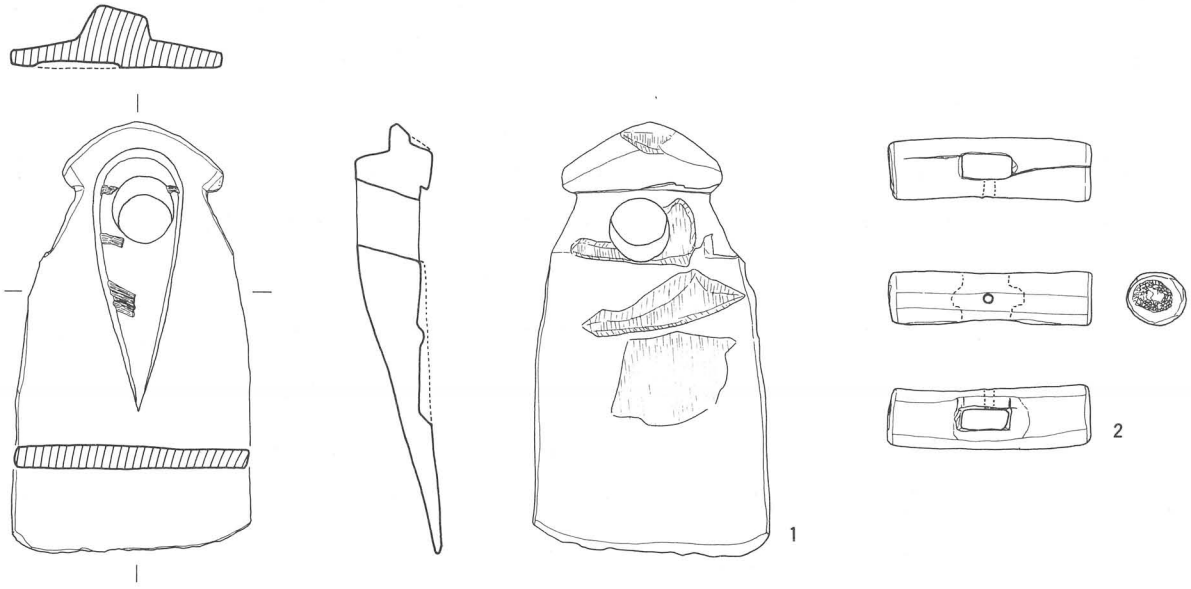


Fig.10　ＳＥ8332出土木製品（1）（1：4）・鹿角製品（2）（1：3）

藤原宮第75-6次調査（四分遺跡）における寄生虫卵・植物遺体分析

試料と方法　試料は、井戸ＳＥ8332の上部・中部・下部および地山の計４点である。

寄生虫卵分析は、試料１㎤にフッ化水素酸処理を施しプレパラートを作製して行った。１㎤あたりの出現数は計数比から算定した。

花粉分析は、試料に水酸化カリウム処理、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の各処理を施し行った。花粉出現量（定量）については、その計数比から試料１㎤の出現数を算定した。

種実同定は各々100ccを0.25㎜の篩で水洗選別し、分類を肉眼および実体顕微鏡下で行った。

寄生虫卵分析（Tab.４）　寄生虫卵は回虫類、鞭虫類、マンソン裂頭条虫が検出された。中部において試料１㎤あたり1000個以上寄生虫卵が検出され、下部においても500個以上であった。地山からは何も検出されなかった。中部と下部では鞭虫類卵が多い。寄生虫卵のかなりの汚染

分類群		(1/10cc中)	5AJG-WF83大土坑			5AJG-WF84
学名	和名	部位	上部	中部	下部	大土坑地山
Ascaris	回虫類	卵殻	4	3	8	
Trichuris	鞭虫類	卵殻	8	102	45	
Diphyllobothorium mansoni	マンソン裂頭条虫	卵殻	2	7	9	
Total	計		14	112	62	0
	(1cm3に算定)		(140)	(1120)	(620)	(0)

Tab.４　寄生虫卵分析結果

およびなんらかの糞便の堆積物が、ＳＥ8332に堆積しているとみなされる。

花粉分析（Fig.11）　結果は図に示した。各試料とも樹木花粉より草木花粉が多い。上部ではイネ属型を含むイネ科が優占する。中部と下部ではヨモギ属やオナモミ属が多い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が主に優占する。

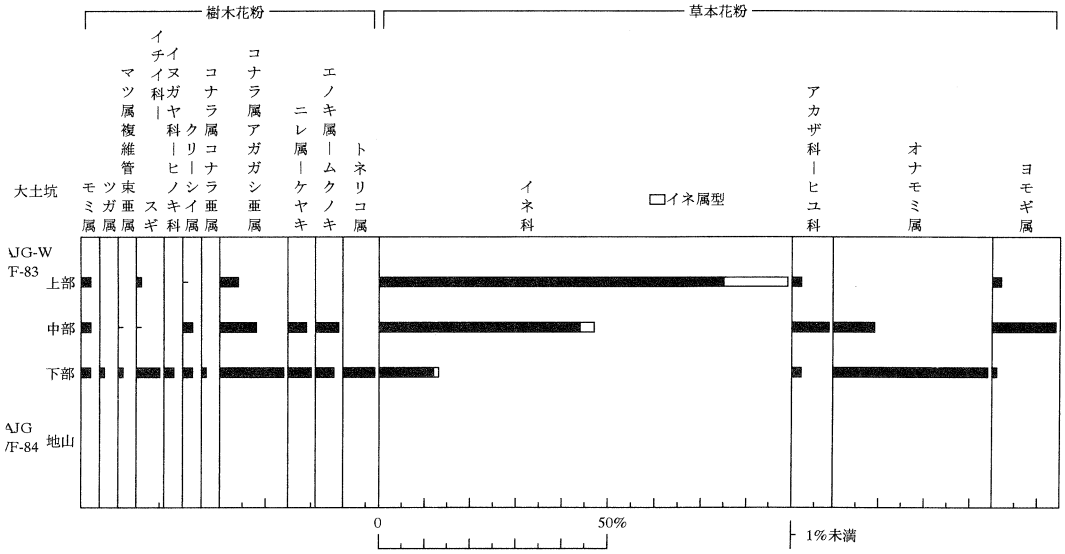


Fig.11　主要花粉組成図

種実同定（Tab.5）　種実は数量が少ない。ウリ類・イネの食用となる栽培植物の種実がやや多い。他はイネ科・タデ属・ナデシコ科などの雑草類が検出された。

分類群			5AJG-WF83大土坑			5AJG-WF84
学名	和名	部位	上部	中部	下部	大土坑地山
herb	草本					
Oryza sativa L.	イネ	穎	17	15		
Setaria	エノコログサ属	穎			1	
Gramineae A･B	イネ科A･B	穎	4	3		
Fatoua villosa Nakai	クワクサ	種子	1			
Scirpus	ホタルイ属	果実	2	2		
Cyperus	カヤツリグサ属	果実			1	
Polygonum A･B	タデ属A･B	果実	2	2		
Chenopodium	アカザ属	種子	1			
Amaranthus	ヒユ属	種子	1			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	3	7	5	
Torilis japonica DC.	ヤブジラミ	果実		5		
Perilla	シソ属	果実		1		
Solanaceae	ナス科	種子	1		1	
Cucumis melo L.	ウリ類	種子	10	1	1	
		破片	4	3	1	
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実	8	2	4	
Total	合計		54	41	14	0

Tab.5　種実同定結果（試料100cc中）

推定される植生と環境（Fig.12）　ＳＥ8332の堆積物の分析結果では、鞭虫類を主とする寄生虫卵の出現密度がかなり高いため、多くの糞便の堆積が含まれているとみなされる。肝吸虫・横川吸虫が含まれていないため、寄生虫卵組成からヒトの糞便に起因するかどうか判断できない。花粉分析ではヒトの糞便に起因する食用植物の花粉は認められないといってよい。種実で

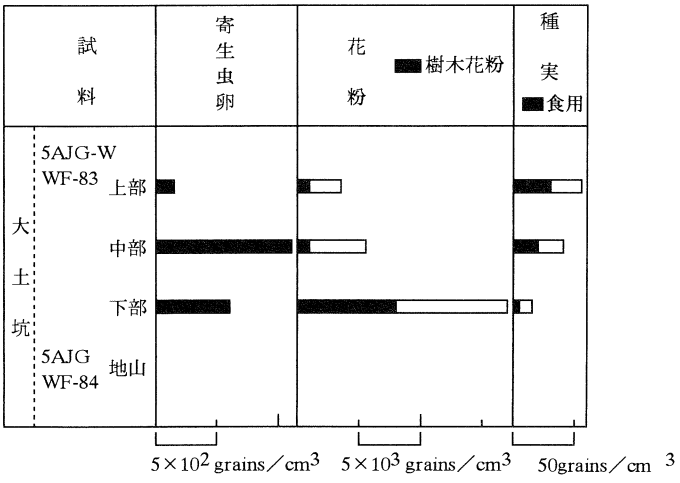


Fig.12　寄生虫・花粉・種実出現図

は、ウリ類の種子が含まれるものの、イネは穎（籾殻）であり、雑草類も多い。また、層位的な変化において寄生虫卵・花粉・種実の出現傾向は一致しない。ヒトの糞便だとすれば、一度乾燥した分解的な環境下におかれ弱く小さな吸虫類の卵が分解した後、汚染的に再堆積した可能性を考えねばならない。この場合、近接して高密度の汚染源があったか人口密度が高く、その汚染域であったと考えられる。

人体寄生虫である回虫・鞭虫と飼育されたブタに寄生するブタ回虫・ブタ鞭虫の卵殻は、形態的に区別が困難である。回虫類と鞭虫類はヒトとブタにのみセットで感染するため、これらがブタ起因の寄生虫卵である可能性も考えねばならない。マンソン裂頭条虫はイヌ・ネコ・キツネなどに感染する寄生虫であり、ヒトは中間宿主となる。このためここではイヌに起源するとみなされる。よって、ＳＥ8332の埋没段階にブタやイヌの糞を集めて投棄した可能性もあると考えられる。これらの仮定に立つならば、四分遺跡ではかなりの数のブタとイヌが家畜として飼われていた可能性があろう。ただし、現状では対比資料がなく仮定的ないし想定的な解釈を抜け出しえない。

周囲の植生であるが、中部と下部からはオナモミ属やヨモギ属が繁茂し、やや乾燥した状態であったと推定される。上部では、イネ属型を含むイネ科の花粉が多いため、水田が近接して広く分布するようになったとみなされる。森林植生としては、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が地域的な森林として分布していた。ただし、上位に向かってコナラ属アカガシ亜属は減少する。トネリコ属は湿地林を形成するため、トネリコなどの湿地林が近くにあったことが推定される。

《参考文献》

奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』 1992年

金子清俊・谷口博一『新版 臨床検査講座 8 医動物学』医歯薬出版 1987年

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard(1992). Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science 19.

金原正明「便所堆積物からさぐる古代人の食生活」『助成研究の報告４』味の素食の文化センター 1994年

金原正明「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店 1993年

（金原正明・金原正子・中村亮仁）

C　第71－15次調査

（1994年３月）

本調査は個人住宅の新築にともなう事前調査である。東西４ｍ、南北20ｍの調査区を設定した。調査地は宮内西方に位置する。調査区の近辺では、かつて第27－６次調査、第66－２・３・４次調査において、中世環濠集落の環濠を検出し、環濠の規模を推定している。本調査区は第66－３次調査区と第66－４次調査区のほぼ中間に位置し、本調査でも中世環濠の検出が期待された。基本的な層序は、地表面から耕土・床土・暗灰褐色粘質土・淡灰色砂質土（地山）の順で、遺構を検出したのは暗灰褐色粘質土面である。

検出した遺構は溝１条と土坑４個である。

ＳＤ7293は幅約4.4ｍ、深さ70㎝の東西溝である。溝内から軒平瓦6641Ｃ形式・6275Ａ形式と多量の羽釜類や14世紀主体の土師器皿・灯明皿が出土した。出土位置、出土遺物から考えて、第66－３・４次で検出した中世環濠と考えて間違いない。

４つの土坑のうち、北端の土坑からは14世紀代の瓦器が出土した。その他の３つの土坑は当初、建物の柱穴と思われたが、その東西に並行する柱穴はなく、深さもそれぞれ異なることから現時点では建物の柱穴とは考えられない。

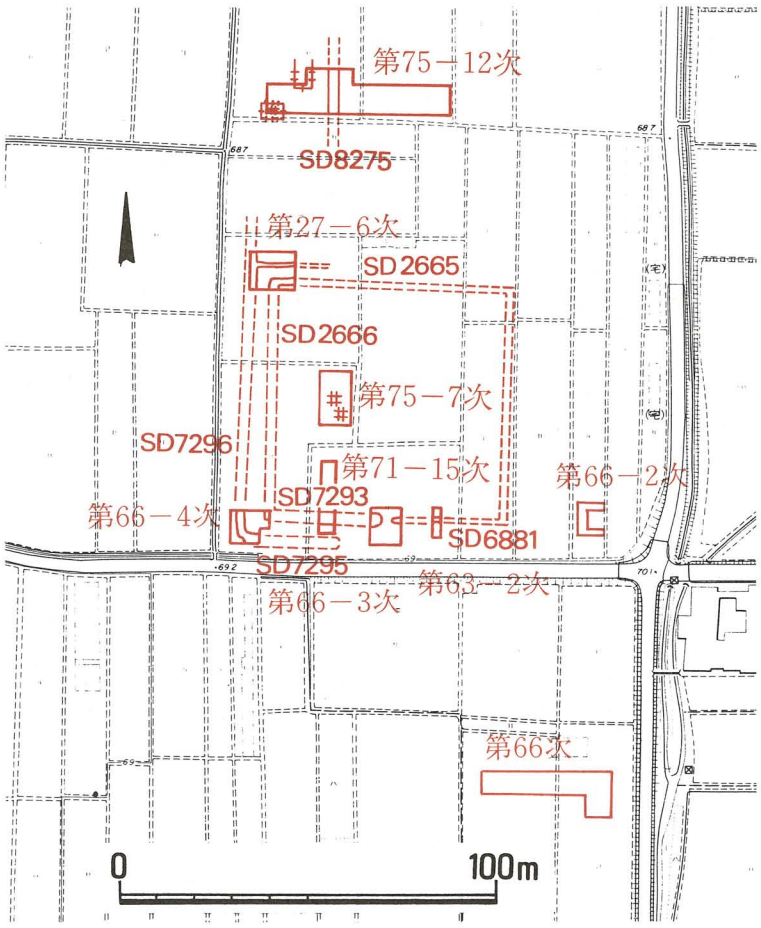


Fig.13　第71－15次、75－２・７次調査位置図（1：2000）

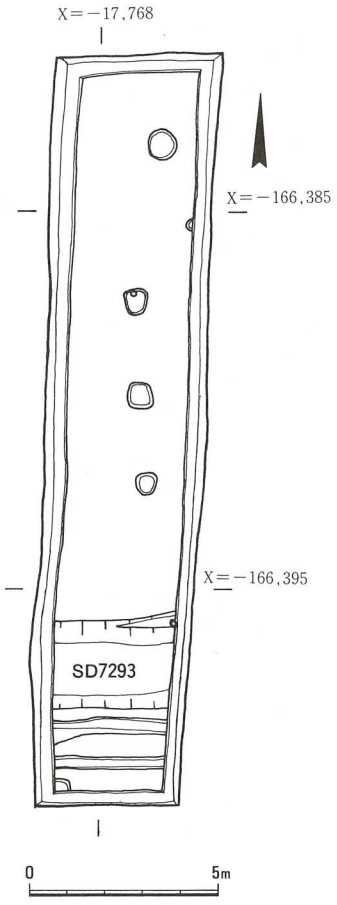


Fig.14　第71－15次調査遺構図（1：200）

D　第75－７次調査

（1994年７月～８月）

本調査は、作業小屋建設に先立ち、橿原市縄手町で実施したものである。調査地は、醍醐池の西方で藤原宮西北部にあたる。しかし、周辺の調査では、後世の削平が著しく、宮に関する遺構はほとんど検出されていない。ただし、第27－６次調査、第63－２次調査、第66－２・３・４次調査では、14世紀頃の土器をともなう二重の環濠をめぐらした方形の区画の存在が判明している。今回の調査地は、この方形の区画内中央西寄りの位置にあたる。南北15m、東西８mの範囲に調査区を設け、調査面積は120㎡である。

調査区の基本的な層序は、上から水田耕土・床土、黄褐色ないしは灰褐色砂質土の地山となる。しかし、床土の直下から掘り込まれた多数の土坑による撹乱が著しく、遺構は灰褐色砂質土の上面で検出した。

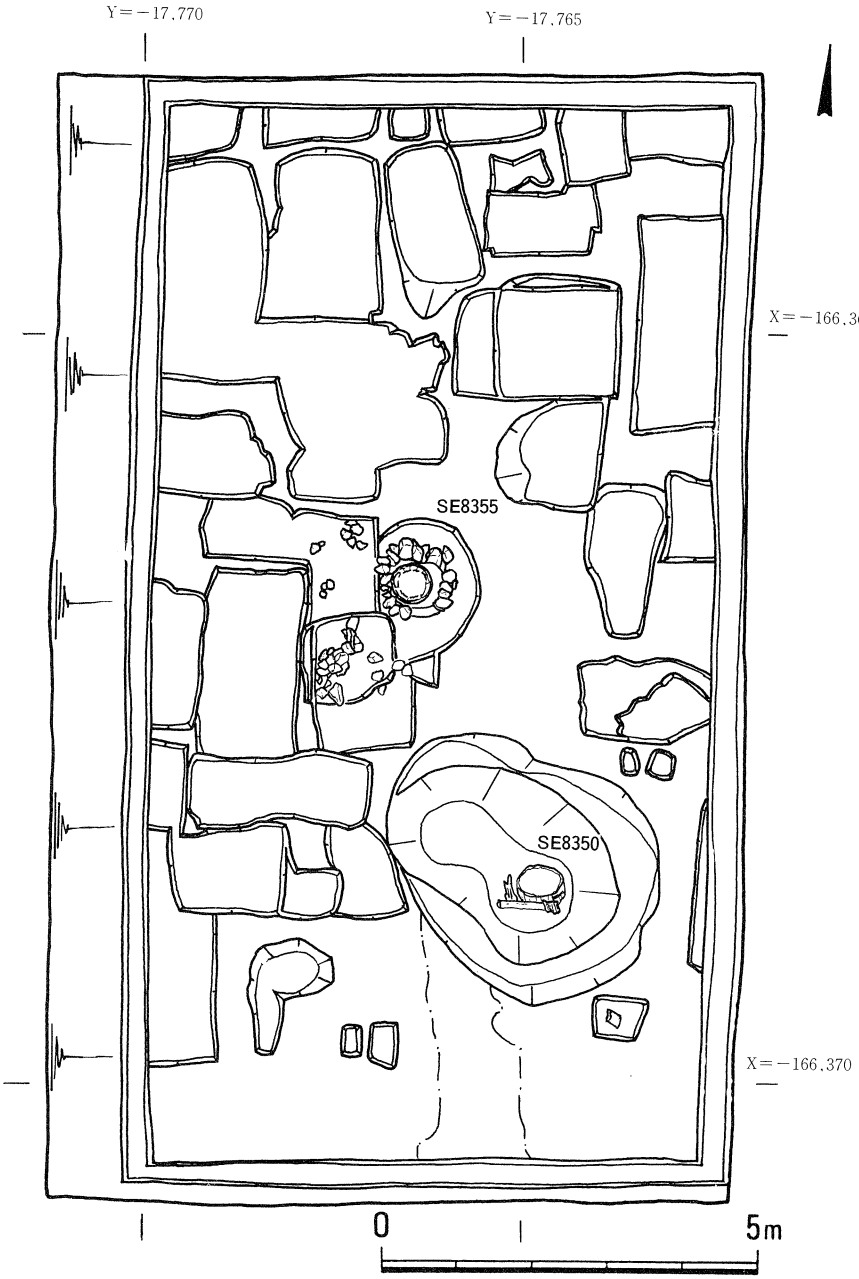


Fig.15　第75－７次調査遺構図（１：100）

検出した遺構には、井戸２基と多数の方形をなす土坑群がある。

井戸ＳＥ8350は、大形の円形掘形をもつ方形縦板組横桟どめの井戸である。掘形の大きさは、掘削時には直径3.2m、深さ2.7mほどであったとみられるが、井戸枠を抜き取る際に北西方向から穴を掘ったために、最終的には長径約４mに広がっている。井戸枠はほとんど抜き取られ、最下段の横桟の南半分と一部の縦板が残っていたにすぎない。縦板の幅は約20cmあるが、厚さは5mm程度のごく薄いものである。井戸底に、水溜に使われた大小の曲物３箇が遺存しており、このうち上段と中段の曲物の外面に墨書が認められた。中段の

それは、「承安四年十月　□□□ 七□ □□ [貞カ] 」と判読できる。抜取り穴から多数の瓦器と土師器が焼土とともに出土した。

井戸ＳＥ8355は、円形掘形をもつ円形石組井戸である。掘形の大きさは、直径２ｍ、深さ2.4ｍほどであるが、湧水はあまり認められない。石組の内法の直径は約0.8ｍあり、人頭大から拳大の川原石を積む。底に曲物を３箇利用した水溜があることを確認したが、石組が崩れる可能性があったため最下段までは掘り下げなかった。少量ではあるが13世紀頃の土師器などが出土した。

これ以外に、調査区の全域で多数検出した方形ないしは長方形を呈する土坑群は、遺物が乏しくその所属時期を決定できない。しかし、土層観察によれば大半は床土直下から掘り込まれており、比較的新しい時代の遺構と推定される。

井戸ＳＥ8350の抜取りからは、多数の瓦器椀・小皿、土師器小皿・羽釜と、鉄釘３本が焼土・壁土とともに投げ捨てられた状態で出土した。土器はいずれも12世紀後半の特徴をもつものであり、井戸底の水溜として利用されていた曲物に書かれた「承安四年」（1174）の墨書銘とも矛盾しない。縦板として用いられた板が曲物の素材と推定される厚さ５㎜内外の薄いものであることから、この井戸の存続年数もあまり長いものとは考えにくく、今後、この時期の土器編年の実年代を考える上で格好の材料となろう。

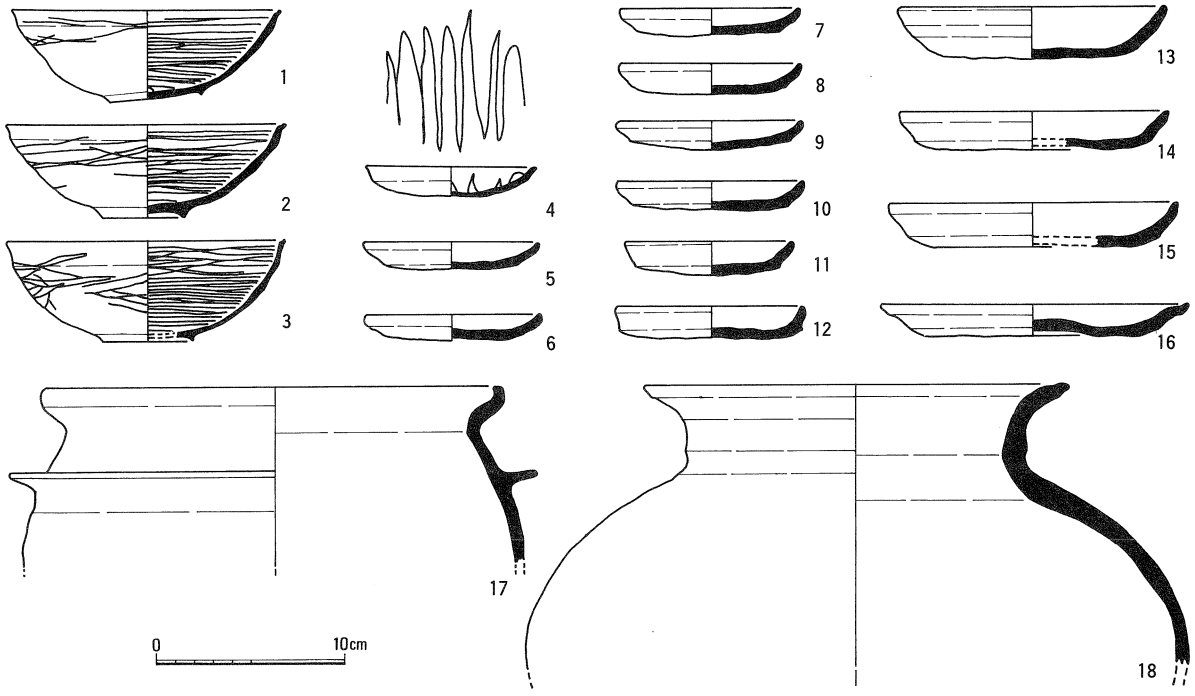


Fig.16　ＳＥ8350抜取穴出土土器（１～４瓦器　５～17土師器　18陶器）

E　第75－12次調査

（1993年10月～11月）

本調査は奈良県橿原市醍醐町43－3・5・6・7番地において予定されている宅地造成（盛土・整地）、ならびに個人住宅建設に伴う事前調査である。調査面積は、調査区を東西50m、南北8mで設定し、北側で部分的に拡張したので、合計436㎡であった。1994年10月11日から耕土・床土掘削を開始し、同年11月15日に埋め戻しを完了、調査を終了した。

本調査区は藤原宮西方官衙地区の北寄りにあたり、東には内裏跡に作られた醍醐池が望める。また本調査区の南では宅地造成や個人住宅の建設に伴って、発掘調査が実施されてきた。それによって、鎌倉時代に存在した二重の環濠を巡らす土豪の居館と推定される遺構がみつかった。環濠内部の建物は後世の削平によって明かでなかったが、第75－7次調査（本書p.18・19所収）で石組井戸がみつかり、環濠内部に生活空間があることが判明した。さらに井戸底の曲物には「承安四年（1174）十月」の墨書銘があり、環濠居館に関わる遺構および遺物の年代の上限が、従来考えられていたより若干古くなった。しかし、一連の調査では、藤原宮期の遺構がほとんど確認されていない。これについてはこの付近で後世に大規模な地下げがあり、古代の遺構の多くがすでに削平されてしまったと推定されている。したがって、本調査区でも平安時代末から鎌倉時代（12世紀後葉～14世紀）の遺構や遺物が主としてみつかるものと予想された。

遺　構

基本層序は上から耕土（厚さ20cm）、床土（厚さ10cm）、地山の黄褐色土層（厚さ20cm）、暗褐色土層（厚さ15cm）である。さらに後述する井戸ＳＥ8272の調査によれば、以下数枚の土層と粘土層を経て、地表下1.2mで砂層に達する。この砂層の下は礫層であろう。すべての遺構は黄褐色土層上面で検出した。検出された遺構は古墳時代から室町時代頃までのもので、なかでも平安時代末期～鎌倉時代初期のものが予想通り主体であった（Fig.17）。以下、所属時代ごとに遺構を説明する。

古墳時代の遺構　調査区の東端で検出した斜行溝ＳＤ8271である。その方位の振れから所属時期を推定した。

藤原宮期の遺構　掘立柱南北塀ＳＡ8270である。後述する平安時代末期～鎌倉時代初期の建物遺構と比べて、柱掘形が方形（一辺30cm）であることから所属時期を推定した。柱間寸法は2～2.1m（7尺）で、6間分を検出した。ただし、その方位は北で東に振れる。

平安時代末期～鎌倉時代の遺構　掘立柱建物2棟、南北溝1条、井戸1基、土坑数基を検出した。

ＳＢ8273は桁行4間、梁行3間に復元できる東西棟で、柱間寸法は1.4～1.6mである。柱掘形は直径30cmの円形である。この中央に石組井戸ＳＥ8272が位置するので、これは井戸を覆う建物、すなわち井戸屋形である。

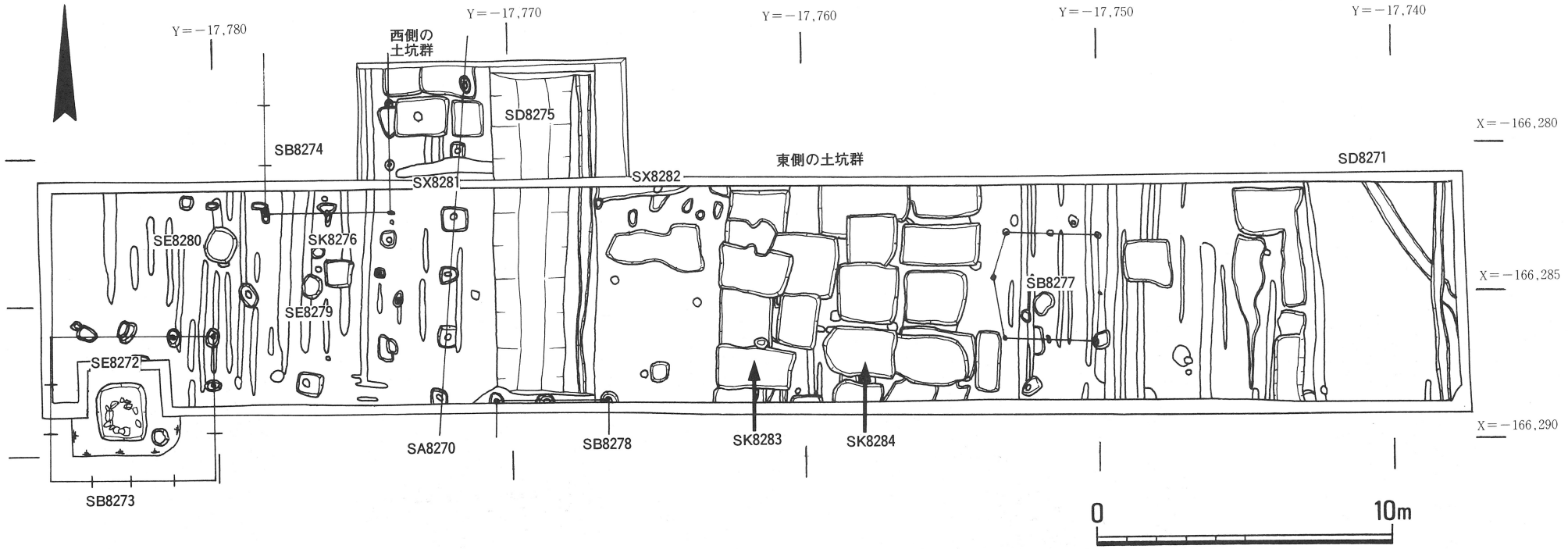


Fig.17　第75－12次調査遺構図（１：200）

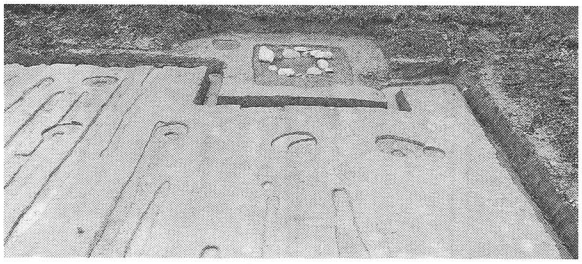


Fig.18　井戸屋形ＳＢ8273（北から）

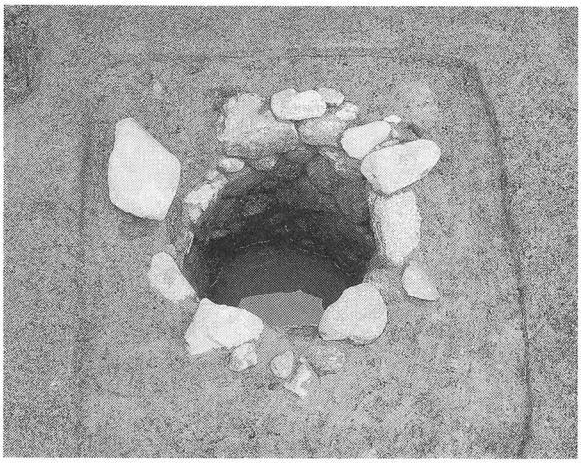


Fig.19　石組井戸ＳＥ8272（北から）

Fig.20　東面環濠ＳＤ8275（北から）

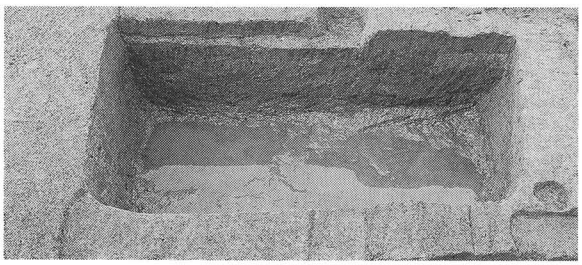


Fig.21　大型土坑ＳＫ8283（南から）

ＳＥ8272は下端に曲物を三段重ねで置き、その上の大半を人頭大から一抱えもある石を積み上げて構築した、深さ２ｍの井戸である。掘形は石組部分が東西1.5ｍ、南北２ｍの長方形で、曲物部分が円形である。曲物下端は砂層に達しており、現在でもこんこんと水が湧き出す。石組の埋土からは瓦器羽釜や土師器小皿、カメの甲羅がなど出土した。

ＳＢ8274は桁行３間以上（柱間寸法1.6～２ｍ）、梁行２間（柱間寸法2.1ｍ）の南北棟である。柱掘形は円形で、直径15㎝と小さい。

ＳＤ8275はＳＢ8273・8274の東側にある南北方向の素掘り溝である。その縦断面形は逆台形で、上幅が2.5ｍ、底幅が0.9～1.0ｍ、深さが1.1ｍである。埋土からは瓦器羽釜・小皿、土師器片口・小皿などが多量に出土した。埋土に純粋の砂層を含まないので、これは頻繁な流水を伴う水路の類ではなく、環濠の一部とみられる。

ＳＫ8276はＳＢ8274の南側に掘られた平面形が長方形の土坑である（Fig.22）。その底面に完形の瓦器碗７点と瓦器小皿・土師器小皿各１点が一括して埋められていた。

室町時代以後の遺構　掘立柱建物２棟、井戸２基、土坑多数を検出した。

ＳＢ8278は南北棟の北妻で、梁行２間、柱間寸法は1.2～2.0ｍである。ＳＤ8275が埋没してから建てられている。

ＳＢ8277は東西、南北ともに２間（柱間寸法1.5ｍ）の建物で、柱掘形は直径15㎝の円形である。これはＳＢ8273・8274やＳＤ8275から一定の距離があるので、当該期に所属するものと推定した。

ＳＥ8279・8280は、それぞれ直径1.2ｍ、0.7ｍで、深さ１ｍ以上の素掘りの井戸である。埋土からは瓦器片などが出土した。

ＳＤ8275の東西にあるＳＫ8283・8284などの東側の大型土坑群は、幅９ｍの範囲に南北に分布し、３～４列からなる帯状をなす。各土坑開口部の平面形は、長辺2.5ｍ前後、短辺1.5ｍ前後、深さは0.8～1.0ｍで、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である（Fig.21）。土坑の埋土は埋め戻したような堆積をし、土坑同士は相互に切り合う。埋土からは瓦器片や中国産磁器、宋銭などが出土したが、底面から完形品が出土することはなかった。これに対して、西側の大型土坑群は平面形が東側のものに比べて小さく、浅い。以上のほか、不整形土坑ＳＸ8281・8282や単独の柱穴、耕作溝多数などを検出した。埋土からは瓦器片や木炭片が出土した。

遺　物

土器は藤原宮期のものが数点で、12世紀中頃～14世紀の瓦器と土師器が大多数を占める。なかでもＳＫ8276底部に12世紀中頃の瓦器椀・小皿と土師器小皿が一括して埋納されていた（Fig.22）。うち瓦器椀３点が入子状に重なっていた。４点の瓦器椀の見込と２点の底部外面に「×」印を焼成後に針書きしている。なおＳＥ8272掘形・埋土の瓦器は13世紀末～14世紀で、ＳＤ8275埋土の瓦器は12～14世紀のものである。さらに中国産（宋代か）青磁椀の破片がＳＫ8284などの大型土坑群とＳＤ8275の埋土、中国産白磁皿の破片がＳＤ8275から出土した。

瓦はＳＥ8279の埋土から藤原宮式軒平瓦6643Ｃが出土したほか、数片の丸瓦と平瓦がある。

銅銭は宋銭で、「熙寧元寶」（1068年初鋳）がＳＫ8284から１点、「元符通寶」（1098年初鋳）が他の大型土坑から１点出土した。

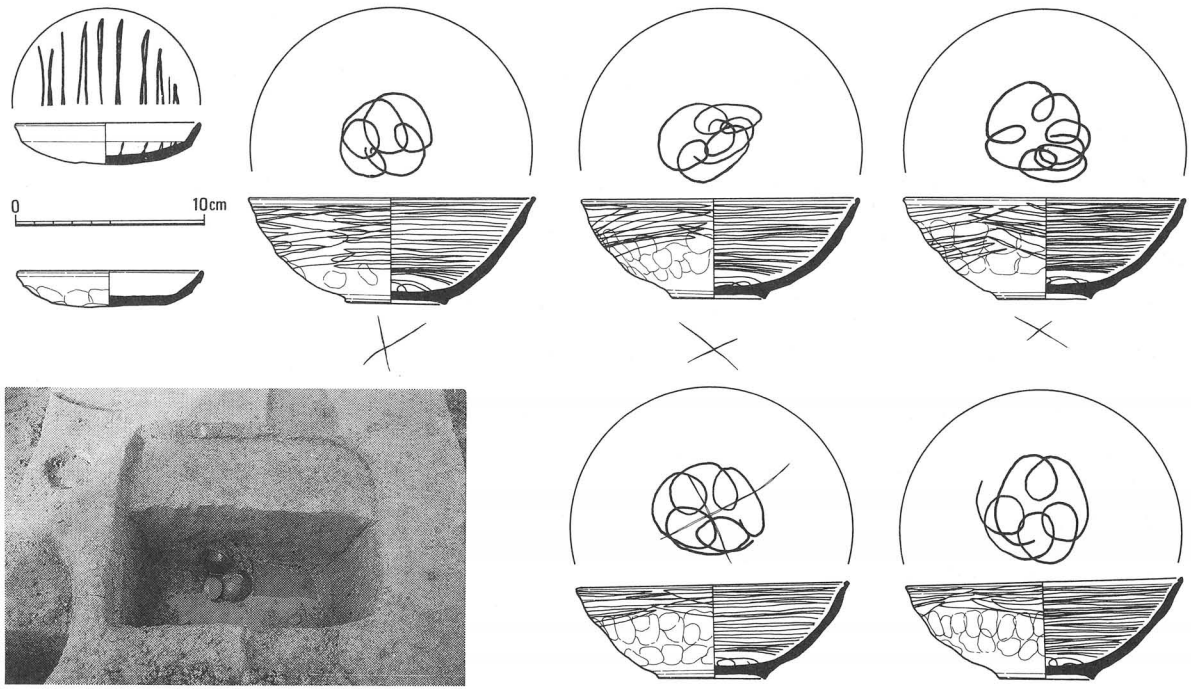


Fig.22　土坑ＳＫ8276出土瓦器と出土状況（左下写真）

まとめ

藤原宮期の遺構はなぜ希薄か　藤原宮西方官衙地区は東方官衙地区に比べて、遺構密度が低い。とくに西方官衙地区の北部では、藤原宮期の遺構がほとんどみつかっておらず、本調査でも然りである。これについては従来から後世の「地下げ説」が指摘されていた。後世の地下げが相当深く、藤原宮期の遺構が大部分削平されたという可能性である。確かに平安時代末期の環濠に関わる遺構も、すでに生活面が失われており、またＳＡ8270とＳＢ8273の柱穴の深さは15～20㎝と、平面形の大きさに比べて浅すぎるし、さらにいわゆる耕作溝も他の調査地のものと比べて浅すぎる。

ＳＥ8279から出土した藤原宮式軒平瓦などは、かつて本調査区に藤原宮期の生活面がまがりなりにも存在したことを示そう。しかし、その数量たるや、ＳＥ8272とＳＤ8275という掘形の深い遺構からのものを含めても、微々たるものである。したがって、藤原宮期のこの付近に建物があまり建てられないまま、平城遷都を迎えたという可能性も考えられよう。今後、藤原宮・京の地形的環境を踏まえた、当時の都市計画と実際の土地利用の現状についての考察が必要である。

平安時代末期（12世紀中頃）につくられたもうひとつの環濠　ＳＤ8275はその構造と周辺の遺構からみて、一重の環濠の一部と推定される。つまりＳＢ8273・8274、ＳＥ8272は、東をＳＤ8275に囲まれた内部施設の可能性が高い。つぎにその年代の問題である。環濠などの施設は、ＳＫ8276出土の瓦器の年代から12世紀中頃に設置され、ＳＥ8272とＳＤ8275出土の瓦器の年代から14世紀まで存続したとみられる。これらの瓦器の年代が本調査区のすぐ南で発見された二重の環濠や石組井戸出土の瓦器の年代と共通することからみて、ＳＤ8275と南の二重の環濠は、同時に存在した可能性が高い。ＳＤ8275とＳＫ8284などから出土の青・白磁と宋銭は、本来環濠の内部施設で使われたものだろう。

室町時代土坑群の性格は　ＳＫ8283・8284を含む東西の大型土坑群の年代は、ＳＤ8275の西側にそれらと同様の土坑群があることから、環濠居館廃絶後である。また土坑の埋土の遺物には、江戸時代の染め付けなどが含まれていないことから、所属時期は室町時代と推定する。これらの性格については、集落墓の可能性を指摘しておきたい。それは土坑の形状が直方体を呈し、相互に埋め戻してから切り合い関係があり、土坑群が特定の範囲に分布しているなどの点が、いわゆる中世の粘土採掘土坑と異なるからである。類似した遺構は、推定山田道第５次調査（『概報』24では、粘土採掘土坑と推定）などでもみつかっている。人骨、棺桶、さらに副葬品といえるものが、今後付近の類似した遺構から発見されるのを待って、土坑の性格に結論を下したい。

2　東二坊大路・宮東面・東方官衙地区の調査（第75－13次）

（1994年11月～12月）

本調査は、市道の拡幅に伴う事前調査として橿原市高殿町391－１、392－１、402－１、374－１において実施した。調査地は道路両側の法面であり、これを東西190ｍあまりにわたって発掘した。発掘面積は384㎡である。

当該地は、藤原宮東方官衙および宮東辺外周部の左京四条三坊の東北坪にあたり、これに関連する遺構が期待できるところである。

遺　構

検出した遺構には藤原京東二坊大路の東西両側溝、藤原宮東面外濠、東面大垣、東面内濠、先行条坊跡などがある。以下、主要な遺構について述べる。

ＳＤ170は、藤原宮東面外濠である。溝幅は検出面で5.7ｍ、濠底で３ｍ、深さは1.3ｍを測る。濠内の堆積は暗灰色土、灰色粘土、灰色砂土、暗灰色粘土に分かれる。灰色粘土層は0.5ｍあまりと厚く、なかには相当数の木簡を含む多量の棒状木片、木屑などが堆積していた。木製品の他には、ごく少量の土器片と瓦片が出土したのみである。この灰色砂土、灰色粘土からは１㎤あたり2,000個を超す寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫など）を検出した。この寄生虫卵の出現密度から見て、外濠には多くの糞便が流れ込んでいた可能性が強い。なお、この鑑定結果については、後述する。

ＳＡ175は、藤原宮の東面大垣である。ＳＤ170の心から西20ｍの位置にある。柱掘形と抜き取り穴の一部を２箇検出した。掘形の規模は東西が約２ｍ。南北は不詳である。

ＳＤ2300は、藤原宮の東面内濠である。ＳＡ175の西12.5ｍにある。溝幅は検出面で3.2ｍ～2.6ｍ。溝の東の肩はえぐられ大きく広がる。検出面からの深さは0.9ｍである。濠内からは偏行唐草文軒瓦（6643Ｃ、6646Ｄ、6647Ａ・Ｄ）や軒丸瓦（6279Ｂ、6278Ｆ）、および木簡１点と削り屑２点などが出土した。

ＳＤ2281は、第27次調査で東二坊大路西側溝とされ、第32次調査では藤原京廃絶以後の溝とされた南北溝である。ａ（東）、ｂ（西）の堆積があり、ａからｂと流れが移動している。ａは幅1.2ｍ、深さ0.4ｍ、東の肩に護岸用の玉石がある。ｂは幅１～２ｍ、深さ0.3ｍである。溝底にはａ、ｂともに砂が堆積する。遺物としては、土器片が少量出土した。

ＳＤ3031はＳＤ2281の西６ｍの位置にある南北溝である。第32次調査の成果から、東二坊大路西側溝とされた。幅３～3.2ｍ、深さ0.6ｍである。溝内には砂が堆積し、土器が少量出土した。ＳＤ3031の位置は外濠ＳＤ170の東40.35ｍにある。

ＳＤ3035は、ＳＤ3031の西約６ｍにある南北溝である。幅1.3～1.6ｍ、深さ0.4ｍである。溝内には炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。第32次調査では、溝内に堆積した土器が「飛鳥

Ⅲ」を主体とすることから他の遺構より遡る遺構とされた。

ＳＤ8310は、ＳＤ2281の東10.5ｍにある南北溝である。幅1.5ｍ、深さ0.3ｍ。溝内には炭化物を含む灰色砂が堆積し、焼けコゲのある木屑や土器（須恵器・土師器）片が出土した。その位置と溝の状況からみて、東二坊大路東側溝の可能性が強い。

ＳＢ8311は、左京四条三坊西北坪で検出した掘立柱の柱穴で、南北棟建物の南北いずれかの妻にあたると思われるが、東西塀の可能性もある。柱間寸法は1.6ｍである。

ＳＡ8312は、左京四条三坊西北坪で検出した東西方向の掘立柱の柱穴である。柱間寸法は不等であり、塀と想定したが、建物の可能性もある。

ＳＡ8313は、藤原宮内濠の西側で検出した３間分の東西塀である。柱間寸法は2.1ｍ等間である。第29次調査では、これに並行して５間の東西塀ＳＡ2810を検出しており、あるいは一体となって建物となる可能性がある。その場合は桁行５間、梁行２間の東西棟となるが、なお詳しい検討が必要である。

ＳＤ2844は、宮内にある先行条坊の東二坊坊間路ＳＦ2115の西側溝である。溝の幅は0.98ｍ、深さは0.14ｍである。上面が削平をうけて浅く、遺物は出土しなかった。

ＳＤ2845は、東二坊坊間路ＳＦ2115の東側溝であり、溝幅0.97m、深さ0.35mである。ＳＤ2844と同様に、顕著な遺物はなかった。

以上の東西両側溝の検出により、ＳＦ2115の路面幅は約6.5mと確定した。

遺　物

遺物には土器、瓦塼および木製品がある。土器は藤原宮期の須恵器、土師器と下層の弥生式土器および土師器などがあるが、量的には少ない。

瓦塼は内濠ＳＤ2300に集中しており、軒瓦はすべてここから見つかった。軒丸瓦には6279Ｂ、6278Ｆの２型式２点があり、軒平瓦には6643Ｃ、6646Ｄ、6647Ａ、6647Ｂの３型式２種計７点がある。小面積の調査に関わらず、完形品の出土が目立った。

木製品には大量の棒状品と木簡、曲物などがある。棒状品は長さ17・18㎝から22・23㎝、幅0.5～0.6㎝ほどのものが目立つ。このなかには、やや細い「箸」状品も含まれている。棒状品が堆積した土層からは１㎠あたり2,000個を超す寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫など）を検出しており、その出現密度から見て、外濠には多くの糞便が流れ込んでいた可能性が強く、これらの棒状品は糞便にともなう籌木（チュウギ）であろう。これは糞へらともいい、いわばトイレの「落とし紙」である。

木簡は外濠ＳＤ170と内濠ＳＤ2300から見つかった。このうち大多数は外濠から見つかっているが、現在整理中であり、ここでは主要な釈文を掲げるのにとどめる。

縣主里［　］直若万呂　　031　　115×21×6

付札である。内濠出土。

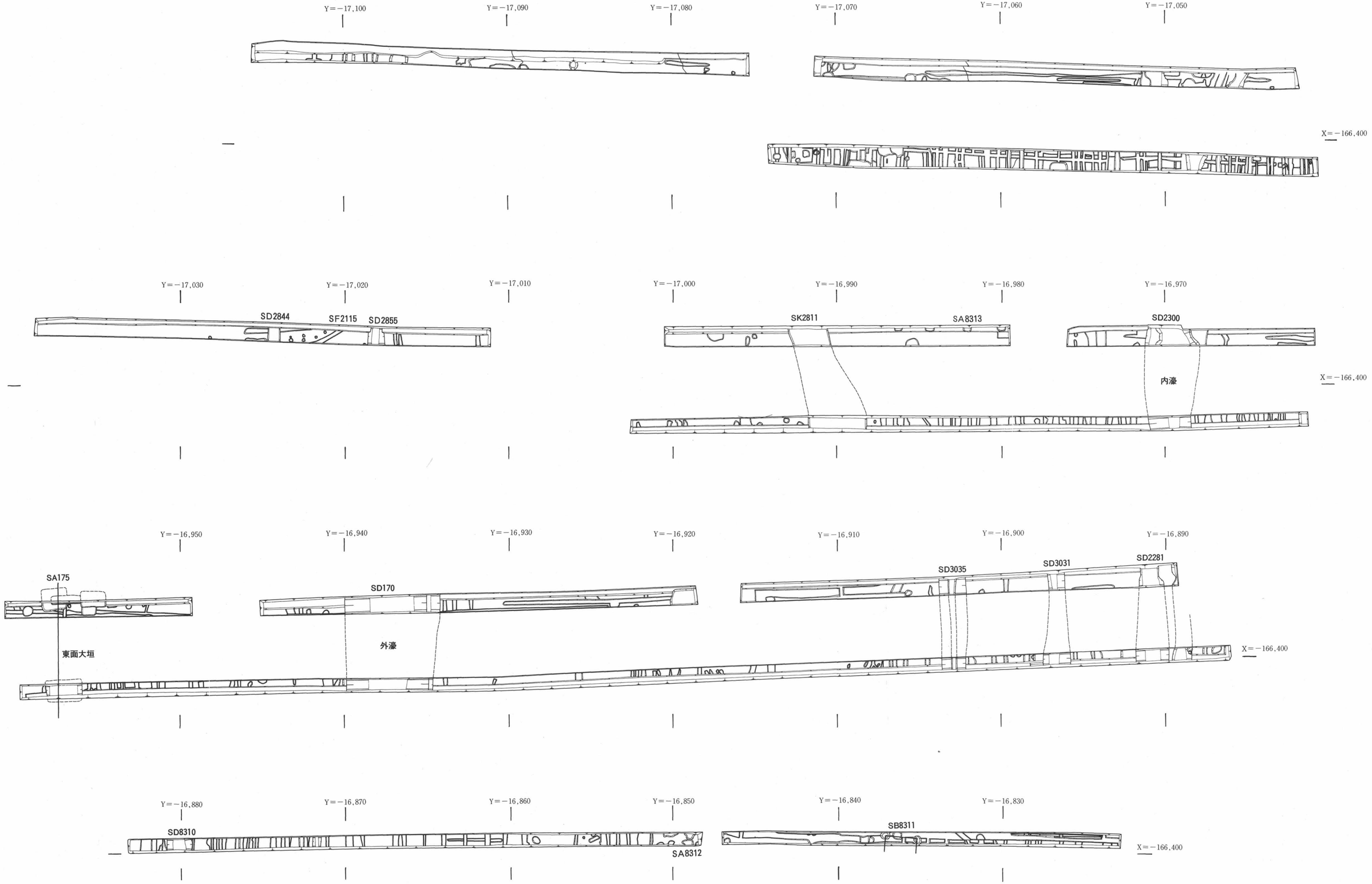


Fig.23　第75－13次調査遺構図（1：200）

御取鮑□石　　039　（197）×29×5

・頓首天下達・・・・・宇下急

・急可罷処在故日中之・・・・□被賜菓

011　（125＋65）×27×4

この2点は外濠ＳＤ170の木簡である。前者は付札である。

外濠の木簡は半分ほどに割り裂いたものが多く、木簡としての機能を終えた後に半分に割って籌木（チュウギ）としたのであろう。

木製品としてはほかに、曲物の底板などが数点出土した程度である。このように、大量の木製品は棒状品が主であり、相当数伴う寄生虫卵のありかたと考えあわせると、外濠には糞便とトイレ用品を一括して投棄した可能性が高い。

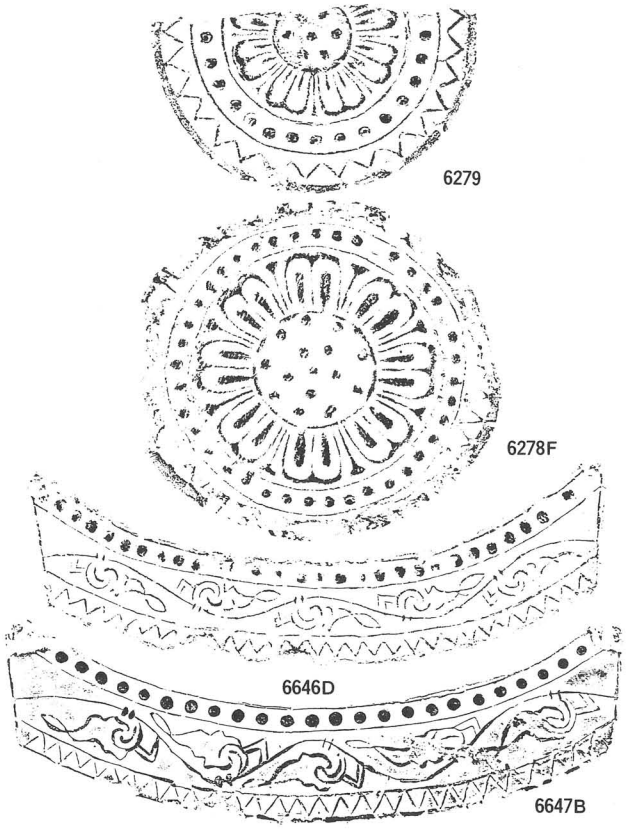


Fig.24　ＳＤ2300出土軒瓦（1：4）

まとめ

本調査の成果のひとつは、東二坊大路東西両側溝の検出である。東二坊大路の東側溝に南北溝ＳＤ8310をあてることは、溝の位置と水が流れた痕跡を示す溝内の砂の堆積、および松明の一部とみられる焼けコゲのある木屑の出土などによって、ほぼ明らかであろう。問題は、対となる西側溝の比定である。

東二坊大路西側溝については、第27次調査の発掘段階で南北溝ＳＤ2281がそれにあたるとみた。しかし、その後の第32次調査では、この溝に平安初期の土器が含まれることが明らかになり、この溝を西側溝にあてることに疑問が生じた。

ＳＤ2281の西6ｍと12ｍの位置には、これに平行する2条の南北溝がある。西6ｍにあるのがＳＤ3031、同12ｍにあるのがＳＤ3035である。このうち、ＳＤ3031は溝内に堆積した遺物の年代から側溝として矛盾がないのに対し、ＳＤ3035は溝の土器が「飛鳥Ⅲ」であることから、前者を西側溝、後者を宮造営前にあてたのである。

しかし、ＳＤ3035に関してはその後の検討によって「飛鳥Ⅳ」的な土器を含むことが判明し、ＳＤ3031と一連の溝である可能性がでてきた。したがって、東二坊大路西側溝としては、ＳＤ3031とともにＳＤ3035も候補となりうる。

いま、ＳＤ2281とそれに平行する3条の溝（心心距離）との間隔を示すと、

ａ）ＳＤ8310～ＳＤ2281＝10.5ｍ

ｂ）ＳＤ8310～ＳＤ3031＝16.6ｍ

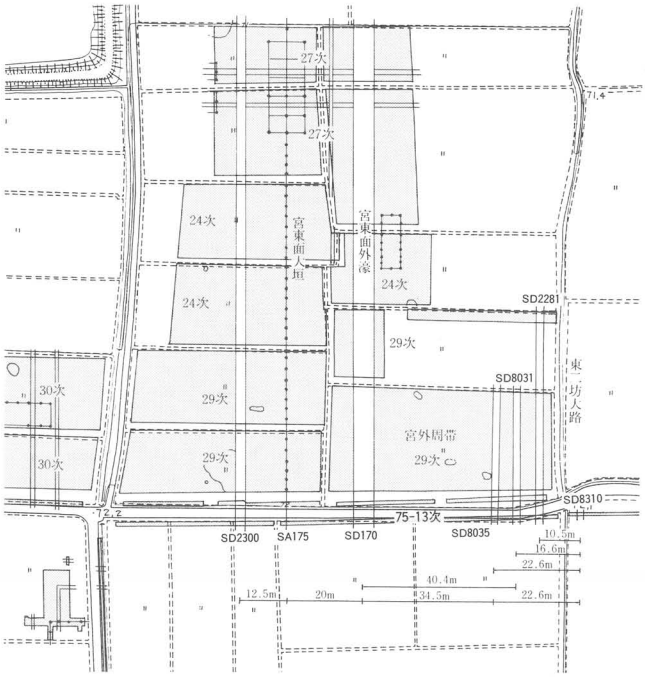


Fig.25　宮東面遺構概略図（1：2000）

c）ＳＤ8310～ＳＤ3035＝22.6m

となる。このうち、c）の22.6mは平城京での大路推定値の７丈（21m）に近いが、従来、他で検出した藤原京大路の路面幅とやや開きがある。他方、b）の16.6mはこれまでの成果とあまり隔たらないので、ここではＳＤ8310とＳＤ3031を東二坊大路の東西両側溝にあて、ＳＤ3035に関しては今後の課題としておきたい。

調査成果の二は、藤原宮の東西規模について、新たな知見を得たことである。これまで、藤原宮の東西大垣間の距離については、926.6m程度に復元していた。しかし、調査の過程で宮の東辺部を調査した第27次・32次調査の測量成果に誤りがあり、その値がかなり大きいことが判明したために、改めて、計算を行った。

第75－13次調査	第66－11次調査	第34次調査
東面大垣心	西面大垣心	西南隅大垣心
X＝－166,406.40	X＝－166,434.32	X＝－167,025.664
Y＝－16,957.650	Y＝－17,884.72	Y＝－17,879.397

第34次調査で検出した宮西南隅の心と第66－11次調査で検出した宮西面大垣の心から、西南大垣の振れを求めると、0°30'57"北で西に振れをもつ。藤原宮の大垣が正方形と仮定して、東西の振れを求め、今回調査の東面大垣心と、第66－11次調査の西面大垣心の距離を座標上で求めると、927m28cmとなる。これは従来の値より68cmほど大きい数字である。

藤原宮外濠における寄生虫卵・植物遺体分析

試料　試料は外濠内採取の以下の記載の４点である。

外濠	５ＡＪＢ	ＲＲ26・27	灰砂土　A
			灰砂土　B
	５ＡＪＬ	ＲＱ26・27	灰粘土　A
			灰粘土　B

寄生虫卵分析　分析は、試料１㎤にフッ化水素酸処理を施しプレパラートを作製して行った。１㎤あたりの出現数は計数比から算定した。結果は表（Tab.６）と図（Fig.26）に示した。

寄生虫卵は回虫、肝吸虫、横川吸虫、日本海裂頭条虫、有・無鉤条虫、マンソン裂頭条虫が

検出された。4試料中3試料において試料1㎤あたりの出現密度が2,000をこえる。鞭虫卵と肝吸虫卵は各試料とも多く、回虫卵と横川吸虫卵は試料によって異なる。寄生虫卵組成から人に起因する寄生虫卵とみなされる。寄生虫卵の出現密度からみて、外濠の堆積物に多くの糞便が含まれているとみなされる。

分類群 (1/10cc中)			5AJB RR26·27		5AJL RQ26·27	
学名	和名	部位	灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B
Ascaris lumbricoides	回虫	卵殻	52	14	46	83
Trichuris trichiura	鞭虫	卵殻	115	41	103	104
Clonorchis sinensis	肝吸虫	卵殻	81	9	58	58
Metagonimus yokogawai	横川吸虫	卵殻	4		6	39
Diphyllothrium nihonkaiense	日本海裂頭条虫	卵殻		2	2	2
Taenia solium-saginata	有・無鉤条虫	卵殻			1	
Diphyllobothorium mansoni	マンソン裂頭条虫	卵殻	1			
Total	計		253	66	216	286
	(1cm3に算定)		(2530)	(660)	(2160)	(2860)

Tab. 6　藤原宮外濠における寄生虫卵分析結果

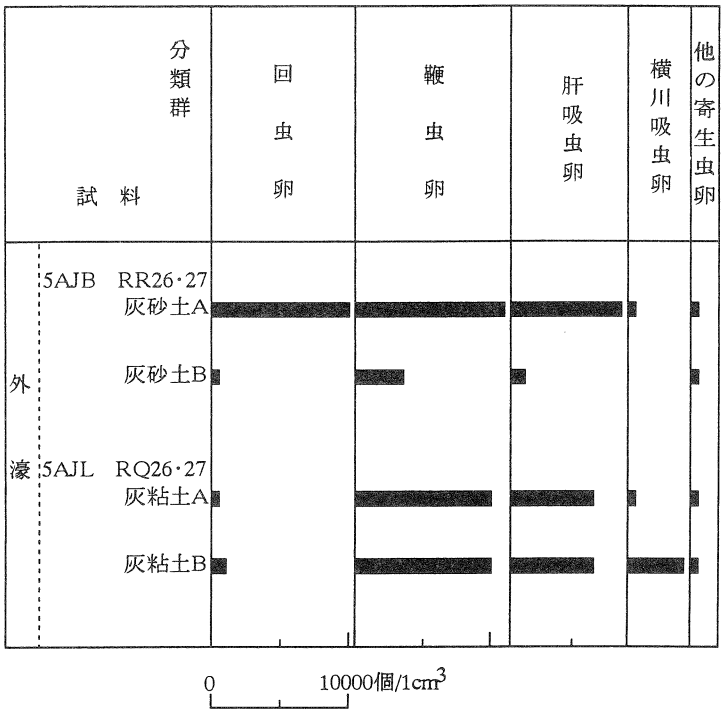


Fig.26　藤原宮外濠における寄生虫卵組成

花粉分析　分析は、試料に水酸化カリウム処理、フッ化水素処理、アセトリシス処理の各処理を施し行った。花粉出現量（定量）については、その計数比から1試料1㎤の出現数を算定した。結果は表（Tab. 7）と図（Fig.27）に示した。

各試料ともほぼ同じ傾向を示し、樹木花粉より草本花粉が多い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属・スギ・マツ属複維管束亜属の順に多い。草本花粉ではイネ科・アカザ科－ヒユ科・

分類群		5AJB RR26・27		5AJL RQ26・27	
学名	和名	灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B
Arboreal pollen	木本花粉				
Podocarpus	マキ属		1		
Abies	モミ属	2	2	2	1
Tsuga	ツガ属	3	6	2	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	12	26	8	9
Cryptomeria japonica	スギ	16	48	27	21
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1	4	1	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	5	5	1	3
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ		1		
Betula	カバノキ属		2		
Corylus	ハシバミ属	1	1		1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属ーアサダ	2	3	1	1
Castanea crenata-Castanopsis	クリーシイ属	12	27	7	6
Fagus	ブナ属	2		1	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	4	6	2	4
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	43	79	37	24
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属ーケヤキ	5	4	6	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属ームクノキ	6	2	4	1
Acer	カエデ属	2			
Fraxinus	トネリコ属		1		
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属ーガマズミ属			2	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Typha-Sparganium	ガマ属ーミクリ属	3		13	5
Sagittaria	オモダカ属		2		
Gramineae	イネ科	50	152	44	55
Oryza type	イネ属型	3	6	6	4
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	12	3	9
Monochoria	ミズアオイ属	7	1	12	9
Rumex	ギシギシ属	4		1	1
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	8	6	5	2
Fagopyrum	ソバ属	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科ーヒユ科	106	16	31	33
Caryophyllaceae	ナデシコ科	7	3	4	3
Ranuncnlus	キンポウゲ属	23	4	8	4
Cruciferae	アブラナ科	11	24	9	7
Umbelliferae	セリ科	5	2	1	4
Solanaceae	ナス科	1	2	1	1
Plantago	オオバコ属	4	1	6	3
Valerianaceae	オミナエシ科			1	
Actinostemma lobatum	ゴキズル	3	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科		2		1
Asteroideae	キク亜科	2	3	2	2
Carthamus tinctorius	ベニバナ	2	1	1	2
Artemisia	ヨモギ属	37	30	42	26
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	1	38	5	10
Trilate type spore	三条溝胞子	2	10	2	8
Arboreal pollen	木本花粉	116	218	101	72
Nonarboreal pollen	草本花粉	280	268	190	171
Total pollen	花粉総数	396	486	291	243
Unknown pollen	未同定花粉	6	4	5	2
Fern spore	シダ植物胞子	3	48	7	18

Tab. 7　藤原宮外濠における花粉分析結果

ヨモギ属が優占する。ガマ属－ミクリ属・ミズアオイ属の水湿地植物が出現する。アブラナ科は３％前後の出現率を示す。

種実同定　それぞれ100ccを0.25㎜の篩で水洗選別し、分類を肉眼および実体顕微鏡下で行った。各試料とも傾向は類似し、樹木の種実より草本の種実がきわめて多い。ヒユ属・ナデシコ科・キンポウゲ属などが多い。水湿地植物のコナギも検出されている。食用となる植物の種実としては、ウリ類種子が多く、他にイネ類・ヤマモモ核・キイチゴ属核・サンショウ種子・マタタビ種子・ナスが出現している。

分類群			5AJB RR26·27		5AJL RQ26·27	
学名	和名	部位	灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B
arbor	樹木					
Myrica rubra Sieb. et Zucc.	ヤマモモ	核				1
Rubus	キイチゴ属	核	3	2	12	11
Zanthoxylum piperitum DC.	サンショウ	種子				2
Actinidia polygama Planch. ex Maxim.	マタタビ	種子	1	1	2	
herb	草本					
Chara	シャジクモ属	卵胞子			1	
Oryza sativa L.	イネ	穎	4			14
Setaria	エノコログサ属	穎		2		1
Gramineae A·B	イネ科A·B	穎	2	4	10	2
Aneilema keisak Hassk.	イボクサ	種子	8			4
Monochoria Korsakowii Regel et Maack	ミズアオイ	種子	1			
Monochoria vaginalis Presl var. plantaginea Solms Laub.	コナギ	種子	7	19	18	24
Scirpus	ホタルイ属	果実		1		6
Cyperus	カヤツリグサ属	果実		5	2	6
Fimbristylis dichotoma Vahl	テンツキ	果実				1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実		1		2
Polygonum Thunbergii Sieb. et Zucc.	ミゾソバ	果実	1	5	7	7
Polygonum A·B	タデ属A·B	果実	21	16	37	40
Rumex	ギシギシ属	果実	3	5	6	8
Chenopodium	アカザ属	種子		6	2	6
Amaranthus	ヒユ属	種子	181	383	85	134
Portulaca oleracea L.	スベリヒユ	種子	2	4	9	8
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	35	46	27	22
Ranunculus	キンポウゲ属	果実	63	41	8	32
Oxalis	カタバミ属	種子	8	7	29	19
Hydrocotyle	チドメグサ属	果実	16	7	18	
Perilla	シソ属	果実				6
Solanum melongena L.	ナス	種子	5	1	4	2
Solanaceae	ナス科	種子	2	5	18	23
Cucumis melo L.	ウリ類	種子	32	3	28	44
		破片	8	2	11	12
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実	8	6		10
Total	合計		411	572	334	447

Tab. 8　藤原宮外濠における種実同定結果（試料100cc中）

考察　外濠堆積物の分析の結果、4試料中3試料が2000個をこえる寄生虫卵の出現密度を示し、糞便が多量に含まれる堆積物とみなされる。花粉分析では、周囲から供給された花粉が多いようで、アブラナ科が少し出現するほかは、食用植物の花粉はあまり出現していない。種実では4試料中3試料から1割から2割程度果実や種子の食べられる植物種実が含まれている。以上、外濠は人の糞便が多量に混ざりつつ、周囲の植生からも花粉や種子が供給されて堆積したと考えられる。

なお、周囲の植生であるが、ヒユ属（アカザ科－ヒユ科）・ヨモギ属・イネ科などのやや乾燥した人里に好んで生育する草本が多く、排水のよい乾燥地であったと推定される。外濠には、

ガマ属－ミクリ属やコナギの水湿地植物やタデの仲間が繁茂しており、水湿地状の状態であった。なお、周辺地域にはコナラ属アカガシ亜属を主にスギ・マツ属複維管束亜属などの樹木が多かった。

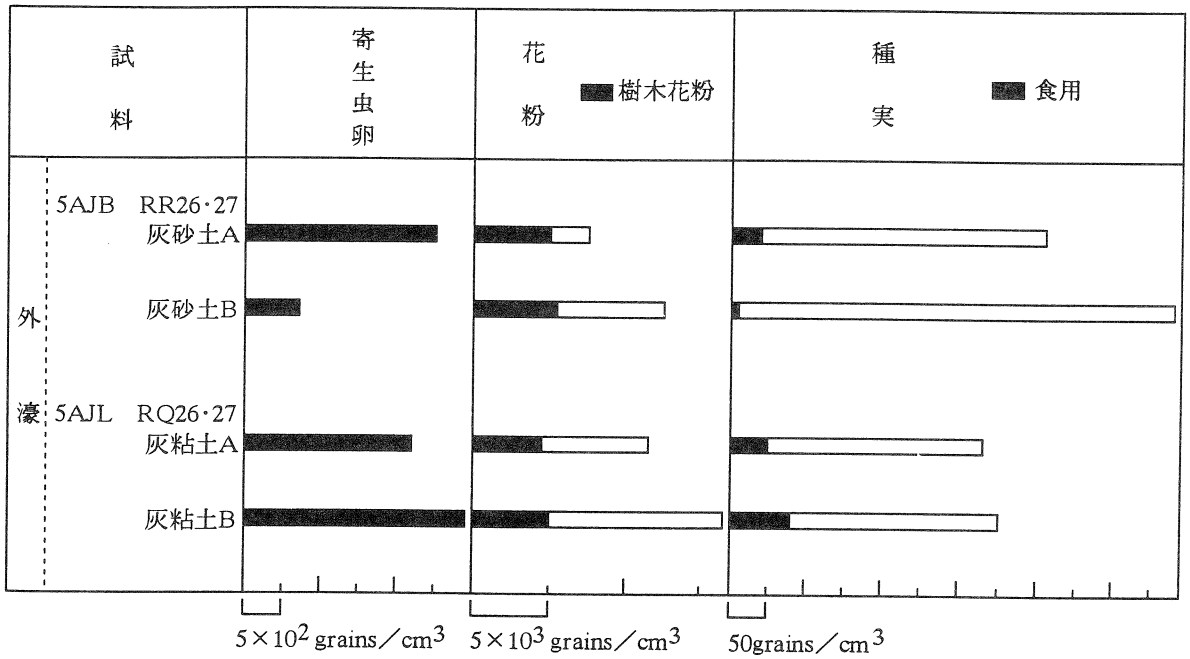


Fig.27　藤原宮外濠における寄生虫・花粉・種実出現図

《参考文献》

金原正明「花粉分析による古環境復原」『新版古代の日本第10巻　古代資料研究の方法』角川書店　1993年

奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』1992年

Peter J.Warnock and J.Reinhard(1992). Methods for Extraxing Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science

金原正明「便所堆積物からさぐる古代人の食生活」『助成研究の報告』味の素食の文化センター　1994年

（金原正明・金原正子・中村亮仁）

3　宮西面外濠の調査（第75－1次）

（1994年4月）

本調査は道路築造に伴う事前調査として、橿原市四分町で行ったものである。調査地は藤原宮西面外濠の位置にあたる。東西25m、南北4mの調査区を設けて調査を実施した。層序は上から順に、褐色粘質土（耕作土）、緑灰色微砂（床土）、黄色粘質土、茶褐色土、暗褐色粘質土（弥生時代包含層）、青灰色粘質土（地山）である。

西面外濠ＳＤ260は、暗褐色粘質土の上面から切り込む。本調査区における濠幅は東西約13mである。最上層は青灰色微砂層で、この土層の下から外濠の堆積層暗灰色粘質土を耕作土とする10世紀代の水田を検出した。水田は外濠の東寄りに2枚あった。水田ＳＸ8314は東西約10m、南北長は調査区外のため不明である。南の水田ＳＸ8315との間は、下幅35cm・高さ15cmの畦畔で区画する。なお、西に偏した位置に水口を切っており、南側から北側の水田に水を送っていたと考えられる。水田の西側には下幅70cm・高さ12cmの畦畔がある。この西に幅1.7m・深さ0.5mの南北溝ＳＤ8316がある。溝の埋土は、暗青灰色微砂や青灰色細砂である。なお、水田ＳＸ8314には畦畔を切ってＳＤ8316から水を取り入れた痕跡が残っていた。

さらに下げて、暗灰色砂質土に達したが藤原宮期の堆積層にいたることは出来なかった。

今回の調査において、西面外濠は10世紀代には水田化されていたことが明らかとなり、中世におけるこの地域の土地利用を考える上で貴重な資料を提供することとなった。

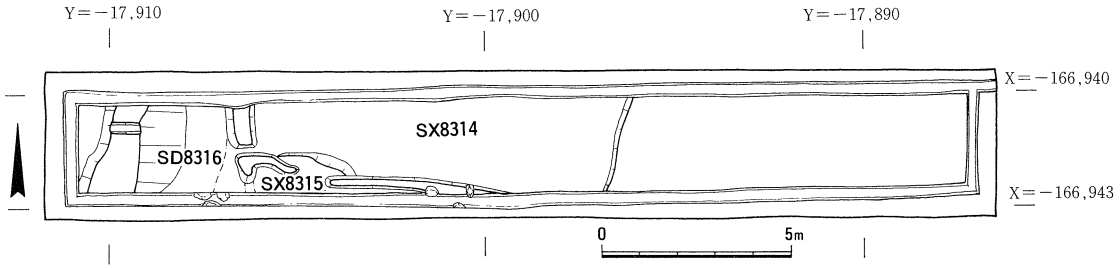


Fig.28　第75－1次調査遺構図（1：200）

4　宮内その他の調査

A　第75－5次調査

（1994年6月～7月）

本調査は水道管の付け替えに伴う事前調査として、橿原市高殿町で行ったものである。調査地は藤原京左京六条三坊西北坪から宮西方官衙地区にかけて、幅70㎝、総長約900ｍにおよぶ。深さは一律に地表下1.4ｍである。西面大垣周辺の諸施設、東西両朝集殿の検出が期待されたが、調査区の幅が狭く、かつ旧管埋設時の掘形の再掘削を原則としたこともあって、藤原宮期の遺構と確定できるものは検出できなかった。

B　第75－9次調査

（1994年9月）

本調査は個人住宅改築に伴う事前調査である。調査地は藤原宮内の東方ほぼ中央部に位置する。これまでにも、調査地のある高殿の集落内で小規模な調査がおこなわれているが、藤原宮に関連する遺構はなく、主として中世の遺構が検出されているのみである。本調査でも藤原宮に関わる遺構は検出できなかったが、中世の遺構を検出した。検出した遺構は池状遺構の一部である。基本層序は現代の地表面から近代の整地土、褐灰色土、14～15世紀の土師器を含む暗青灰褐色土である。

池状遺構ＳＸ8240は掘形を掘り、その内側に人頭大の石を並べ、裏込土で石を固定する。部分的には階段状に二段に石が据えられている。まわりの石の上端から底までは約30㎝と浅く、池であるかどうか疑問がある。調査区内では、石はほぼ四半円状に並んでおり、全体は直径3ｍ程度の円形と想像される。

池状遺構内からは14～15世紀の瓦器が出土した。

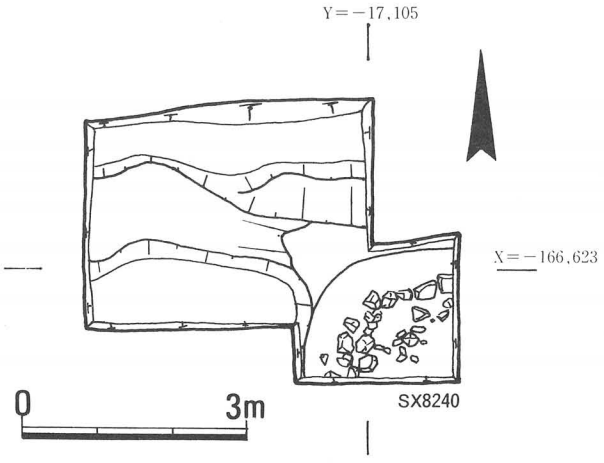


Fig.29　第75－9次調査遺構図（1：100）

Fig.30　池状遺構ＳＸ8240

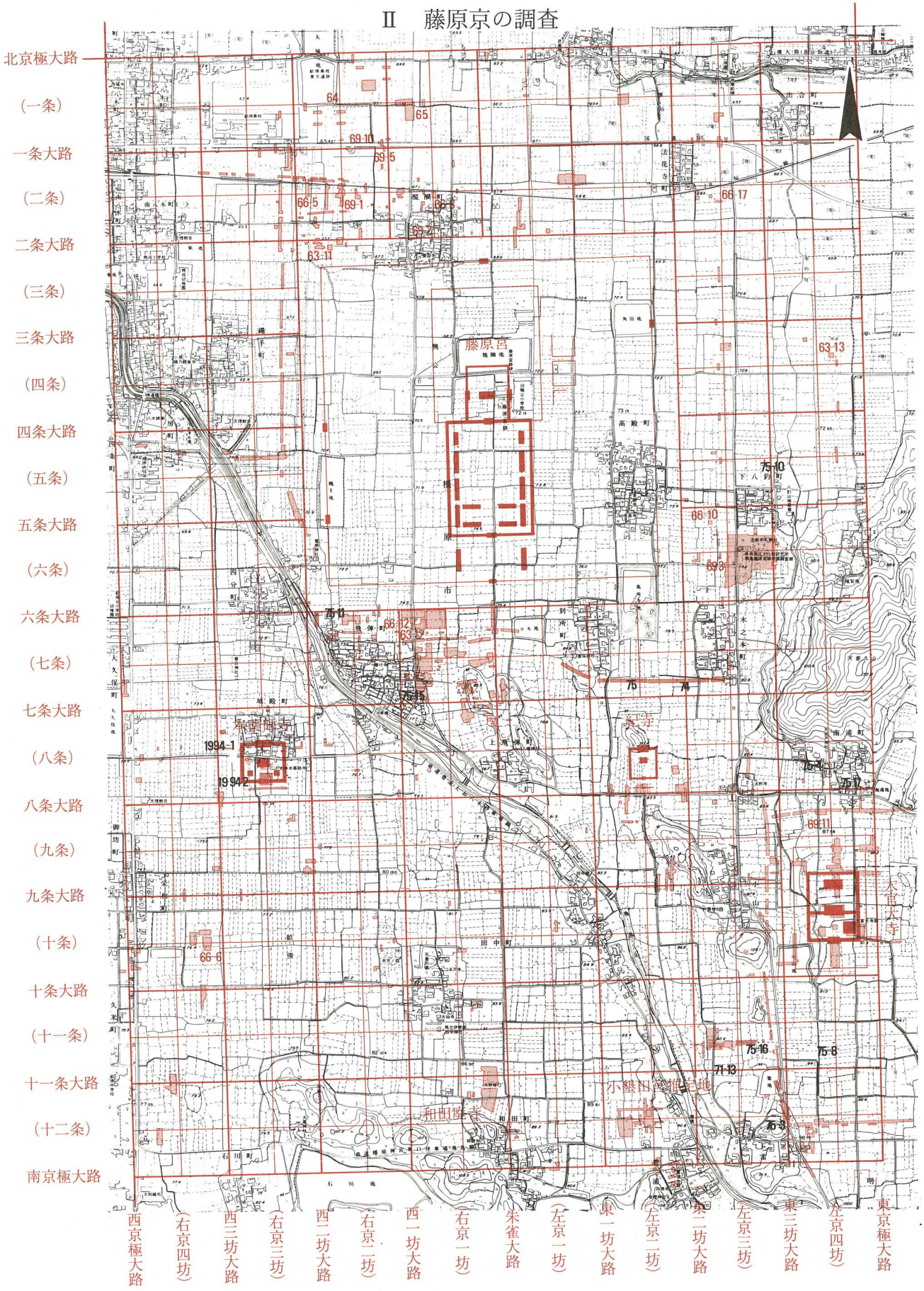


Fig.31　藤原京の調査位置図（1：15000）

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考	担当者	概報頁
藤原宮 71－13	6 AMH－ J	434㎡	94. 1.10～ 94. 4. 7	高市郡明日香村雷字稲葉縄手 （左京十一条三坊）	奈良県	道路建設 （雷丘北方）	西口　壽生	52～57
74	5 AWG－ H・P	2368㎡	93.12. 1～ 94. 3.24	橿原市木之本町54－2他 （左京七条二・三坊）	橿原市	市道飛騨～木之本線建設	島田　敏男	39～44
75	5 AWH－ A 5 AWG－ P 5 AJH－ F	2200㎡	94. 4. 4～ 94. 8. 8	橿原市木之本町326他 （左京七条一・二坊）	橿原市	市道飛騨～木之本線建設	上原　真人	45～50
75－3	5 AMH－ D・E・F 5 AMJ－ A	500㎡	94. 6.14～ 94. 7.13	明日香村雷東浦 （左京十二条三坊）	奈良県	道路拡幅 （雷丘東方）	大脇　　潔	58～60
75－4	5 BNG－ E	16㎡	94. 6.16～ 94. 6.22	橿原市南浦888 （左京八条四坊）	西井輝男	住宅建設	深澤　芳樹	51
75－8	5 AMC－ Q・R 5 AMH－ B・C	68.7㎡	94. 8. 1～ 94. 8.10	明日香村奥山 （左京十一条四・五坊）	明日香村	下水道竪坑	伊藤敬太郎	62
75－10	5 AJC－ B	50㎡	94.10. 3～ 94.10.11	橿原市下八釣町141 （左京五条三坊）	山尾吉史	住宅建替	島田　敏男	61
75－11	5 AJM－ C・D	528㎡	94.10. 3～ 94.11. 1	橿原市四分町 256－3・12・13 （右京七条二坊）	奈良県	バイパス建設	金子　裕之	63～65
75－15	5 AWH	300㎡	94.12.12～ 95. 2. 1	橿原市飛騨町94－1 （右京七条一坊）	橿原市	住宅建設	荒木　浩司	未収録
75－16	5 AMH－ J	710㎡	95. 1. 9～ 95. 4. 8	明日香村雷上地内 （左京十一条三坊）	奈良県	県道新設 （雷丘北方）	川越　俊一	未収録
75－17	5 BNG	10㎡	95. 2.13～ 95. 2.15	橿原市南浦49 （左京八条四坊）	田中博史	住宅建替	藤田　盟児	未収録
本薬師寺 1993－3次	6 BMY－ D	307㎡	94. 2.10～ 94. 4.15	橿原市城殿町 282・283・284 （右京八条三坊）	西田佐芋	計画調査	花谷　　浩	66～73
本薬師寺 1994－1次	5 BMY－ L・K	170㎡	94. 9.21～ 94.10. 6	橿原市城殿町 231－1・232－1 （右京八条三坊）	太田憲佑	住宅新築	島田　敏男	74
本薬師寺 1994－2次	5 BMY－ N	558㎡	95. 2. 3～	橿原市城殿町 282・283・284 （右京八条三坊）	西田佐芋	計画調査	花谷　　浩	未収録

Tab. 9　藤原京の調査一覧

1　左京七条二・三坊の調査（第74次）

（1993年12月～1994年３月）

本調査は市道飛騨木之本線の敷設工事に伴う事前調査である。工事予定地は木之本町の集落から西へ向かって、飛騨町へ繋がる。今回の調査では工事予定地のうち木之本町から西へ東西210ｍ分を調査した。調査区は現農道、水路の関係で３区に分け、東から東区、中区、西区とした。調査面積は約2160㎡である。調査地は左京七条三坊西南坪および七条二坊東南坪にまたがり、東二坊大路の検出が期待された。その結果、検出した遺構は、東二坊大路とその両側溝、掘立柱建物９棟、掘立柱塀４条、井戸１基、桝状遺構１基、溝11条である。

遺　構

東二坊大路　東二坊大路ＳＦ250の東西両側溝を検出した。東西両側溝の心々距離は約12ｍで、東側溝ＳＤ249は幅1.85ｍ、深さ45㎝、西側溝ＳＤ251は幅2.25ｍ深さ35㎝である。両側溝とも溝内には黄灰色の砂が充満し、溝内では常に水が流れていたと考えられる。この両側溝間の中央でも、両側溝に並行する南北溝ＳＤ252を検出した。この溝は幅1.50ｍ深さ0.3ｍで、埋土が礫を混じえた暗褐灰色の粘土で、両側溝とは状況が異なる。しかし、溝の位置が両側溝間の丁度中央に位置することから、条坊に関わる遺構である可能性がある。

東側溝からは飛鳥Ⅴ期の土器が、西側溝からは飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の土器が出土した。

左京七条三坊西南坪の遺構　この坪で注目されるのは、二重の区画施設を有することである。すなわち東二坊大路東側溝から約12ｍ東に、１ｍを越える大規模な掘形を持った南北塀ＳＡ245があり、さらにＳＡ245から24ｍ東にも大規模な掘形を持った南北塀ＳＡ230がある。ＳＡ245・ＳＡ230ともに柱間寸法は2.4ｍ（８尺）等間である。ＳＡ230では柱掘形の他にほぼ柱掘形に匹敵する抜取穴と小穴（柱痕跡か？）を検出し、小穴は堀形の北辺に位置しており、柱は堀形の北辺に立っていたものと思われる。

東西棟ＳＢ220は、ＳＡ230の東側に位置する東西に並ぶ９個の大規模な柱穴である。桁行８間、柱間寸法2.4ｍ（８尺）等間の東西棟の南側柱列と考えられる。柱穴の抜き取り穴からは

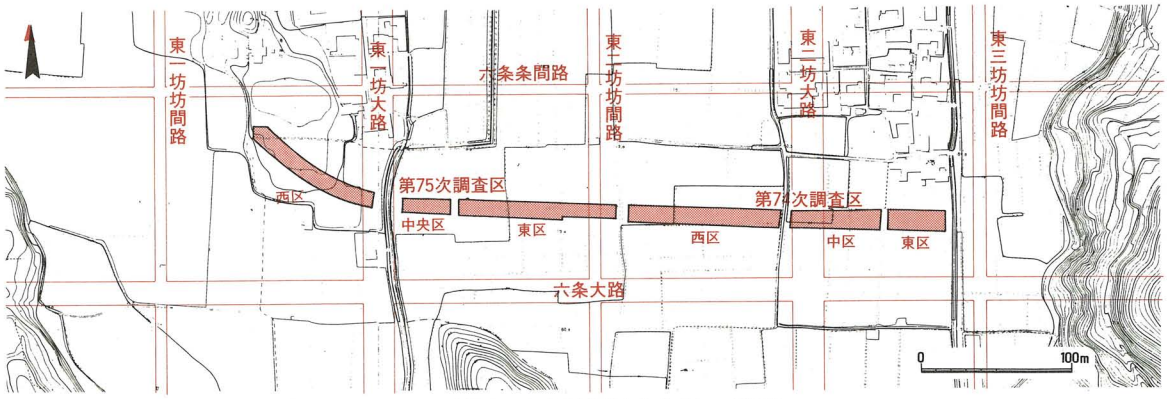


Fig.32　第74・75次調査位置図（１：5000）

飛鳥Ⅳもしくは Ⅴの土器が出土した。

ＳＢ211は東区の東端で検出した南北棟である。桁行５間、梁行２間、柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m（６尺）等間である。

ＳＢ219は東区の南端で検出した建物で、南北棟の北妻と推定される。柱間寸法は1.5m（５尺）等間である。

ＳＢ225は東区西端で検出した南北棟である。方位が北でやや東に振れる。桁行４間、梁行３間、桁行柱間寸法1.8m（６尺）等間、梁行柱間寸法は1.1m等間で全長3.3m（11尺）となる。

ＳＢ240は中区東寄りで検出した南北棟である。桁行３間、梁行１間の身舎の東西に庇をもつ。桁行柱間寸法は1.8m（６尺）等間、身舎梁行2.4m（８尺）、庇の出1.8m（６尺）である。一部柱筋が揃わないが、現状では以上のような復原が妥当であろう。

ＳＢ241はＳＡ245の東に近接して建つ南北棟で、方位が北でやや西に振れる。桁行３間、梁行２間、柱間寸法は桁行中央間1.8m（６尺）、端間1.5m（５尺）、梁行1.8m（６尺）等間である。

東区の東ではＴ字形に流れる溝**ＳＤ213・214・216**と、その交点で桝状遺構**ＳＸ215**を検出した。Ｔ字形の溝のうち、ＳＤ213とＳＤ214は、当初幅１ｍ、深さ約60㎝のＬ字形の溝で発掘区東端で広がりをみせている。この溝はある時期に中程まで埋められ、この時に溝の交点に桝状遺構ＳＸ215がつくられ、南へ抜ける細い溝ＳＤ216が掘られる。

桝状遺構ＳＸ215は内法1.4mの方形、深さ0.2mで、底に５枚の板を敷き並べ、底板に溝をきって側板を立てている。この遺構は、溝から水を引き込んで水を溜める施設であったと想像される。ＳＸ215の北側とＳＤ216の取付き部分では、ＳＤ216が浅い土坑状に広がって比較的多くの遺物を含んでおり、水が溢れた痕跡であろう。なお、溝および桝状遺構内からは飛鳥Ⅴを主体とした土器が出土した。

ＳＸ235はＳＡ230の西に接して位置する根石状の遺構である。拳大の石を根石状に据えた掘形５個がＬ字形に並ぶ。建物の一部である可能性があるが、現状では確定できない。なお、この一体の地山は礫を大量に含んでおり、地山に礫を多く含む所ではこのような仕事をしなかったとも解釈できる。

左京七条二坊東南坪　**ＳＢ270**は、西区東寄りに建ち、方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる南北棟である。桁行４間以上、梁行２間で北から２間目に間仕切の柱が立つ。柱間寸法は桁行が北から2.1m、2.4m、2.1m、2.1m、梁行が1.65m等間である。

ＳＢ280は、西区ほぼ中央に建ち、方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる南北棟である。桁行３間以上、梁行２間、柱間寸法は桁行1.8m等間、梁行1.65m等間である。

ＳＢ285はＳＢ280の南に位置し、西妻をＳＢ280の東側柱と揃える。方位が国土方眼方位に対して北で西に若干振れる東西棟で、平面はやや歪である。桁行３間、梁行２間、桁行柱間寸

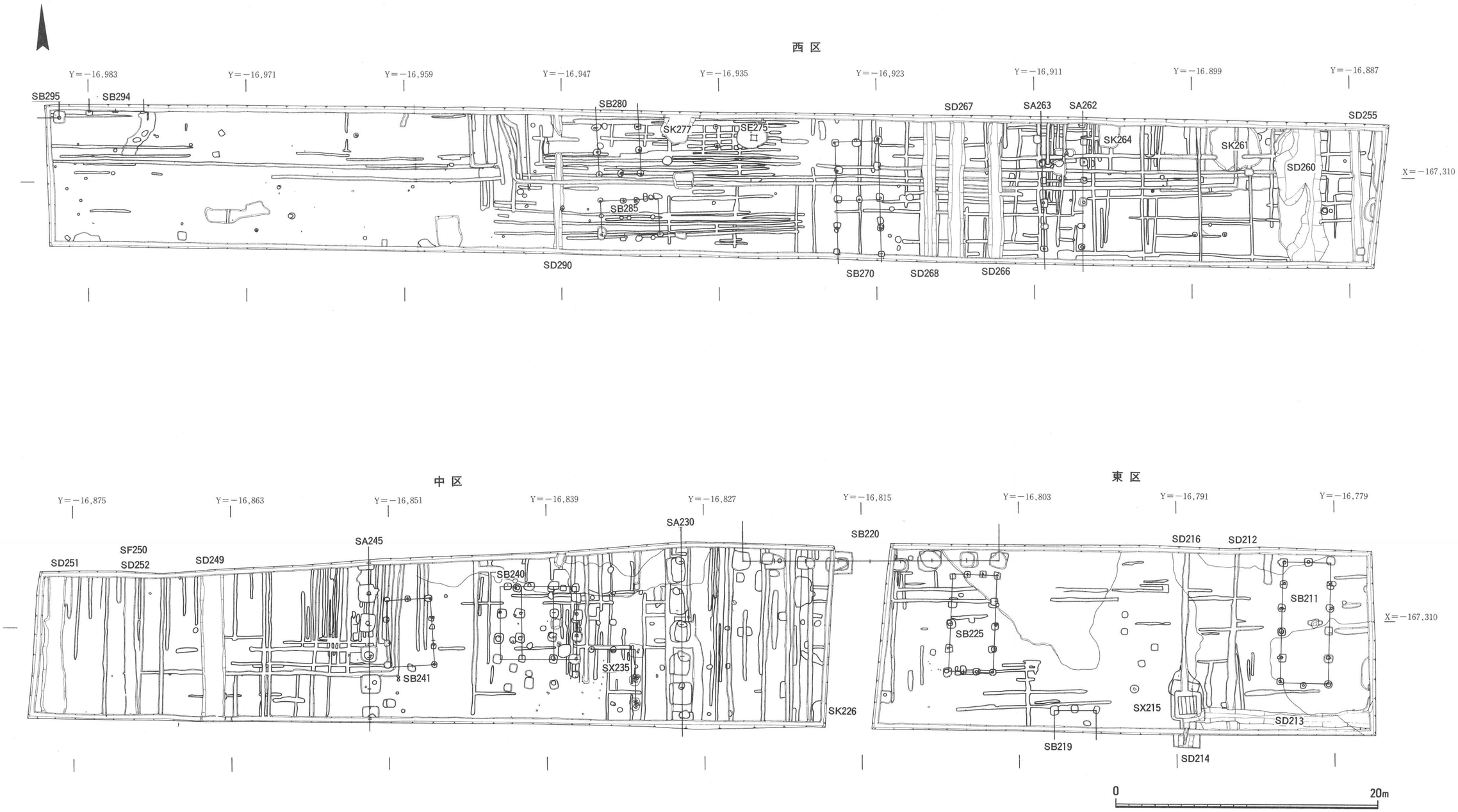


Fig.33　第74次調査遺構図（1：300）

法は西から1.35m、１m、1.3m、梁行柱間寸法は1.4m等間である。

ＳＡ262は西区東寄りに建つ南北塀で、方位が国土方眼方位に対して北で若干東に振れる。７間分を検出し、柱間寸法は1.4m～1.8mと不揃いである。

ＳＡ263はＳＡ262のすぐ西に建つ南北塀で、方位が国土方眼方位に対して北で若干西に振れる。７間分を検出し、柱間寸法は1.4m～1.8mと不揃いである。

ＳＤ260は幅２～３m、深さ0.7mの大規模な南北溝で、部分的に蛇行している。溝内からは飛鳥Ⅴ期の土器が出土した。

藤原宮期のものと推定される南北溝はＳＤ260の他にも**ＳＤ266・267・268・290**の４条を検出した。いずれの溝とも幅１m内外で、深さは30cm～40cm程度である。ＳＤ267からは飛鳥Ⅴの土器が出土した。

ＳＥ275は西区ほぼ中央に位置する井戸である。東西2.3m、南北２mの楕円形の堀形を掘り、中に横板蒸籠組の井戸枠を据えている。井戸枠は内法幅約45cmで、長さ55～60cm、幅25～30cm、厚さ約２cmの板の内法位置に上下から板幅分の幅の切れ込みを入れ、最下段を南北方向に立て、順次東西・南北方向に段違に板を組上げている。井戸枠内からは飛鳥Ⅴの土器が出土している。

遺　物

土器は飛鳥Ⅳ期～Ⅴ期の土師器・須恵器が出土し、瓦は東二坊大路西側溝から断片が少量出土したのみで、全体的に遺物の出土量が少ない。

まとめ

条坊　今回の調査では、予想通り東二坊大路を検出した。その両側溝の心々距離は12mである。ＳＤ249を東側溝、ＳＤ255を西側溝とすれば両側溝間の距離は約22m、ＳＤ260を西側溝とすれば両側溝間の距離は約26mとなる。また、中区と西区間の未発掘区に西側溝がある可能性も否定できない。しかし、溝の形状および溝内の埋土の状況から判断して、ＳＤ249とＳＤ251は一連の遺構と考え、ＳＤ249を東側溝、ＳＤ251を西側溝と推定する。このときの道路および側溝心のおよその国土方眼座標は以下の通りである。

東二坊大路東側溝	X＝－167,310.0	Y＝－16,864.5
東二坊大路道路心	X＝－167,310.0	Y＝－16,870.5
東二坊大路西側溝	X＝－167,310.0	Y＝－16,876.5

ここで、注目されるのは大路中央にある南北溝ＳＤ252である。ＳＤ252は前述のように条坊の丁度中央に位置し、埋土からして溝として機能した痕跡がない。条坊計画のために一時的に掘られた溝、または道路面の水抜きの機能を果たした溝等の可能性が考えられるが、今後発掘成果を収集した上で結論を出したい。

次に東一坊々間路との関係をみると、第75次調査では東一坊々間路西側溝ＳＤ302と東側溝

に並行すると推定されている南北塀ＳＡ301を検出している。東側溝を検出していないために道路心を確定し得ないが、１大尺を35.6cm～35.7cm程度とすると、東二坊大路心から西へ375大尺の位置がＳＤ302とＳＡ301の間におさまる。したがって、ＳＤ302を東一坊々間路西側溝として妥当である。

左京七条三坊西南坪　左京七条三坊西南坪は大規模な塀によって二重に区画されている。外側の区画施設ＳＡ245は東二坊大路東側溝心から約12ｍ（40尺）東に位置し、内側の区画施設ＳＡ230はＳＡ245からさらに約24ｍ（80尺）東に位置する。ＳＡ245とＳＢ220との間隔は約4.8ｍ（16尺）である。ＳＡ230の柱位置が柱掘形の北端に寄っていることから、ＳＡ245とＳＢ220は柱筋を揃えていたと推定される。さらにＳＡ245とＳＡ230も柱筋を揃えており、二重の区画施設とその内部の大規模な建物ＳＢ220は、ほぼ８尺（2.4ｍ）の方眼上に計画された可能性がある。

以上のＳＢ220・ＳＡ230・ＳＡ245およびＳＸ215が伴出土器より藤原宮期の一連の遺構と推定される。その他の小規模な建物のうち方位が振れているＳＢ211・225は上記の遺構とは時期を異にすると考えられる。また、ＳＢ240・241が藤原宮期に属するかどうかも決め難い。

いずれにせよ、この坪内は二重に大規模な塀で区画されて、その内部に大規模な建物が計画的に配置されていた可能性が高い。また、桝状の特殊な施設をもっており、当坪内の施設が相当に格の高いものであったことを窺わせている。今後この近辺の調査成果が期待される。

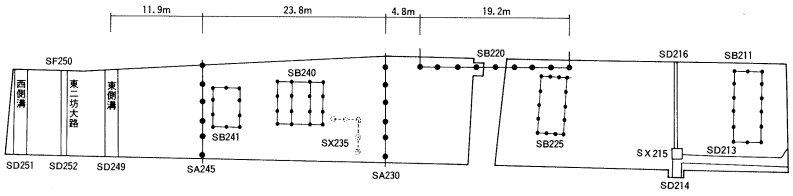


Fig.34　左京七条三坊西南坪遺構模式図

左京七条二坊東南坪　左京七条二坊東南坪は同三坊西南坪に比べ遺構が希薄である。２条の南北塀ＳＡ262・ＳＡ263があるが、条坊から大きく内側に位置する点、方位が振れる点から、藤原宮期の条坊と関係した区画施設とは考え難い。また、建物が数棟建つが、いずれも小規模な建物のみで、坪内の様相としては大規模な造営が行われた痕跡はない。なお、この坪で注目すべきは６条の南北溝で、その位置関係を下図（Fig.35）に示した。伴出遺物はいずれも宮期直前から宮期に属しており、坪内になぜこのような溝が掘られたかを今後検討する必要がある。

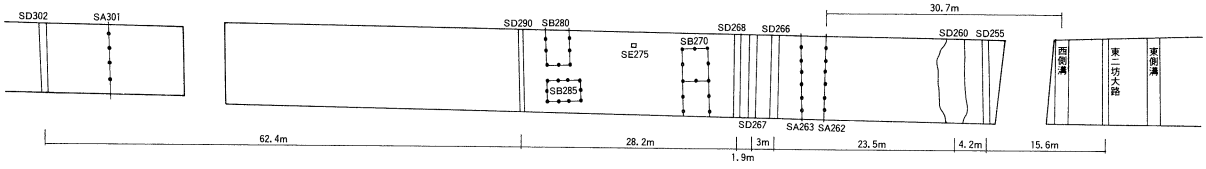


Fig.35　左京七条二坊東南坪遺構模式図

2　左京七条一・二坊の調査（第75次）

（1994年４月～８月）

本調査は市道飛騨木之本線建設に先立つ事前調査で、第74次調査区の西延長にあたる。調査地は橿原市木之本町326ほか、および明日香村小山223ほかに所在し、藤原京左京七条二坊東南坪の西端と西南坪および左京七条一坊東南坪に該当する。調査面積は約2200㎡である。農道や現水路との関係で、東区・中央区・西区の３地区に分けて調査を実施した。

遺　構

検出した遺構には、古墳時代～藤原宮期の流路、古墳～飛鳥時代の掘立柱建物２棟、掘立柱塀１条、井戸１基とそれにとりつく溝２条、藤原宮期の東二坊々間路、掘立柱建物３棟、井戸３基、中世の居館跡などがある。なお、西区（左京七条一坊東南坪）は飛鳥川右岸に点在する雷丘・小山・宝泉寺山などに連なる残丘の一つである。調査の結果、古墳～飛鳥時代には現状よりも高く急傾斜をなし、裾に広がる平坦地には掘立柱建物などが建っていたが、藤原宮期に大規模な切土・盛土を行い、残丘を広げてやや高い平坦地を造成したことが判明した。その整地土は６世紀中頃の須恵器片を含む黄褐土層や埴輪片を含む有機土層が斜面に沿って縞状に堆積し、かつての残丘上には古墳があった可能性が高い。

旧流路　東区西端（左京七条二坊西南坪）で南東から北西に向かって流れる旧河川を検出した。本調査区では２条に分かれており、西流路ＳＤ313は幅８ｍ以上、深さ１ｍ以上である。暗黒粘土、有機質を含む暗灰粗砂、灰色粗砂が次第に堆積した状況が看取できるが、遺物をほとんど含まない。東流路ＳＤ310は古墳時代末期から藤原宮期に至るまで存続し、古墳時代末期～飛鳥時代のＳＤ310Ａは幅３～５ｍ、深さ0.6ｍで、両岸を杭で護岸している。堆積した暗灰砂中から、飛鳥Ⅰを含むそれ以前の土器類（須恵器杯Ｈ身・甕片、土師器杯ＣⅠ・鉢Ｂ・高杯Ｈ・甕Ｂなど）のほか机天板（護岸の堰板に転用）、木鉢、横斧の膝柄などが出土した。藤原宮期には下層流路を覆うように暗灰粘土が幅８ｍにわたって広がる（ＳＤ310Ｂ）。上面には多数の杭を打ち込んでいるが、規則性を看取できない。暗灰粘土中からは藤原宮期の土器片・瓦・馬の顎骨などが出土した。ＳＤ310Ｂの中央から東北に向けて、杭と堰板で護岸した溝ＳＤ312がとりつく。ＳＤ312は幅0.5ｍで砂が堆積しているが、堰板で護岸した部分だけは底がえぐれて暗灰色粘土が堆積していた。埋土から瓦片などが小量出土した。

古墳～飛鳥時代の遺構　中央区で桁行２間（3.4ｍ）、梁行２間（3.0ｍ）の掘立柱建物ＳＢ320、井戸ＳＥ315とその東西にとりつく溝ＳＤ314・317とを検出した。ＳＢ320の主軸は、北で約45°西に振れている。ＳＥ315は径2.3ｍ，深さ85㎝で、井戸枠の痕跡はない。西にとりつくＳＤ317の水口の両側には花崗岩玉石を立てる。ＳＤ317は西へ延び、約20ｍで北へ曲折して南北溝ＳＤ319に連なる。ＳＤ319は底に玉石を敷き、両側にも石を立てた石組溝で、幅20㎝である。

なお、ＳＤ317の西端付近にも玉石が散乱しており、石組溝を改作した可能性もある。ＳＥ315・ＳＤ317から飛鳥Ⅰ～Ⅱの土器（須恵器杯Ｈ・甕片、土師器杯ＣⅠ・鉢Ｂ・高杯Ｈ・甕Ｂなど）が出土している。

西区下層では、桁行４間（全長6.6ｍ、柱間寸法1.65ｍ等間）、梁行２間（全長4.2ｍ、妻柱を欠く）の掘立柱建物**ＳＢ360**と掘立柱塀**ＳＡ361**とを検出した。ＳＡ361は５間で９ｍ、柱間寸法は不揃いである。ＳＢ360・ＳＡ361とも主軸は北で約45°西に振れている。周囲には方位を等しくする溝がいくつかあるが、建物とは直接結びつかない。ＳＢ360の柱掘形を覆う焼土塊から６世紀中頃（ＴＫ85）の須恵器高杯片が出土している。

藤原宮期の遺構　東区で東二坊々間路**ＳＦ300**の西側溝**ＳＤ302**を検出した。ＳＤ302は深さ70～80㎝、幅0.9～1.0ｍで南でやや狭まる傾向がある。長さ9.3ｍ分を検出し、さらに南北に延びる。溝底には黄灰砂が堆積し、短期間は水が流れたようだ。その上の暗灰粘土層は流れがよどんだことを思わせる。溝内からは少量の瓦・塼・土器片・木片が出土した。東側溝は存在しなかったが、推定位置近くに掘立柱塀**ＳＡ301**が存在する。ＳＡ301は柱間寸法2.0～2.1ｍで５間分を検出した。ＳＤ302とＳＡ301とは心々で東西約8.5ｍを測る。

ＳＡ301の東、藤原京左京七条二坊東南坪内には、井戸**ＳＥ304**がある。ＳＥ304は直径1.5ｍ、深さ1.15ｍで、井戸枠の痕跡はない。埋土から少量の土器片が出土した。

ＳＤ302の西、左京七条二坊西南坪内においては、上述したＳＤ310Ｂ・ＳＤ312以外に、東区で井戸**ＳＥ305・309**、中央区で掘立柱建物**ＳＢ325**を検出した。ＳＥ305は直径2.5ｍ，深さ1.7ｍで、井戸枠の痕跡はない。埋土から完形平瓦を含む瓦片、飛鳥Ⅴの土器（土師器鍋・甕Ｂなど）、角材・木製匙（杓子）・瓢箪などが出土した。ＳＥ309は直径2.0ｍ，深さ1.7ｍで、井戸枠の痕跡はない。埋土から飛鳥Ⅴの土器（土師器鍋Ａ・甕Ｂ・盤Ａなど）、瓦片、籠・斎串などが出土した。ＳＢ325は梁行２間（3.9ｍ）の南北棟の北妻部分で、桁行１間（柱間寸法2.4ｍ）分を検出した。妻柱および２本目の側柱は、玉石を礎盤にしていた。

東一坊大路は中央区と西区の間を通るが、農道・水路の関係で調査できなかった。その東の左京七条一坊東南坪内（西区）には、掘立柱建物２棟（**ＳＢ350・351**）がある。これらはかつて急傾斜だった残丘を切り崩し造成した東南向きの緩斜面上に建っていた。一辺１ｍ以上の大型柱掘形をもつ掘立柱建物ＳＢ350は、梁行３間（6.0ｍ、柱間寸法2.1・1.8・2.1）、桁行５間（12ｍ）以上（柱間寸法2.4ｍ等間）の南北棟で、いくつかの柱掘形は柱筋方向に長い長方形を呈する。ＳＢ351はＳＢ350廃絶後の東西棟建物で、梁行３間（６ｍ）、桁行３間（柱間寸法1.8ｍ等間）以上である。柱掘形は一辺40～60㎝と小規模である。

中世の遺構　中央区西端で検出した**ＳＢ321**は、柱間2.1ｍの総柱建物の東南部にあたるが全体規模不詳。柱穴内やこれを切った耕作溝から黒色土器が出土しているので、平安時代にさかのぼると思われる。

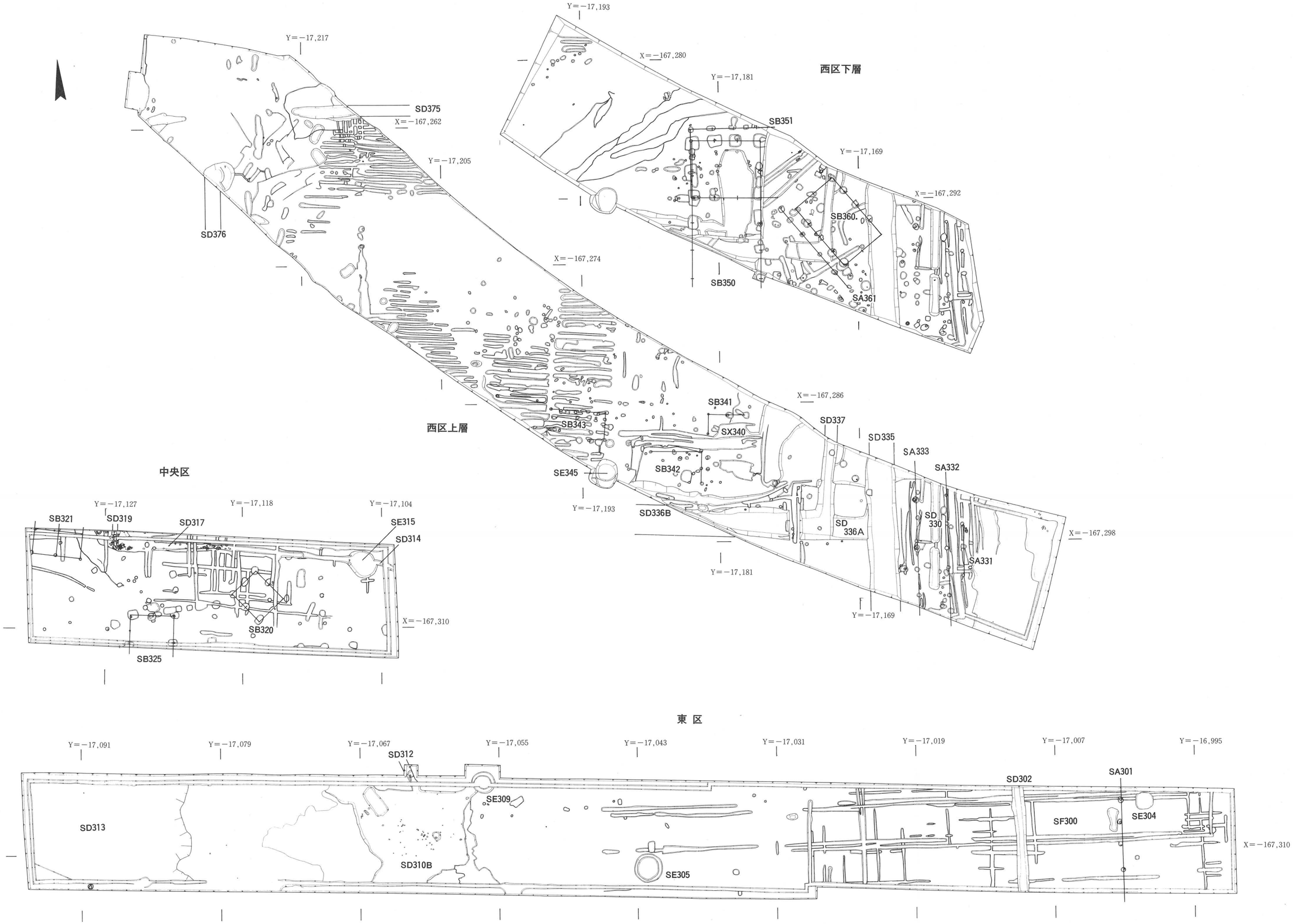


Fig.36　第75次調査遺構図（1：300）

西区では四周に濠がめぐる12世紀末～13世紀の居館跡を検出した。居館は藤原宮期の造成面を再度小規模に整地して設営しており、関連する遺構として、濠の外側に溝１条、柵列３条、内側に井戸１基、掘立柱建物３棟以上、土器溜などがある。なお、中世の整地土からは、中世土器以外に８世紀後半代の土器（須恵器杯蓋、土師器甕・高杯・杯Ｂなど）もまとまって出土している。

四周の濠はすべて白色粘土層を含む同じ土で埋め戻しており、一連の濠であることは明白である。東濠ＳＤ335（幅2.5～3.0ｍ、深さ0.9ｍ）は、当初、調査区の南北に延びていた（ＳＤ335Ａ）が、後に南半部を埋め戻し、新たに掘削した南濠ＳＤ336Ａと接続する（ＳＤ335Ｂ）。南濠ＳＤ336Ａは幅2.0ｍ、深さ0.3ｍとＳＤ335Ｂより一段浅く、後にＳＤ335Ｂの西側に掘削した新たな東濠ＳＤ337（幅1.2ｍ、深さ0.3ｍ）と接続させた時に、幅2.6ｍ、深さ0.6ｍと若干拡張している（ＳＤ336Ｂ）。これに対し、西濠ＳＤ376（幅2.3ｍ、深さ1.3ｍ）と北濠ＳＤ375（幅1.0ｍ、深さ0.3ｍ）の位置は調査区内では変更がない。東濠と南濠のみを掘り直したと仮定すれば、当初、東西57.5ｍ（濠心々）、南北42.5ｍ以上の区画を形成していた周濠のうち、まず南濠の位置を北にずらし、次に東濠を西に約５ｍずらして、最終的には東西52.5ｍ、南北36.4ｍの区画に規模を縮小したことになる。各濠内から12世紀末～13世紀中葉（川越編年Ⅲ－Ａ～Ｃ）瓦器椀をはじめとする中世土器片が出土したが、ＳＤ335Ａ下層が川越編年Ⅲ－Ａを主体とするほかは、その間に顕著な時期差は認めがたい。なお、最終的な周濠区画は、畑の段差や農道などの現在の地物によく対応する。

東濠ＳＤ335の外側には、東３ｍを隔てて南北溝ＳＤ330（幅0.9ｍ、深さ0.7ｍ）がある。埋土が濠と同じで、13世紀中葉（川越編年Ⅲ－Ｂの末期形態）の瓦器椀・皿、土師器皿が多数出土しており、居館跡にともなうことは明らかである。ＳＤ330は調査区北端から約５ｍでいったん途切れ、さらに４ｍ延びて終わる。途切れる位置は南濠ＳＤ336の南肩の東延長とほぼ一致する。したがって、最終的な周濠区画に対応する時期の溝と判断する。ＳＤ330の両側に柵列ＳＡ331・332・333がある。ＳＡ332・333は６間以上でさらに南北に延びており、東濠ＳＤ335Ａ、すなわち、当初の周濠区画に対応すると思われる。

周濠内の井戸ＳＥ345は区画内のやや東寄り、南濠ＳＤ336に接して掘削されており、直径1.85ｍ、深さ1.6ｍ。少量の土器片が出土したのみで、井戸枠などは残っていなかった。区画内の中央部は後世の削平が著しく、居館の中枢施設はまったく不明。南東部で小さなピットを多数検出したが、建物にまとまるものは少なく、わずかに東西棟３棟分の一部が指摘できるにすぎない（ＳＢ341・342・343）。ＳＢ341付近の南東斜面には13世紀前葉（川越編年Ⅲ－Ｂ）の瓦器椀・皿・土釜などが大量に廃棄されていた（ＳＸ340）。

遺　物

遺構にともなう土器類に関しては上記のとおり。顕著な遺物としてＳＥ305から出土した木

製匙がある（Fig.37）。全長41.9cm、身幅7.9cm、身高4.3cmで、柄の基端にパルメットを彫刻する。屈曲したパルメットの端を容器の口縁にひっかけて、容器内に落ち込まないように工夫している。柄の基端に同じ機能の装飾をほどこした刳物の匙や杓子は弥生時代に多いが、7世紀後半の例はめずらしい。

まとめ

宮に近接するにもかかわらず、左京七条二坊西南坪では、中央部の溜まり状によどんだ流路とそれにとりつく溝、東部の井戸2基、西部の掘立柱建物1棟のほかに藤原宮期の顕著な遺構は存在しない。坪の中央部は古くからの流路のために低湿地状を呈し、居住に適さなかった可能性もあるが、東部に井戸以外の遺構がないことは隣接する七条二坊東南坪や七条三坊など第74次調査区の様相と大きく異なる。また、第74次調査区では瓦片がほとんど出土していないのに、西南坪では井戸の埋土から完形平瓦が出土したのをはじめ、瓦片が比較的多数出土しているのがめだつ。調査地の南、左京八条二坊は紀寺の寺域にあたる。あるいは、紀寺付属の苑院などが一部北に延びていた可能性も考慮できるだろう。

左京七条一坊東南坪では、藤原宮期に飛鳥川右岸に点在する残丘のひとつを切り崩して整地し、造成地に大規模な掘立柱建物を建てている。検出した梁行3間、桁行5間以上の南北棟ＳＢ350を東南坪の脇殿と解するならば、正殿は調査地の北、現在の春日神社南の高まり付近に想定できるかもしれない。東南坪の造成地は、中世に居館として再利用される。その整地土には8世紀後半の土器類が比較的まとまって出土しており、中世居館に先立って奈良時代にもこの造成地を再利用した可能性もある。中世居館の本体は削平されて残っていないが、方形にめぐる周濠からかなり大規模な施設が想定できる。

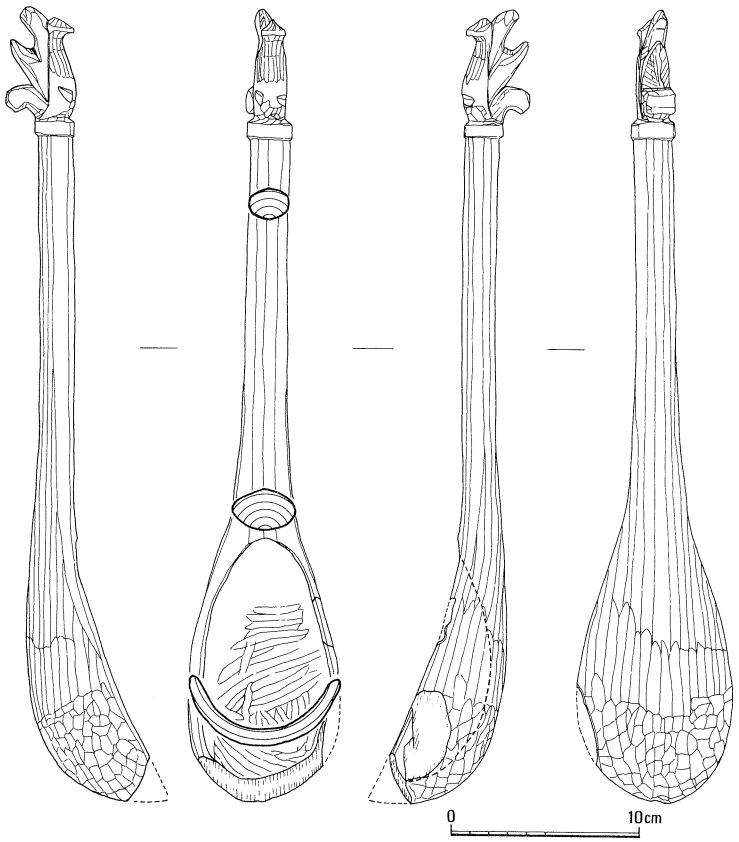


Fig.37　ＳＥ305出土木製匙（1：4）

3　左京八条四坊（日向寺）の調査（第75－４次）

（1994年６月）

本調査は住宅建て替えに伴う事前調査として、橿原市南浦町で行ったものである。調査地は天香久山の南裾部で、左京八条四坊西南坪にあたる。東西6.5ｍ、南北2.5ｍの調査区を設定した。層序は上から順に、現代盛土、灰色粘土、灰色粘土混黄褐色砂質土（整地土）、黄色砂質土（整地土）、黄褐色砂質土（整地土）である。黄色砂質土上面で遺構検出を行ったが、藤原京あるいは日向寺に関連する遺構はなかった。地表下1.2ｍで湧水が激しくなり、それ以上の掘り下げはできなかった。各整地土からは土器や瓦が出土しており、奈良時代や平安時代にかなり大規模な整地を行っていることは確かである。周辺地域の調査の進展が期待される。

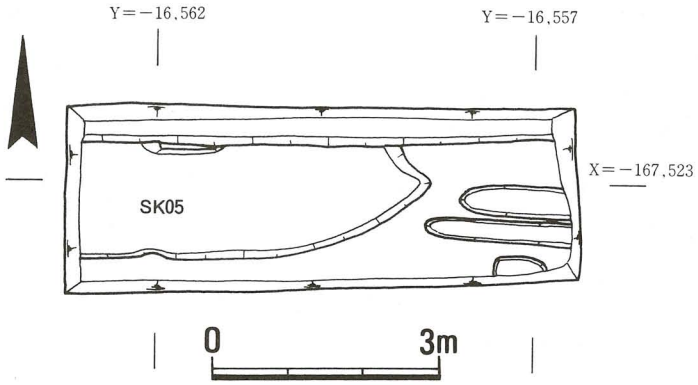


Fig.38　第75－４次調査遺構図（１：100）

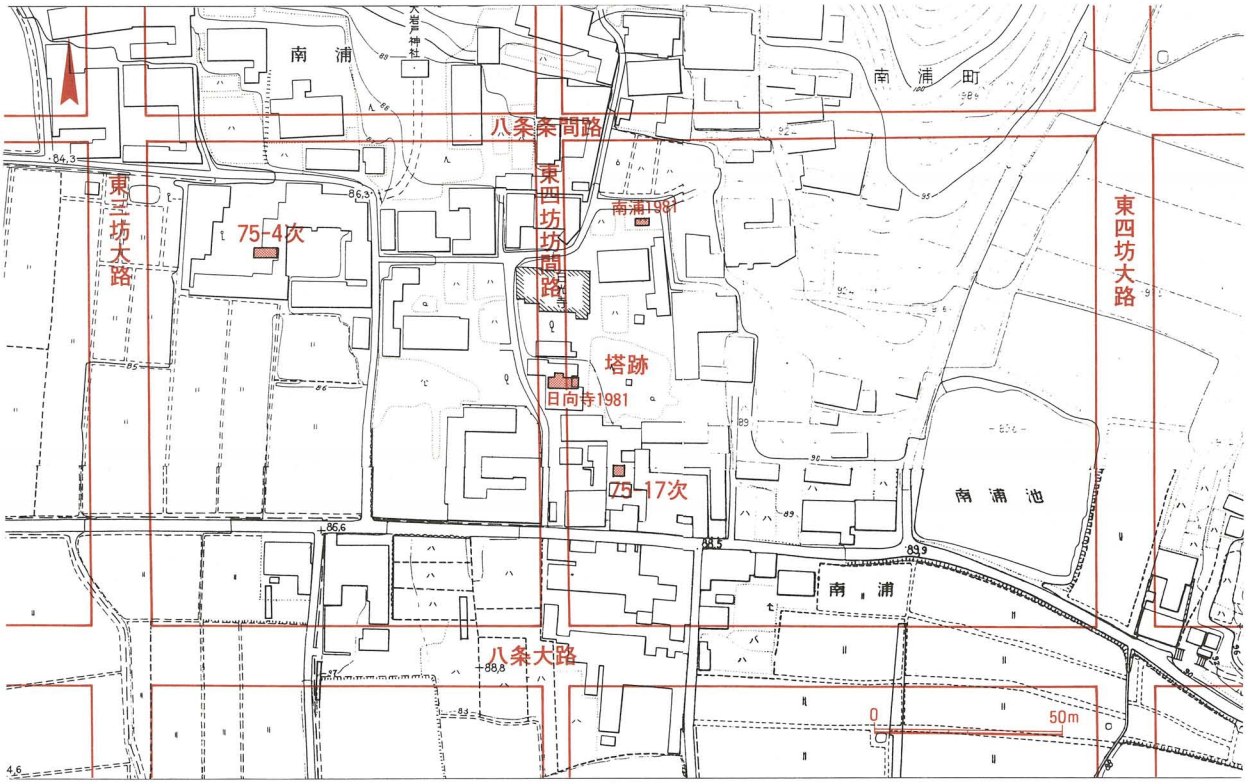


Fig.39　第75－４次調査位置図（１：2000）

4　左京十一条三坊（雷丘北方遺跡第４次）の調査（第71－13次）

（1994年１月～４月）

本調査は、高市郡明日香村雷の北に計画された県道飛鳥橿原神宮前停車場線新設工事に伴う事前調査で、1991年に発見された雷丘北方遺跡の第４次目の調査である。従前の調査によって、雷丘北方遺跡は飛鳥川右岸で雷丘から小山に至る小丘陵との間の平坦地上に位置し、中心部に東西５間、南北４間の四面庇付東西棟建物（正殿）とその東西の２棟づつの細長い南北棟建物（脇殿）からなる建物群を配し、それらの東、西、南を掘立柱塀と溝とで区画する構造とされている。第３次調査では南の掘立柱塀の中央には大規模な門状施設が無いことを明らかにしたが、あわせて東西脇殿の南妻柱列に柱筋を揃えた位置に同規模の東西棟建物（南殿）が存在することを確認し、中心部は正殿を囲む長大な掘立柱建物による長方形区画となることが判明した。遺跡は７世紀後半から８世紀後半代まで存続するが、建物群が形成されたＡ期と、正殿を建て替え、南殿を廃棄し周囲を礫敷に替えたＢ期とに大別され、さらにＡ期は溝ＳＤ2730の造替などを根拠に１～３の小期に細分される。正殿が藤原京左京十一条三坊西南・西北坪の南北中軸線上にあり、東西脇殿は西北坪に入っていることから、遺跡は２町分を占めていたと考えられ、建物配置と占地の規模などから皇族を含む上級貴族の邸宅・宮殿あるいは京内に置かれた官衙である可能性が高いと想定されている。

今回の調査は、遺跡の東への広がりを把握することと、第３次調査で確認された東西棟建物の全容を明らかにすることを目的とした。調査は前者について東限の掘立柱塀ＳＡ2845以東に延びる東西溝ＳＤ2730の東延長部および東限の南北溝の検出をめざして、南北10ｍ、東西７～８ｍの調査区（１区）を設定して実施した。後者については当初、南殿想定地全域の調査を計画したが、諸般の事情で調査期間が限定され東西17間の建物全ての検出が難しい情勢となって、やむなく東９間分について南北12ｍ、東西22ｍの調査区（２区）と西４間分について南北10ｍ、東西10ｍの調査区（３区）を設定して実施したものである。以下、東の１区と南殿に関わる２・３区とにわけてその概要を報告する。

遺　構

１区　調査地の層序は、上から耕土、床土、茶灰色砂質土で、北半にはその下に黄色粘土と炭化物を含む灰褐色粘土が厚く堆積し、地山の青灰色細砂・青灰色微砂に至る。南半では茶灰色砂質土の下は灰褐色粘土細粒混じりの灰色細砂で、その下は青灰色細砂以下の自然堆積層となっている。後述するように北半の炭化物を含む灰褐色粘土層は下層溝を埋め立てた整地土である。

検出した遺構には東西溝ＳＤ2730のほかに下層溝、土坑、井戸、石敷などがあるが、東限の南北溝は検出されなかった。整地土下で検出される前４者がＡ期に属し、茶灰色砂質土の下で検出される石敷等はＢ期に属する。

東西溝ＳＤ2730は幅約2.5ｍ、深さ0.4ｍで埋土は暗灰色粘土混り灰色砂土である。溝は東限の南北塀ＳＡ2845以西では幅狭くなって南殿ＳＢ2850の南の溝につながり、そこでは石組溝への造替が確認されるが、今回の１区では北に寄せて掘り直した素掘溝ＳＤ2730Ｂが確認されるだけである。溝底の南北端には掘り直し以前の杭を４本確認しており、しがらみで護岸した素掘溝と思われる。埋土からは少量の７世紀後半代の土器と砥石が出土した。溝は長さ６ｍ分を検出したが、調査区の東外方へなお延びており、東限の南北溝は検出されなかった。したがって遺跡は東区画塀ＳＡ2845の東10.5ｍ以上まで広がっていることになる。

下層溝ＳＤ3240は石敷ＳＸ3256などの下で検出した。溝全体は東で北へ傾く方位をもち、南から約４ｍが深さ0.5ｍと深いが、以北は深さ0.3ｍで調査区北外方に広がっている。溝底には流水の形跡が無く、北下がりの層をなす暗灰粘土・黄色粘土・灰褐粘土の間に炭化物層が薄く堆積することから、全体が埋め立て整地土層である可能性がある。ただその場合でも、後述の土坑はその堆積層の中程から掘り込まれており、一度に埋め立てたものではない。炭化物層など下層から７世紀末の土器と墨痕のある削り屑、凸面布目平瓦片などが少量出土し、上層には長さ2.5㎝の円棒に小孔をあけた土錘状の土製品が、最上層には「嶋女」の墨書をもつ奈良時代の須恵器蓋がある。

土坑ＳＫ3245は下層溝ＳＤ3240の堆積層中程から掘り込まれた直径0.5ｍ、深さ0.3ｍの小規模な土坑で、表に「恵思和上三」、裏に「祥□□」と書いた荷札木簡と少量の土器が出土した。

井戸ＳＥ3250は石敷ＳＸ3255直下の整地土下面から掘り込む。直径1.6～1.8ｍ、深さ0.7ｍの規模で、埋土の暗灰褐色砂土は中凹みに堆積し枠板などは検出されなかった。埋土からは７世紀末の土器や銅片が出土し、土師器甕片には「寺(?)」の墨書がある。北岸は大官大寺式軒平瓦などを含む瓦礫群ＳＸ3247で覆われ、南岸は先の土坑ＳＫ3245の一部を壊している。

石敷ＳＸ3255は幅0.6ｍで東西方向に細長く延びる。第３次調査東区の石敷ＳＸ2851の東延長部にあたり、調査区中央までの長さ2.5ｍ分を検出しただけで東半では検出されなかった。

石敷区画ＳＸ3256は東と西と南の辺が直線をなし、北は石敷ＳＸ3255の南に連なって、東西幅1.2ｍ、南北幅1.5ｍの長方形区画を形成する。この規模は第３次調査区の石敷区画ＳＸ2849の内部と類似しており、用材の一部と直上に縄目叩きの平瓦が、直下の整地土に飛鳥Ⅴ期の土器が含まれる点でもＳＸ2849と同様で一連の施設と思われるが、石敷ＳＸ3255とともに用途は明らかでない。

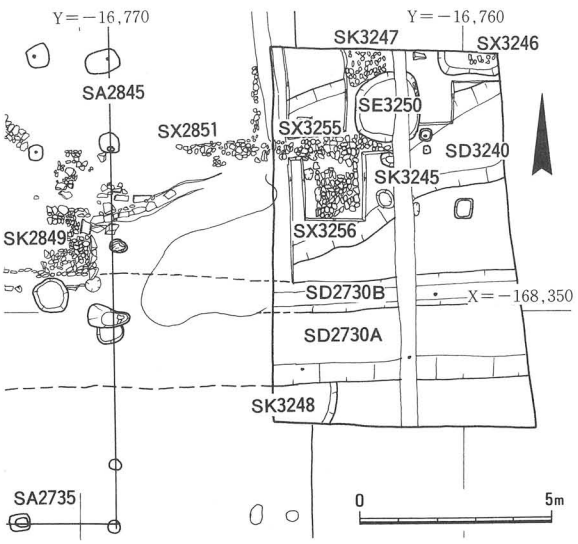


Fig.40　第71－13次調査１区遺構図（１：200）

２・３区　基本層序は１区と変わらないが、灰褐色土の下には全域に奈良時代後半までの土器を含むＢ期の礫敷が広がる。その下は、２区では南半部に黄色粘土、暗茶色粘土、灰褐色砂の整地土があり、暗青灰色細砂の地山に至る。暗青灰色砂は自然河川状の堆積層で古墳時代前半の土器を含む。３区では黄色粘土の整地は顕著でなく、茶褐色粘質土が地山の上にのっている。

検出した主な遺構は既出の建物ＳＢ2850と東西溝ＳＤ2730であり、新たに検出した遺構はそれらに関わる石敷ＳＸ3261、暗渠ＳＸ3275などのほか、２区の北側の浅く不整形な土坑数基と柱穴を壊す方形土坑等があるに過ぎない。

ＳＢ2850は、第３次調査で東妻柱列と中央部南側の６間分の柱穴を確認し、第２次調査で検出していた柱根３本を北側柱列の一部とみて東西17間、南北２間の身舎に南庇のつく建物を想定した。今回は建物東半の２区で、第３次調査区で検出した柱穴に加えて新たに、北側柱９本、南側柱・南庇柱各４本を検出し、西半の３区では南側柱、南庇柱各３本のほか、西妻柱列を想定通りＢ期の南北石組溝の下で検出した。これによって建物は第３次調査の想定通り、桁行17間（約40ｍ）、梁行２間（4.7ｍ）であり、後に2.35ｍの出をもつ南庇がつくことが確定した。なお、第２次調査の３本の柱根については、柱間が不揃いで、柱筋も異なっていたためにＡ期の建物とみなさなかったが、再検出の結果、それは柱が著しく傾いていることによるもので、柱の基底部では柱筋、柱間ともに揃っていることが判明した。

身舎の柱掘形は平面1.2×1.4ｍの長方形を呈し、柱筋方向に長い傾向がある。深さ1.2ｍで直径25㎝の柱根が遺存するものがある。なお、身舎東南隅の柱穴に残る柱は直径15㎝と細く、深さも40㎝しかない。これはこの柱位置が北に寄っていることと、これとは別に柱痕跡が認められることから、床束等の別の用途の柱と考えられる。庇の柱掘形は一辺1.0ｍ、深さ0.7ｍで、柱は直径15㎝程と細い。柱掘形は黄色粘土の整地土上面から掘り込まれるが、この黄色粘土は東西石組溝ＳＤ2730Ｂの裏込めとなっており、庇がＡ－２期になってつけ加えられたことは確実である。

また、第３次調査ではこの建物はＢ期には取り壊されて礫敷となることが確認されており、礫敷を除去した検出面には建物の旧床面の状況が残されている可能性が高いと期待された。精査の結果、柱根や柱痕跡を貫くように幅30㎝弱の浅い灰色粘質土の帯**ＳＸ3263**が確認され、南側柱列の東端間では同じ幅に川原石を並べた石敷**ＳＸ3261**とその抜き取り痕跡**ＳＸ3262**が検出された。これらはちょうど柱筋を貫いて存在することから、柱間をつな

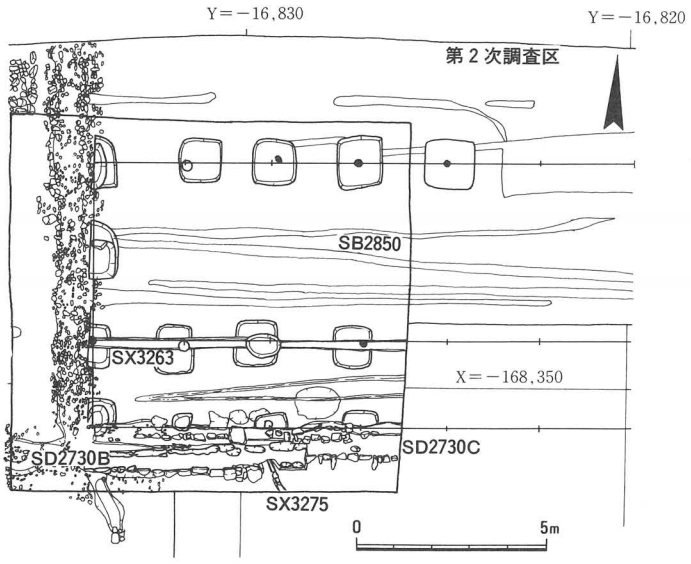


Fig.41　第71－13次調査３区遺構図（１：200）

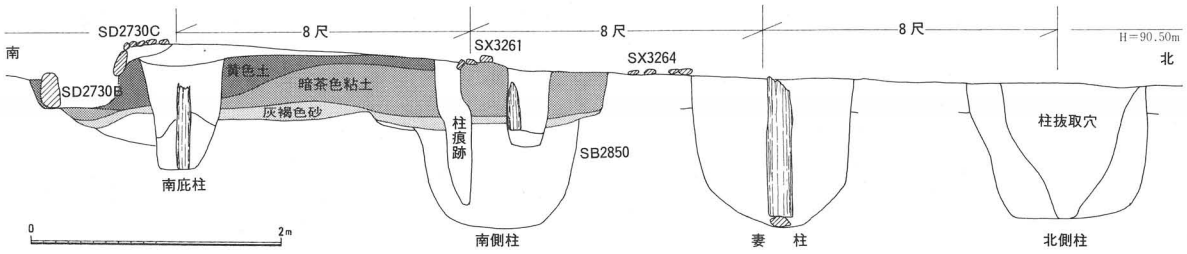


Fig.42　ＳＢ2850・ＳＤ2730・整地土の土層模式図（１：60）

ぐ壁をうける地覆とその痕跡と考えられ、建物内部は石敷あるいは土間であった可能性が高い。

なお、調査の過程で北側柱列については明瞭に柱掘形が検出されたが、南側柱と庇柱については極めて困難であり、既に露出している柱根や明瞭な柱抜取穴にひかれて、埋土の乱れた部分を最大限評価して柱掘形とした。しかし、柱穴を断ち割って精査した結果、南側柱列の掘形については検出面下約50㎝の黄色粘土、暗茶色粘土、灰褐色砂の下から掘り込んでおり、本来整地土上面では検出されるはずのないことが判明した（Fig.42）。この検出面の違いは、建物建設時に南半については一段低い状況であったのか、あるいは、建設後にその高さまでの土を除去したかのどちらかであり、建てた柱をそのままに先の３層の整地土を施したことを示している。いずれであるかを明確に示す手がかりはないが、整地土の最下層灰褐色砂は建物の東半部に限定的にみられるにも関わらず、水平で均一な厚さをもち、土質も洪水に際しての堆積砂をおもわせること、さらに検出面の高さが整地土のみられる範囲すなわち建物の棟通りの北約１ｍより南については、緩やかな傾斜で約15㎝高くなっており、その起伏は建物廃絶後の礫敷段階にも引き継がれていることに注目すると、建築後のある時期に南半が洪水等で流失し、それを補いさらに再度の流失を防ぐために、南半を土手状に高く盛り上げた結果であると推定するのが妥当であろう。その場合、流失はＡ－２期以前のこととなる。

ＳＤ2730にはＡ、Ｂ、Ｃの造替がある。造営当初のＡは幅約１ｍの素掘溝であるが、大半を

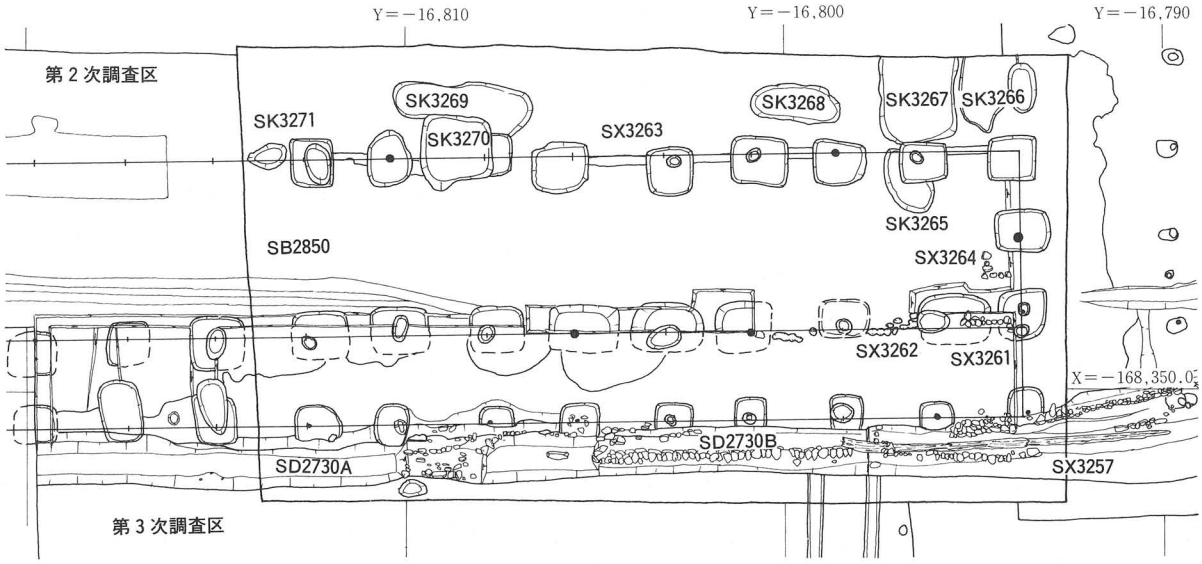


Fig.43　第71－13次調査２区遺構図（１：200）

Bに壊されていて独自の堆積層は極めて薄い。第3次調査の所見では東脇殿SB2830までは南妻柱の南1mに北岸をもつ幅3mの溝であるが、東脇殿の西南隅から北岸が南に寄るように幅を減じ、SB2850の前面では南側柱から約2.5m離れて北岸があるとされる。前述のようにA－1期の建物SB2850には庇が付かないから、建物前面に空閑地ができることになるがその理由はわからない。

SD2730Bは素掘りのAを東脇殿の西南隅からSB2850の前面について黄色粘土で埋め立て、それを裏込めとして南北側石を並べて石組溝とした段階で、幅0.4m、深さ0.3～0.4mで底石はない。側石は東半では0.5m大の川原石を2～3段に積み上げるが、西半では比較的大型の石1石を立て並べる傾向があり、一部平面方形の石が南北両岸に向かい合った箇所がある。建物SB2850の南庇の柱掘形との重複関係からは、南庇と共存する。SD2730Bの南岸には建物西端から2間目の柱の前に暗渠**SX3275**が敷設される。暗渠は行基式の丸瓦を重ねた構造で、東南から西北に向かい溝Bに流れ込む。溝Bの埋土からは円面硯のほか須恵器平瓶、鉢、土師器杯、鉢や墨痕のある木片などが出土し、須恵器鉢には全面に黒漆が塗布されている。

SD2730Cは石組溝Bを埋め、小型石1石だけを並べた小規模な雨落溝とした段階で、溝は幅0.3m、深さ0.2mで、北岸には建物寄りのやや高い位置にいま一列の石列が設けられた形跡がある。それらの石列が庇柱筋に一致していることから、この時期はまだなお建物が存続していると考えられる。西半部では、石組溝Bが西に向かって下降していたのにあわせて、西に厚く盛り土を行ってから石を並べていて、溝SD2730Cはほとんど傾斜をもたない。

建物SB2850の東南部にある角材を埋めた溝状土坑**SX3257**は礫敷きの下で検出され、石組溝Bの南側石を壊している。この関係からは角材の埋置がA－3期かB期かは判然としない。しかし、角材は溝幅0.3mで復原される溝Cの南側石に重なる位置にあるから溝Cとの併存はあり得ず、角材はB期の造成にともなって埋められたことになる。角材は長さ7.5mで一端の長さ2.2m分が円形に加工され、残された釘穴の間隔が4.7mであることから、柱間8尺の建物の桁材であり、上に被せた幅25cm、厚さ5cmの板材とともに、B期には取り壊されている建物SB2850の用材とみられる。

2区の北に散在する土坑**SK3266～3269**は不整形で浅く、埋土の暗灰色粘土には7世紀後半代の土器片と腐朽した木片が含まれている。いずれも建物SB2850の北側でおさまることから建物造成時の整地の一部と考えられる。また柱穴を壊す方形土坑SK3270は一辺1.7m、深さ0.7mの規模で、中に大量の礫が詰められている。機能や時期は明らかでない。

まとめ

南殿と遺構の変遷　今回の調査の結果、遺跡の中心区画の南殿SB2850は、第3次調査の想定通りの規模でA期に存在し、1～3小期の変遷をへてB期には廃絶することが確認された。A－1期の掘立柱建物SB2850は東西17間、南北2間の東西棟建物で、南庇はなく、柱間は桁行梁

行とも８尺等間であり、南側柱列が東西脇殿の南妻柱と揃い、東西妻柱は東西脇殿の側柱からそれぞれ約6.3m離れた中央に位置している。その後の変遷をたどると、Ａ－２期の直前には洪水等にみまわれ、それを契機として、南半に整地がなされ、素掘溝ＳＤ2730Ａを石組溝ＳＤ2730Ｂとし、建物に南庇を付加するなどの改造が行われたと推定される。そして、Ａ－３期には東脇殿に南庇をつけ加え、石組溝ＳＤ2730Ｂを小さな石組溝ＳＤ2730Ｃに作り替えるが、この建物に関しては改造は認められない。さらにＢ期にいたって、他の建物は存続するのに対して、この建物は廃絶され広く全域が礫敷きとなる。

また、側柱列で検出した壁地覆の痕跡から、Ａ－２期以後の建物内部およびＢ期の礫敷面には、建物棟通りに平行して南が高い起伏が存在することが判明した。起伏のある床面は通常の建物利用にとっては不都合であろうが、黄色整地土の状況から推定した通り、ある時期に建物の南半が洪水等で流失し、それを補いさらに再度の流失を防ぐために、南半を土手状に高く盛り上げたとすれば、形成された理由は理解される。

建物の造営と改修の年代については、石組溝Ｂの埋土に飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器があり、Ａ－２期の廃絶が飛鳥Ⅴ＝藤原宮期の１時点のことと知れ、礫敷中に奈良時代後半の土器が含まれることから、Ｂ期はその時期まで存続したことが確認される。したがって、Ａ－１期は７世紀後半代に始まり、Ｂ期の改造がなされるのは奈良時代に入ってからと推定されよう。

なお、遺跡の性格については建物配置から上級貴族の邸宅、宮殿あるいは京内官衙と推測され、今回の調査を含めた出土土器に大型の供膳具が目立ち、黒漆塗の須恵器鉢があって上級の貴族階層の什器とみられることと矛盾しない。しかし、伴出する文字資料は今回の荷札木簡の人名「恵思和上」をはじめとして仏教的色彩が濃く、土器類も寺院での什器とみることも可能である。であれば出土遺物の内容は直接に遺跡の性格を示さないことになる。瓦類についてもこの遺跡の建物に葺かれたものではなく、何度かの改造に際して近在から持ち込まれたものと推測されており、今回の調査で出土した遺物の多くが１区の下層溝や２・３区の石組溝ＳＤ2730Ｂなどの埋め立て整地に伴うことを重視すれば、土器にも瓦や木簡と同様に近在の遺跡から持ち込まれたものが含まれている可能性があり、なお慎重な検討が必要であるとおもわれる。

東外郭塀以東の状況　調査区内では、東限塀ＳＡ2845に平行した南北溝は確認されず、長方形区画に南接する東西大溝ＳＤ2730はなお東に延びていて、遺跡の東限の様相は来年度以降の調査に待たねばならない。また、東西溝と同時かそれ以後に形成された下層溝とその埋め立て整地土は、第３次調査東区では整地土の違いとして認識されており、今回の調査区の北、東へものびている。出土遺物からは７世紀後半から末の時期に限定され、Ａ期のこの地域は沼のような凹みであったと考えられる。下層溝の広がりと性格を含めて詳細の解明は来年度の調査に委ねたい。

5　左京十二条三坊（雷丘東方遺跡）の調査（第75－３次）

（1994年６月～７月）

本調査は、県道橿原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事にともない、明日香村雷において実施したものである。県道の拡幅部分の雷交差点以北については、1993年度に第71－９・10・14次調査を実施しており、７世紀前半から平安時代初めにかけての遺構を検出し、そのうち、奈良時代中頃から平安時代初めにかけての遺構は、小治田宮に関係するものと推定されるに至った（『概報24』）。その結果、建物の規模や配置を最終的に確認するために、現在の道路部分も調査する必要が生じた。そこで、拡幅部分の工事の終了を待って、前回調査できなかった旧道路部分と、「雷池」の東に新設される広場予定地の調査を実施することとなった。しかし、旧道路の西にある倉庫等への車両進入路を確保する必要上、調査区の設定にはいくつかの制約があり、結局、南区・中区・北区にわけて調査することとなった。調査面積は約500㎡である。

南区　現道路下には、ＮＴＴの電話線、都市ガス管及び県営水道の水道管がほぼ並行して埋設されており、遺構面はこれらの掘形によって寸断されている。また、戦前にこの道路が建設された時の削平も著しい。南区の南半は、路床の直下、及び畑の床土直下が花崗岩の風化した岩盤となるが、北半では岩盤が急激に落ち込み、斜面を整地した黄褐色砂質土と粘質土からなる

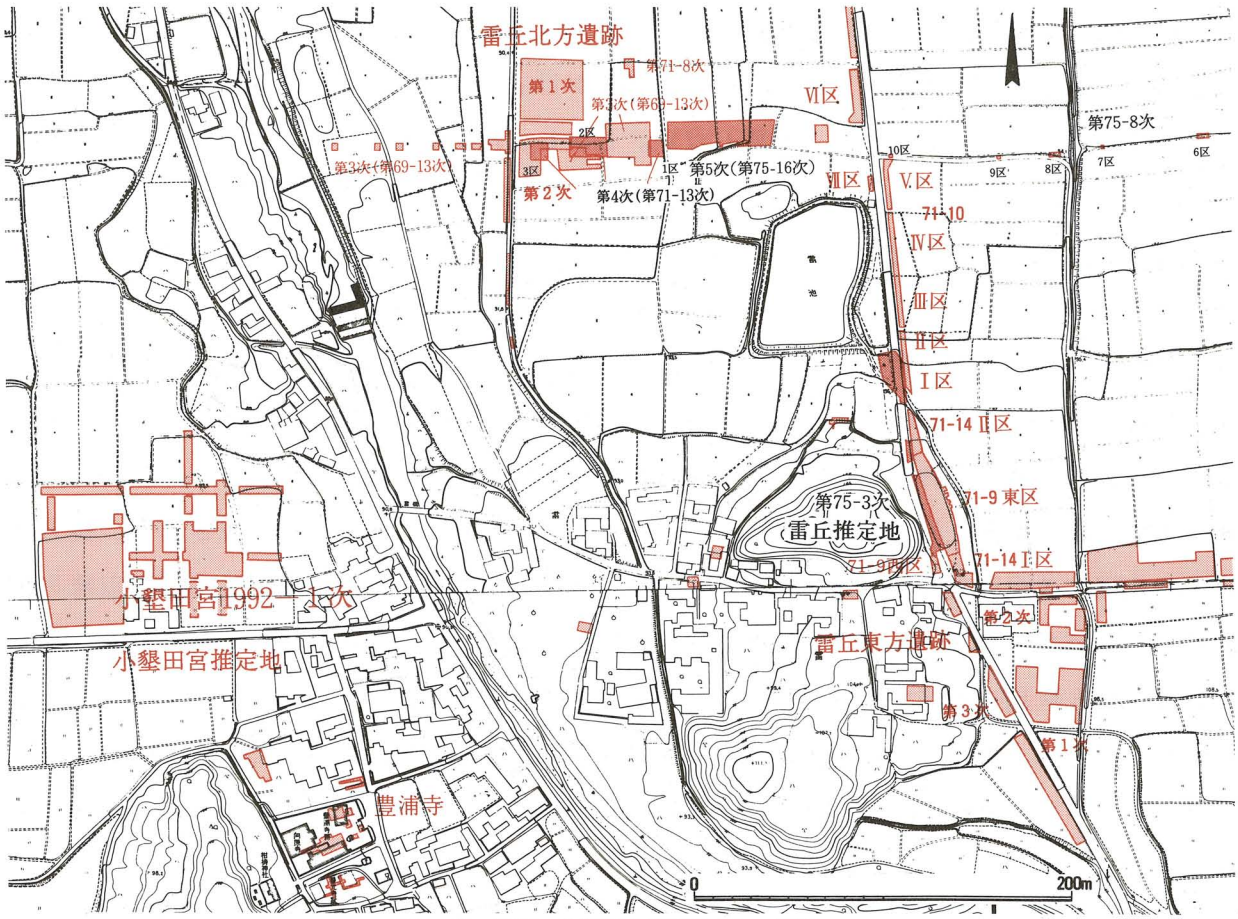


Fig.44　第75－３次調査位置図（１：4000）

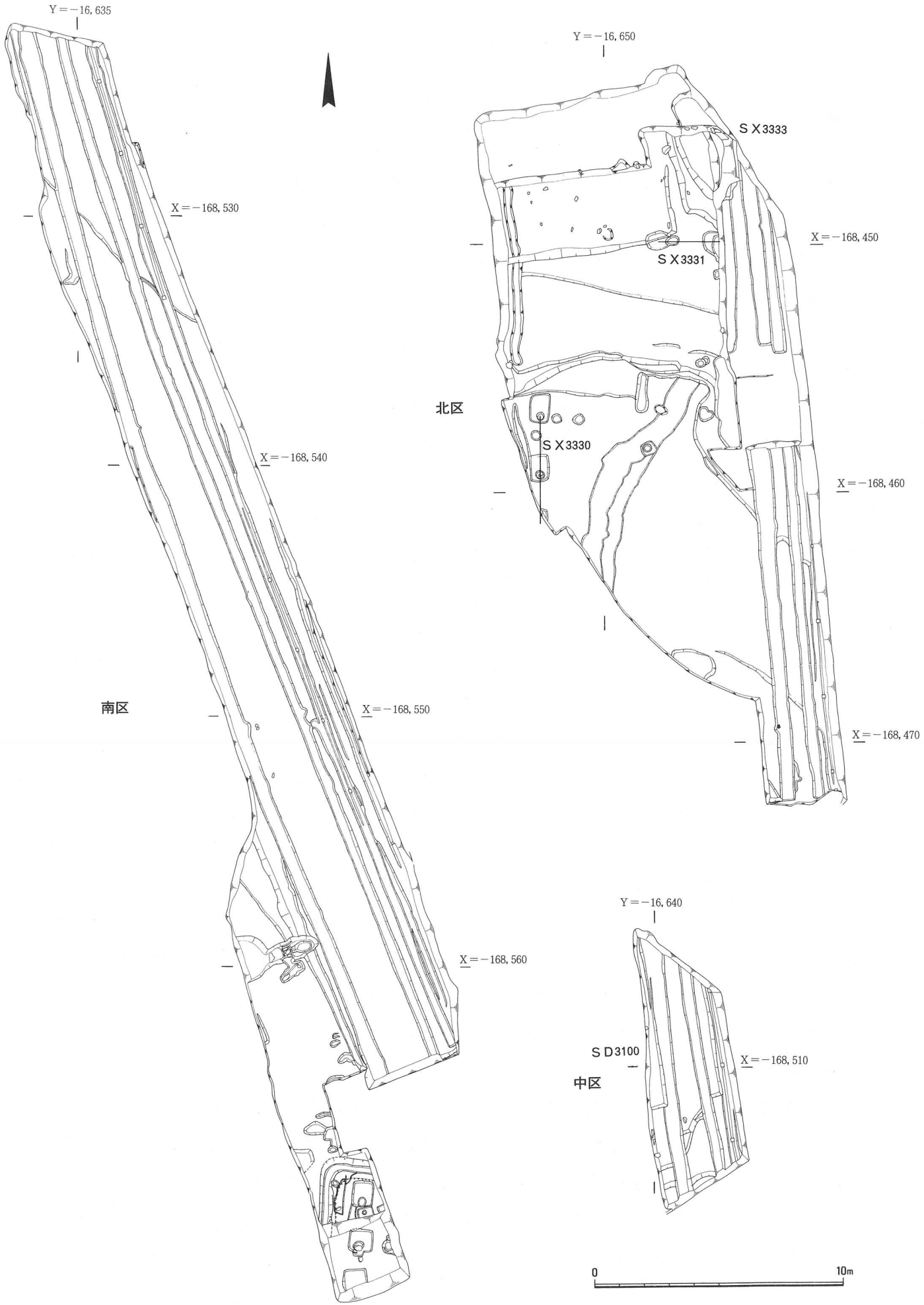


Fig.45　第75－３次調査遺構図（１：200）

整地土層上面で遺構を検出した。

検出した遺構には、礎石建物ＳＢ3030などがある。調査区の東壁断面で、前回調査で検出した礎石建物ＳＢ3030の南西隅の礎石抜取り穴１カ所を検出した。礎石の据え付け掘形の大きさは、南北1.4m、深さ0.3mあり、礎石抜取り穴には瓦片を含む。これでＳＢ3030の規模は３×３間の総柱建物であることが確定した。南区の北方では、地山の花崗岩岩盤が急激に落ち込み、黄褐色砂質土と粘質土からなる整地土が厚く堆積するがほとんど遺物を含まない。なお、これ以外に、調査区の南西部で戦前に操業していた炭焼き窯１基を検出した。

中区　中区では、電話線・ガス管・水道管による破壊をのがれた範囲でほぼ全面にわたって遺物包含層を検出した。この包含層を掘り下げると南西から北東方向にひろがる溝状土坑となり、前回、71－14次調査区で検出した下層大溝ＳＤ3100の西延長部分にあたることを確認した。幅約６m、深さ約0.8mあり、土層の堆積状況や遺物の出土状態は前回と同様であり、７世紀初めから前半代の土師器・須恵器が出土した。

北区　道路部分と、その西の広場予定地を調査した。広場予定地は、かつて雷丘の北麓に沿ってめぐる３段ほどの棚田として利用されていたが、その後、土砂・廃棄物の仮置き場として長い間使用されていた。旧道路下では、ここも電話線などによってほとんど破壊され、雷丘の北麓の旧地形を一部で確認したにとどまる。また、前回の71－10次調査で検出した土塁状のたかまりＳＸ3130や、その南側にある大溝ＳＤ3131の西延長部には、電話線の大型マンホールが設けられて徹底的に破壊されており、その延長部分はもちろん、その有無すら検討できなかった。調査区内で検出した遺構は希薄であるが、掘立柱建物の一部をなすと考えられる柱掘形３箇からなるＳＸ3330と、掘立柱東西塀の一部と思われる柱掘形２箇からなるＳＸ3331、丘陵の北東部を限るとみられる大溝ＳＸ3333の西岸を検出した。遺構は、この辺りの地山を形成する砂礫まじりの黄褐色粘質土上面で検出した。

ＳＸ3330の柱掘形の大きさは、南北1.2m、東西0.8m、深さ0.3mであり、直径0.2m程の柱痕跡が残る。柱間寸法は、2.3mほどであるが、柱掘形はかなり削平されている。柱掘形から７世紀後半（飛鳥Ⅳ段階）の土器が出土した。

ＳＸ3331の柱掘形の大きさは１m前後、深さは1.1mほどある。柱掘形から７世紀後半（飛鳥Ⅳ段階）の土器が出土した。

ＳＸ3333は、その西岸の一部を検出しただけであるが、地山をなす青灰色の砂礫層を深さ２m近く掘り下げた大規模な遺構である。埋土中に黄色粘土の塊が大量に含まれていることから、埋め戻されたものと推定される。７世紀前半から後半（飛鳥Ⅰ～Ⅳ段階）の土器と瓦片が少量出土した。規模や性格は不明であるが、雷丘の北に舌状に張り出した台地北端に沿って掘られた大規模な溝になる可能性が高い。

6　左京その他の調査

A　左京五条三坊の調査（第75－10次）

（1994年10月）

本調査は個人住宅新築に伴う事前調査である。調査地は推定左京五条三坊の東南坪と東北坪にまたがり、五条々間路の検出を主目的とし、南北15m、東西３mの調査区を設定した。しかし、五条々間路は検出できず、検出した遺構は藤原宮期に先行する斜行溝１条、藤原宮期の柱穴２個および溝状の落込み、中世の小穴群である。基本層序は地表面から耕作土、床土、黄灰色粘土で、遺構はすべて黄灰粘土の地山面で検出した。

藤原宮期以前の遺構　ＳＤ8260は調査区内でくの字に折れ曲がる斜行溝である。溝は南から北へ流れ、溝底のレベル差は調査区の南北で25cmである。溝内の遺物は少なく布留Ⅱ式の土器が出土しており、４世紀末期の溝と推定する。

藤原宮期の遺構　ＳＢ8250は南北3.6mを隔ててある２個の柱穴である。柱掘形は約１mの方形で、現存する深さは40cmである。発掘当初は、２個の柱穴の南北延長線上には柱穴が無いことから、身舎梁行全長が3.6mの東西棟と考え、北側の柱穴の西延長を拡張し柱穴の存在を求めた。しかし、柱穴の存在は確認出来なかった。現状では梁行１間（3.6m）、桁行不明の建物と考えておく。

発掘区西南にあるＳＸ8245は、溝状の落込みである。北端は溝状に途切れているが、未発掘区でどのような広がりをもつかは不明である。発掘区内で確認できる落込みの底は遺構面から約25cm下がり、底面には扁平な拳大の石が散見される。何等かの用途として人為的に置かれた可能性もある。埋土からは飛鳥Ⅴ期の土師器・須恵器が出土しており、この施設は藤原宮期の施設である。また、埋土内からはスサ入の壁土が出土した。

なお、五条々間路は予定位置で確認できなかったが、ＳＢ8250の残存状況からして、例え調査区内に五条々間路があったとしても、後世に削平された可能性が高い。

中世の遺構　瓦器を伴出する小穴を17個検出したが、どのような建物にまとまるかは不明である。

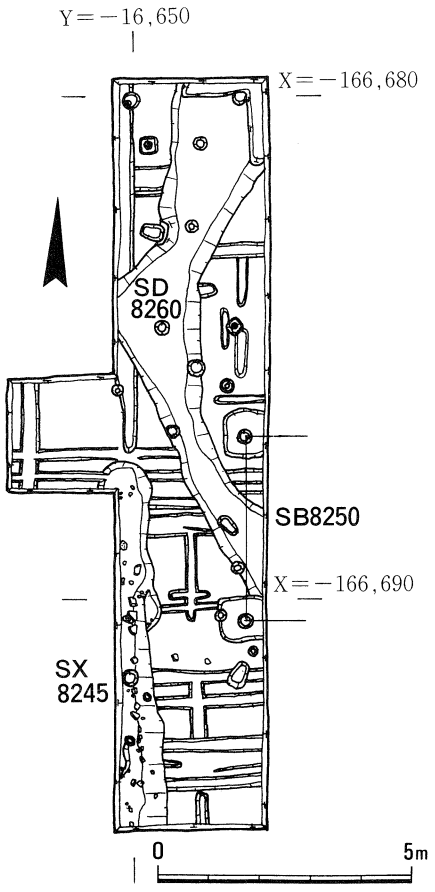


Fig.46　第75－10次調査遺構図（１：150）

B　左京十一条四・五坊の調査（第75－８次調査）

（1994年８月）

本調査は、下水道工事に伴う事前調査として明日香村奥山で行ったものである。調査地は奥山の集落西端から、県道橿原神宮東口停車場飛鳥線に至る東西道路上で、藤原京左京十一条四・五坊にあたる。調査は、竪坑の範囲を対象とし、東側から１区～10区とした。このうち１・３・５・７・９・10区で東西２ｍ、南北２ｍ、２・４・６・８区で、東西６ｍ、南北2.4ｍの発掘区を設定した。２区が中ツ道（東四坊大路）、９区が東三坊大路の想定位置にあたる。１区については、湧水が激しく発掘区の西側に隣接する小河川への影響を考え若干掘削ののち調査を断念した。なお遺構図は、条坊に関わる２・９区のみ図示している。

２区では、現路面下1.1ｍにある灰色砂層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、古墳時代前期の土坑ＳＫ3336、７世紀代の南北小溝ＳＤ3337（幅30㎝深さ20㎝ほど）、時期不明の土坑群ＳＸ3335である。中ツ道に関わる遺構は確認できなかった。

４区では、現路面下１ｍにある明茶褐色土層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、弥生時代中期の土坑１基、古墳時代中期の土坑１基、平安時代前期の土坑２基である。

６区では、現路面下1.3ｍより、発掘区の全面で旧河川の堆積土である黄灰色粘質土、灰色極粗砂等が認められた。この堆積土は、現路面下1.8ｍまで続いており、川底は確認できなかった。旧河川に含まれる遺物は、古墳時代から藤原宮期までの須恵器、土師器である。

９区では、現路面下１ｍにある黄褐色粘土層上面で遺構を検出した。検出した主な遺構は、７世紀代の南北斜行溝ＳＤ3344（深さ30㎝幅30㎝ほど）、時期不明の南北小溝１条である。東三坊大路に関わる遺構は確認できなかった。

３・５・７・８・10区については、それぞれ現路面下１ｍ前後で遺構検出を行ったが、時期不明の小溝や土坑を検出したのみである。

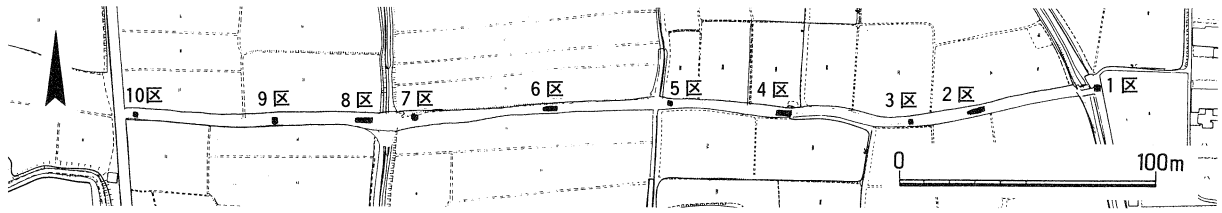


Fig.47　第75－８次調査位置図（１：3000）

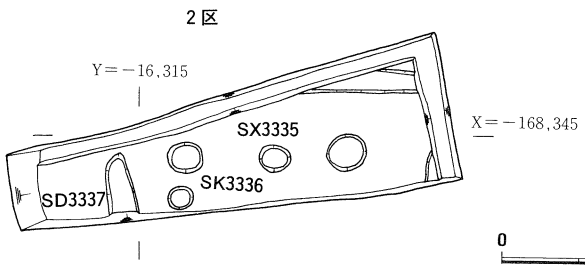


Fig.48　第75－８次調査２区遺構図（１：100）

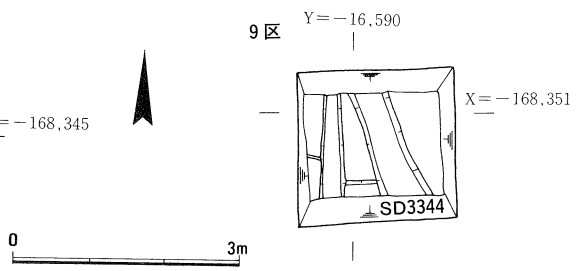


Fig.49　第75－８次調査９区遺構図（１：100）

7　右京七条二坊の調査（第75－11次）

（1994年10月～11月）

本調査は、橿原市四分町256－３・12・13において、県道の建設に伴う事前調査として実施した。調査面積は約528㎡である。

当該地は弥生時代の四分遺跡の南端付近にあたり、７世紀後半の藤原京期には藤原京の六条大路と西二坊大路の路面敷、および右京七条二坊西北坪の一部にあたる。さらに周辺の調査では、中世（12～13世紀）の遺構も見つかっており、これに関連する遺構も期待できるところである。

遺　構

調査区の層位は、表土直下に飛鳥川堤防の盛土が厚く堆積し、以下、中世以降の堆積層、中世と藤原京期の遺構がある暗褐色粘土層、さらに弥生後期の包含層である暗茶褐色粘土層（厚さ50～60㎝）、基層の茶褐色粘土ないし緑色砂岩層に移行する。

遺構は暗褐色粘土層、および暗茶褐色粘土層の上下２層にわたり検出した。上層遺構には掘立柱建物３棟、掘立柱塀３条、井戸１基、溝１条、土坑があり、下層遺構には土坑10基、中世以降の耕作に関わる東西および南北溝が多数ある。

以下、主要な遺構について述べる。

ＳＢ8290は、桁行４間以上の東西棟建物である。梁行規模は不詳である。桁行の柱間寸法は東の端間が1.7ｍ、他は2.4ｍ（８尺）である。

ＳＢ8291は、ＳＢ8290に重複する南北棟建物である。北の妻側柱のみを検出。柱間寸法は1.3ｍと1.6ｍである。

ＳＢ8292は、ＳＢ8290・8291に重複する建物である。東北隅柱のみを検出した。桁行、梁行ともに規模は不詳である。

ＳＢ8296は調査区の北端で検出した中世の建物である。桁行・梁行ともに１間分を検出した。柱穴の掘形は直径・深さともに20㎝程度と小さく浅い。柱間寸法は1.7ｍである。

ＳＡ8293は、掘立柱東西塀で３間分を検出した。柱間寸法は２ｍ前後である。この塀の北は六条大路南側溝の推定位置にあたり、右京七条二坊西北坪を区画する施設の可能性がある。

ＳＥ8297は、中世の井戸である。掘形の直径は2.5ｍ、検出面からの深さは2.0ｍである。抜き取りが、井戸底にまでおよぶ。一部に玉石が残っており、もとは石組の井戸だった可能性がある。井戸の抜き取りからは、曲物や毬杖（ギチョウ）の毬の可能性がある木球、12世紀代の瓦器椀などが出土した。

ＳＤ8298は、発掘区の東端で検出した南北溝である。一部を確認したのにとどまり、溝の規模は不明である。溝内の堆積層から瓦器椀が出土した。隣接調査地で検出している中世の溝と

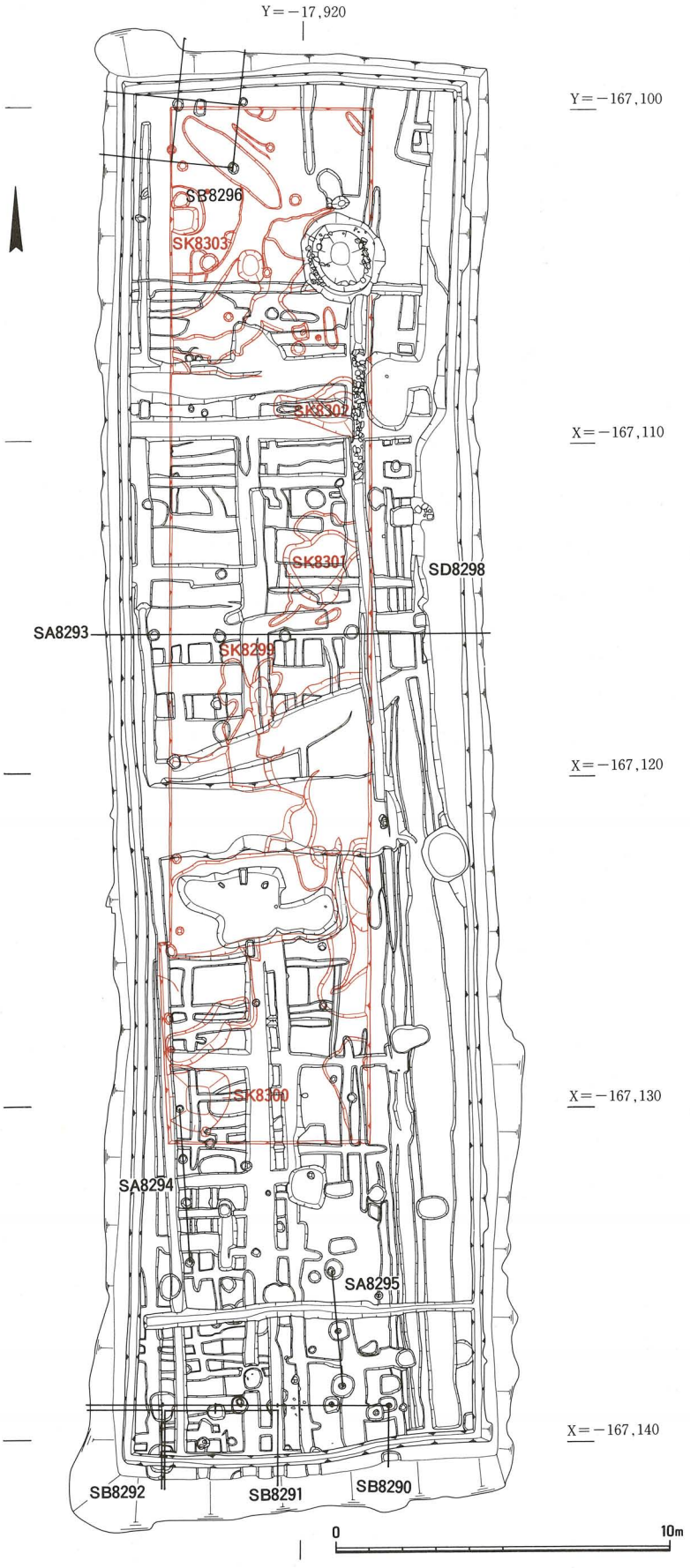


Fig.50　第75−11次調査遺構図（1 ：200）

一連であろう。

ＳＫ8300は、下層で検出した弥生時代後期の土坑である。直径約２ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.5ｍである。

ＳＫ8299は、下層で検出した弥生後期の土坑である。最大辺長約２ｍの不整形土坑で、検出面からの深さは0.3ｍである。

遺　物

遺物の大半を占めるのは、下層の土坑から出土した弥生後期の土器である。これは破片のみで、完形になるものはない。上層遺構に伴う遺物には、中世の井戸抜き取り穴からの出土品がある。これには、瓦器椀、瓦器小皿、土師器皿、羽釜および曲物、木球および板状品がある。瓦器の年代は12世紀代である。木球は広葉樹の幹を削り成形したもので、やや扁平であるが毬杖（ギチヨウ）の毬であろう。大きさは７㎝×6.5㎝、厚さ４㎝。曲物は直径25㎝、高さ15㎝で、端部をかば（桜の樹皮）で綴じ合わせる。藤原京期の土器は、少量である。

まとめ

検出した遺構は中世、藤原京期、弥生時代の3時期がある。このうち藤原京期では、右京七条二坊西北坪を区画する施設である可能性が強い東西塀ＳＡ8293と、建物３棟を検出した。調査区が道路敷地という制約もあって、他に関連する遺構は見いだせなかった。

建物は３時期の重複があり、ＳＢ8292→ＳＢ8290→ＳＢ8291と変遷している。

調査の最大のねらいであった六条大路南側溝は、検出できなかった。大路南側溝の推定位置である調査区の北半部には、藤原京期の包含層といえるものはなく、この時期の遺構面と中世の遺構面は同一である。この状態からみて、六条大路南側溝は中世に削平を受け、遺存しなかった可能性が強い。

弥生時代の主要な遺構は土坑群であり、四分遺跡の南端を画する施設などは検出できなかった。また、弥生後期の遺物包含層も調査区全体に広がることからみて、四分遺跡の範囲は従来の推定を超え、調査区のさらに南側にまで広がる可能性がでてきた。この点は、将来の調査に委ねなければならない。

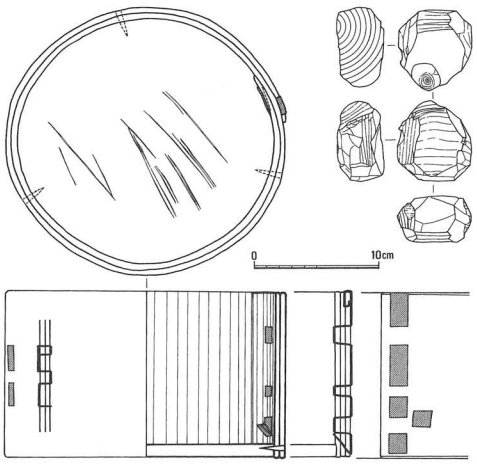


Fig.51　ＳＥ8297出土木製品（１：６）

8　本薬師寺の調査

A　本薬師寺1993－３次調査

（1994年２月～４月）

橿原市城殿町にある本薬師寺跡には、現在も金堂と東西二つの塔の土壇そして多数の礎石が残っている。本薬師寺跡では、これまで８回の発掘調査を実施し、金堂・中門・南面回廊などについて成果をあげてきた。今回は前年度の中門・南面回廊の調査に続く計画調査で、東塔の基壇規模と周囲の状況を明らかにすることを目的に調査を実施した。調査は1994年２月10日に開始し、４月15日に終了した。調査面積は276㎡である。

基本層序

調査地の現況は水田である。調査区の層位は上から順に、水田耕作土（厚さ約20㎝）と水田床土（厚さ約15㎝）、灰褐色土や暗黄灰褐色砂質土などの遺物包含層、凝灰岩の細片を含む暗褐色砂質土、粘土混り暗灰色砂質土、暗灰色砂質土である。本薬師寺に関係する遺構は、遺物包含層の下、伽藍造営時の整地である暗褐色砂質土層の上面で検出した。

遺　構

東塔跡には現状で、南北13ｍ、東西16ｍ、高さ約１ｍの土壇が残る。土壇上には舎利孔をもっ

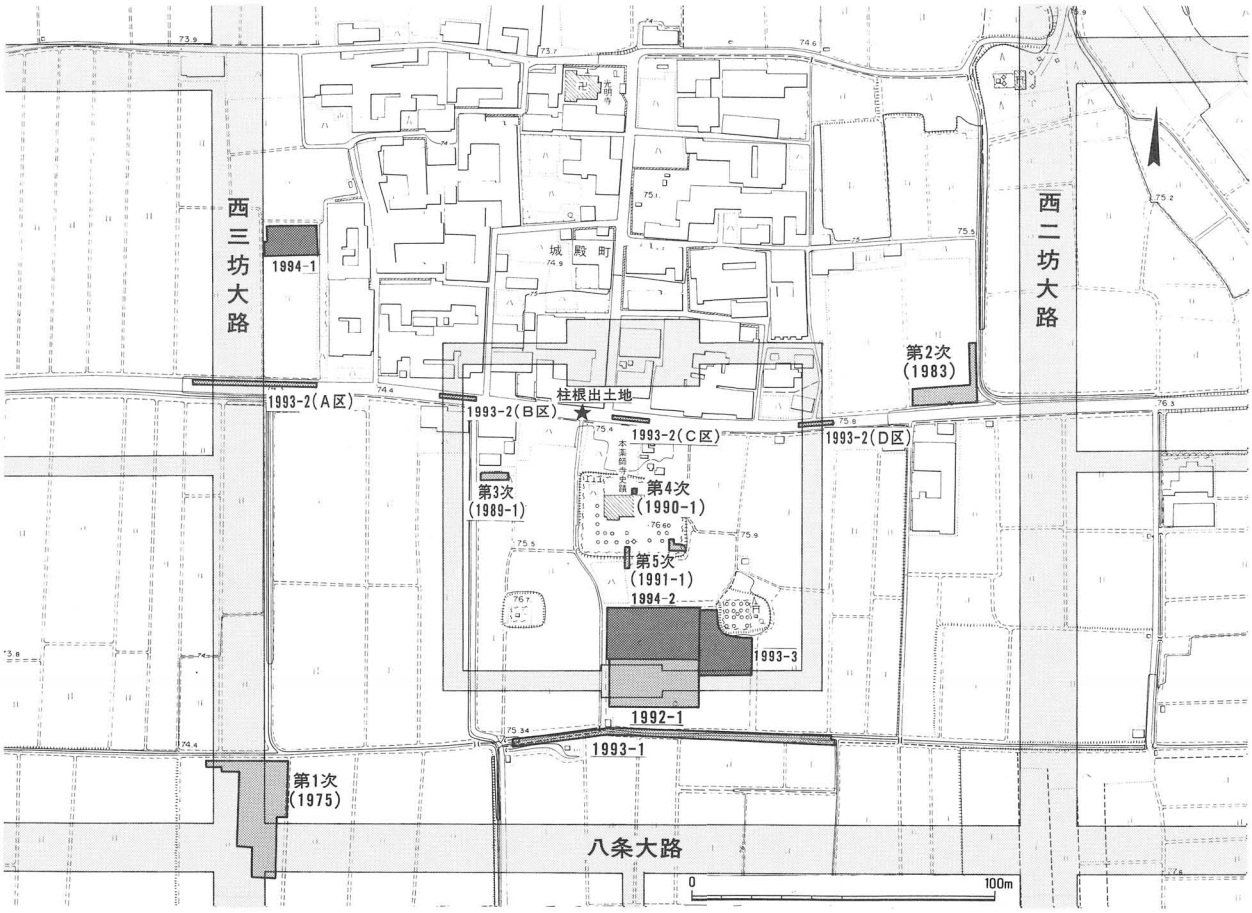


Fig.52　本薬師寺1993－３、1994－１・２次調査位置図（１：2500）

た心礎（東西2.1m、南北1.7m）のほか、四天柱礎石４個と側柱礎石11個がほぼ元の位置を保って残っている。側柱礎石は本来あった12個のうち１個が失われ、残る11個のなかにも大きく欠損した礎石がある。裳階の礎石は全くみあたらないため、この塔に裳階があったかどうかが議論された。今回の調査区は東塔跡土壇に及ばなかったので、裳階の有無について判断できる遺構を検出することはできなかったが、東塔の基壇規模および基壇周囲の施設について新たな知見をうることができた。

東塔基壇に関わる遺構　東塔西南隅の基壇地覆石抜き取り穴と階段地覆石抜き取り穴がある。

基壇地覆石抜き取り穴は、幅約70cmの溝状を呈している。地覆石据え付け掘形は確認していない。階段は南面階段と西面階段が調査区内に入っているが、これも石階はおろか地覆石まで完全に抜き取られ、その本来の位置を確定することはできなかった。

これら抜き取り穴および調査区内各所からは凝灰岩の切石断片が多数出土している。さらに、金堂の基壇化粧および階段には凝灰岩切石が使用されたことが既に判明しているので、東塔の基壇化粧も凝灰岩切石を用いたとみてよいだろう。

地覆石の位置を確定することはできなかったが、後述する基壇周囲の化粧との関係から、基壇規模は一応、一辺14.2m、周囲の石敷きからの基壇高は1.45mと推定される。

調査区が基壇本体におよんでいないので基壇築成については十分な調査ができなかったが、調査区の東辺で基盤層が大きく落ち込む部分があった。

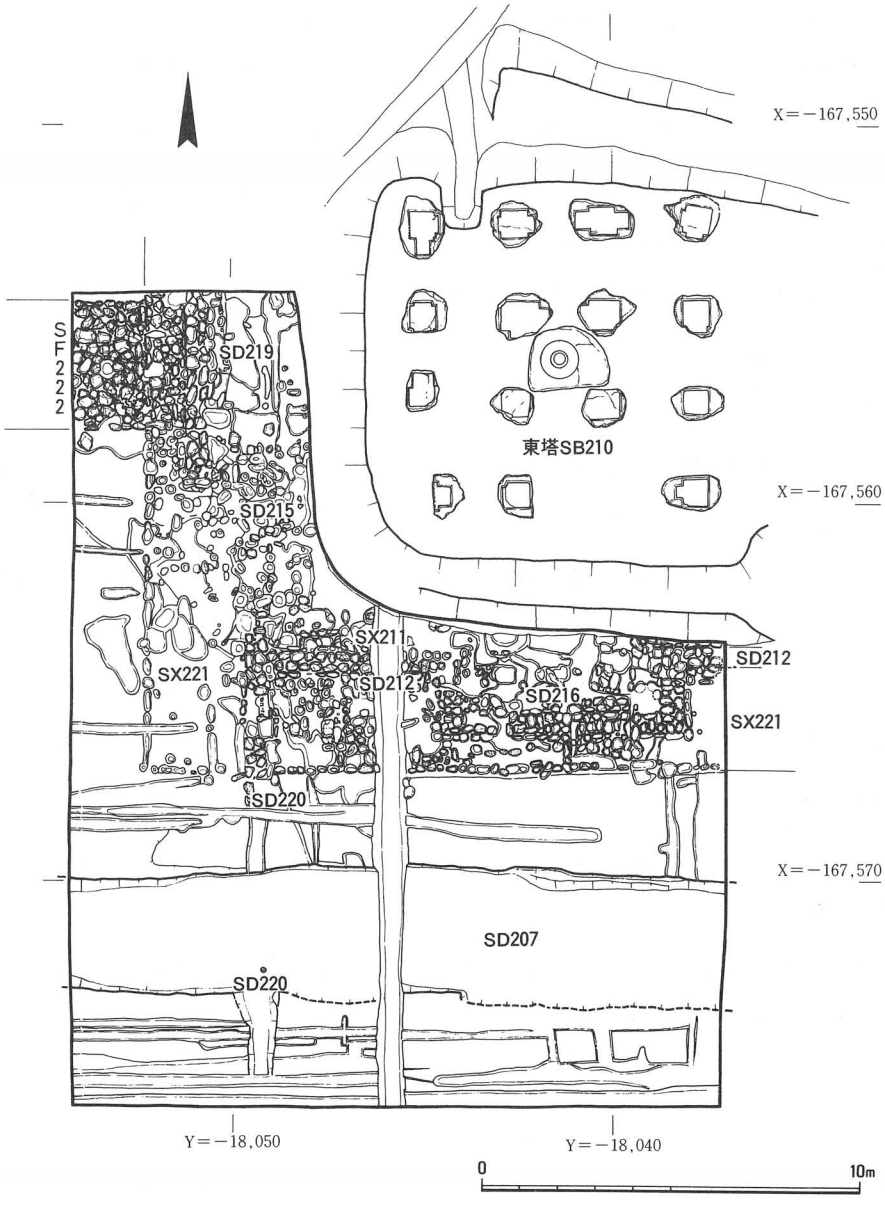


Fig.53　本薬師寺1993−３次調査遺構図（１：200）

これが基壇の掘り込み地業と関連する可能性はある。

東塔基壇周囲の遺構　玉石敷きＳＸ221は東塔の基壇周囲にある、人頭大ほどの川原石を用いた玉石敷きである。後世の撹乱でかなりの敷石が抜き取られていたが、その構造と規模をほぼ確認した。周囲に玉石列をめぐらせた正方形の施設で、わずかに依存する玉石列とその抜き取り穴から復元すると、一辺約21.8ｍの正方形となる。基壇に接するところに幅の狭い縁取り（犬走り）があり、さらに石組雨落溝がめぐる。そして雨落溝と縁石との間には玉石を敷き詰めてある。

犬走りＳＸ211は、玉石２石分、約60㎝幅である。基壇西南隅に、ごく部分的に残るだけだった。

犬走りに沿って玉石組の雨落溝（ＳＤ212・215・216・219）がめぐる。溝底に玉石を二列並べ、両側にやや平たい玉石を立て並べる。幅約60㎝、深さ約10㎝。階段部分（ＳＤ216・219）は幅5.8ｍ（心々）で、1.65ｍ外側にはりだす。西階段周囲の雨落溝ＳＤ219は、西側石にほかの部分より大きな石を使用する。後述する参道が接続することと関連するのであろう。南西隅では西面雨落溝ＳＤ215がそのまま南に延びる。この南北溝ＳＤ220は、石敷きＳＸ221の範囲の長さ約2.5ｍ分は石組溝だが、石敷きの外側では素掘り溝である。ただし、石敷きの南に接して西側石が２石あるので、石敷きからはずれた１ｍ弱の部分だけは石組だった可能性があるが、底石はなかったようだ。雨落溝からは瓦のほか、金銅製垂木先金具、銅釘、土師器、須恵器などが出土した。出土土器には９世紀後半のものがある。

参道ＳＦ222は、東塔の西面階段の正面にある幅3.4ｍの石敷き参道である。玉石敷きＳＸ221より大ぶりの玉石を敷き、北と南には玉石列をならべて縁石とする。敷石の隙間には砂利を詰める。東塔と西塔をつなぐ参道と推定され、長さ約２ｍ分を確認した。参道の東端には玉石敷きＳＸ221西辺の玉石列が南北に通っている。

南面回廊に関係する遺構　南面回廊北雨落溝の底石抜き取り溝ＳＤ142を確認した。

そのほかの遺構　ＳＤ207は東塔と南面回廊の中間にある東西溝である。幅3.5ｍ、深さ0.4ｍ。南北溝ＳＤ220と重複し、それより新しい。多量の瓦が堆積し、ほかに須恵器、土師器、凝灰岩切石破片などが出土した。東塔廃絶時の瓦を捨て込んだのであろう。

遺　物

出土遺物は、瓦類、土器、金属器、凝灰岩切石断片などがある。

瓦類　丸・平瓦、軒瓦、面戸瓦、熨斗瓦、隅切り瓦などがある。

軒瓦（Fig.54）は、軒丸瓦174点、軒平瓦99点、総計273点出土した（Tab.10）。大半は７世紀の創建時のもの。普通サイズのセット（6276Ａａ－6641Ｈ）と小型の裳階用のセット（6276Ｅ－6641Ｋ）がある。出土量からみてこの二組が東塔の創建軒瓦であろう。補修に用いられた軒瓦には、奈良時代前半の平城薬師寺創建軒平瓦6641Ｇを初めとして、奈良時代後半から平安時代

はじめ頃までの軒瓦がある。いずれも平城薬師寺または平城宮と同笵である。この状況は中門の調査とかわるところがない。

丸瓦と平瓦は、ごく少量の格子叩きの行基丸瓦と同じ叩き板を使った粘土板桶巻き作りの平瓦を除く大半が、縄叩きの玉縁丸瓦と粘土板桶巻き作りの平瓦である。縄叩きは通常の縄巻き叩き板のほかに、縄を三つ編みにして叩き板に巻き付けた特殊な縄叩きがあり、これが多数を占める。縄叩き目が一条ごとに向きをかえる「ハ」字形の縄叩き目になるのが特徴である。平瓦は凹面に、丸瓦は凸面にていねいなナデ調整を加える。

道具瓦は熨斗瓦と面戸瓦が出土した。ともに切り熨斗瓦と切り面戸瓦である。熨斗瓦は凹面にナデ調整を行わない。

土器　須恵器、土師器、白磁、青磁、転用硯、漆付着土器のほか弥生土器がある。

比較的まとまって土器が出土したのは、東西溝ＳＤ207と東塔周囲の雨落溝である。東西溝ＳＤ207からは土師器、須恵器、弥生土器などが出土した。遺構の年代を示す土器は土師器小皿（Fig.55；１～６）である。直径10.0～11.4㎝、器高1.7～2.1㎝。灯明皿に使用された痕跡を残す。10世紀代。東塔周囲の雨落溝からは、土師器、須恵器などがある。土師器小皿（Fig.55；７～11）はいずれも灯明皿と思われる。図

軒丸瓦	点数	軒平瓦	点数
6276Ａａ	104	6641Ｈ	58
Ａｂ	2	6641Ｋ	14
Ａｃ	2	6647Ｃｂ？	3
6276Ｅ	46	6647Ｇ	1
		6647Ｉ	2
計	154	計	78
薬師寺32	4	6641Ｇ	2
33	1	6663Ｉ	4
33or34	5	6701Ａ	2
36	10	6721Ｄ	1
		薬師寺239	1
計	20	計	10
		型式不明	11
合　計	174	合　計	99

Tab.10　出土軒瓦集計表

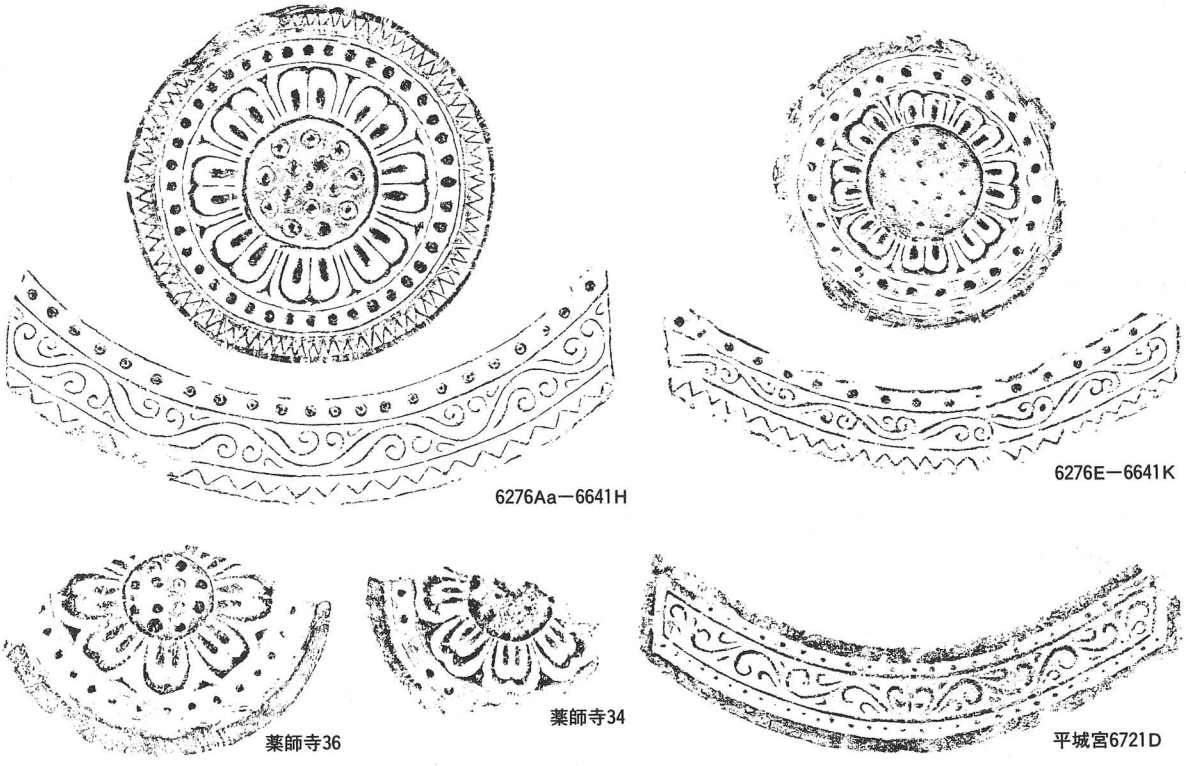


Fig.54　主な出土軒瓦（１：４）

示したのは、ＳＤ212（８・11)、ＳＤ215（７）、ＳＤ216（９)、ＳＤ219（10）から出土した土器。ＳＤ207出土土器よりは若干古く、９世紀後半の年代が与えられる。

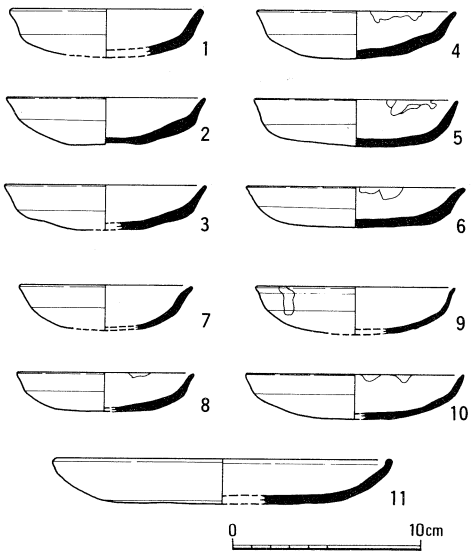


Fig.55　出土土器（１：４）　１～６：ＳＤ207
７～11：ＳＤ212・215・216・219

金属器ほか　金銅製垂木先金具、金銅製飾金具、銅釘、銅環、鉄釘などがある。金銅製垂木先金具(Fig.56；１）は長方形の金具で、対葉花紋を透かし彫りし、毛彫りの輪郭線を刻んだもの。一辺12cm×10.5cm（４寸×3.5寸）に復元できる。同形・同紋の垂木先金具が平城薬師寺からも出土している。飾金具（Fig.56；２）は直径６cm（２寸）の扁平な半球形の本体に四角錐形の脚が２本つくもの。脚は先端を欠損する。釘隠しであろうか。ほかに風鐸の吊金具かと思われる銅環や銅釘がある。鉄釘は15本が出土した。最も依存状態の良いものは全長が18.2cmある。

そのほか、土馬の断片、基壇化粧に使用された凝灰岩の切石断片、弥生時代のサヌカイト製石鏃や剥片がある。

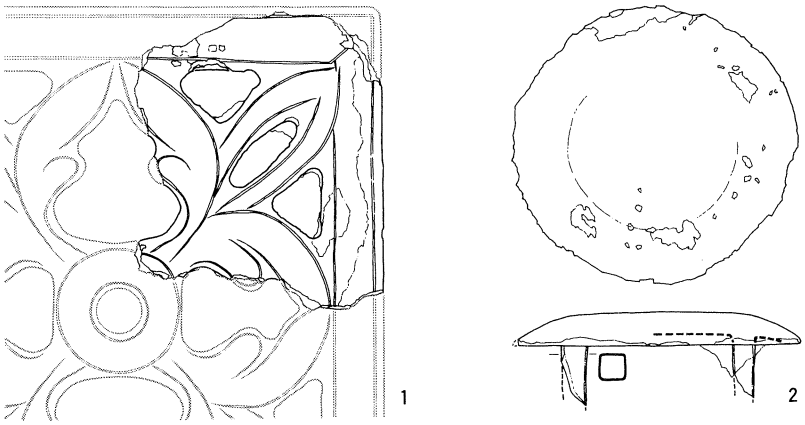


Fig.56　金銅製垂木先金具（１）・飾金具（２）（２：３）

まとめ

遺存状況は良くないが、東塔基壇周囲の状況がほぼ明らかになった。東塔の基壇外装には凝灰岩切石が使用された可能性が高く、基壇規模についてもおおむねの推定を行うことができた。基壇周囲の化粧は、玉石敷きの犬走り、玉石組の雨落溝、石敷き、という構造が判明した。

平城薬師寺の東塔の基壇外装と周囲の化粧については発掘調査成果がないが、調査された平城薬師寺西塔と比較すると、基本的な構成は全く一致する。

平城薬師寺では従来知られていなかった施設としては、二つの塔をつなぐ石敷きの参道がある。昨年度の中門の調査によって、中門と金堂を結ぶ推定幅4.5ｍの石敷き参道の存在が推測

	基壇辺長×高	犬走幅	雨落溝幅	階段部	石敷規模	参道
本薬師寺東塔	14.2 m×1.45m	約60cm	約60cm	5.8m×1.65m	21.8 m四方	幅3.4m
平城薬師寺西塔	13.65m×1.4 m	約60cm	50～60cm	5.0m×1.8 m	20.75m四方	不明

Tab.11　本薬師寺東塔・平城薬師寺西塔基壇規模比較

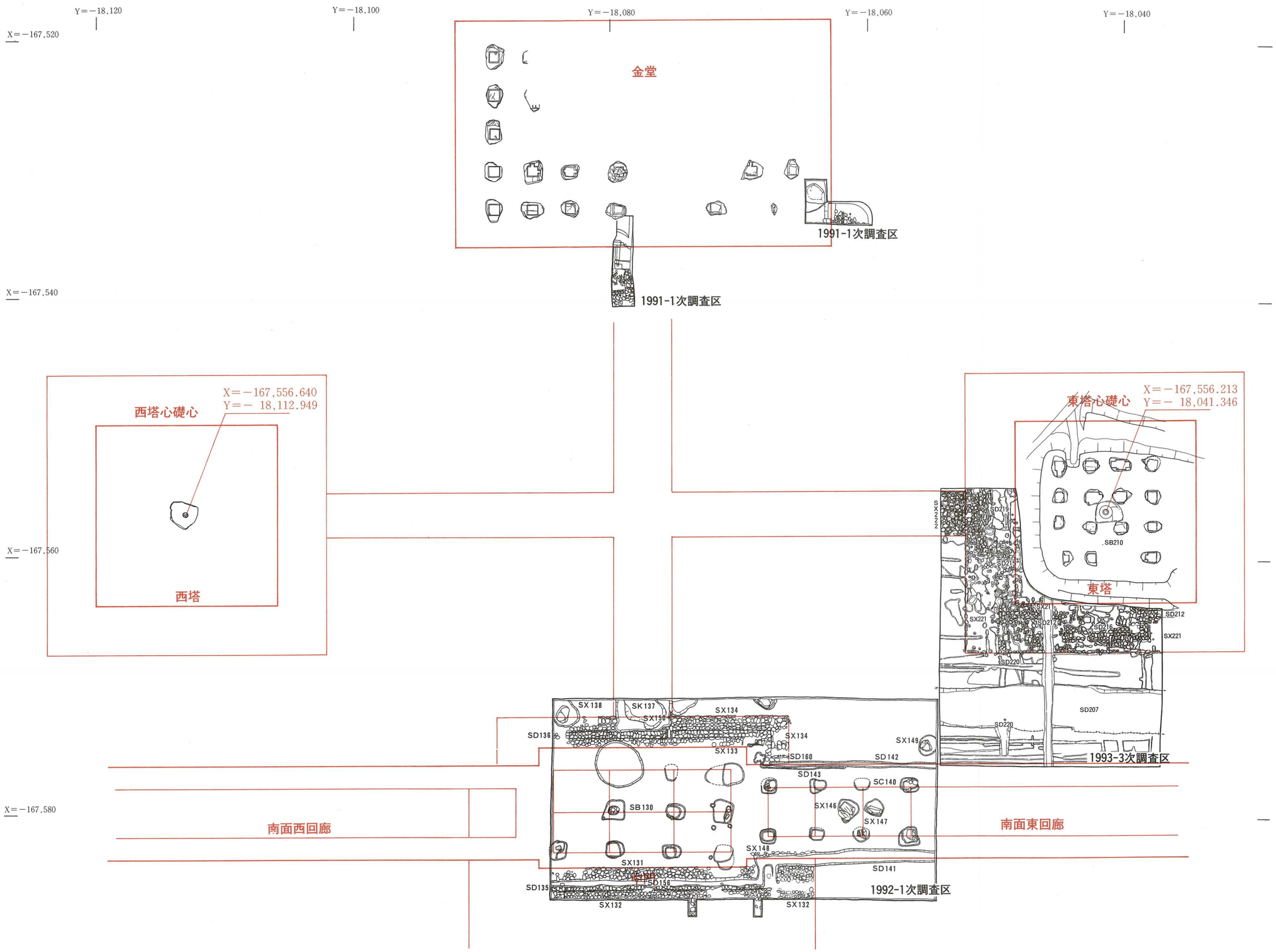


Fig.57　本薬師寺伽藍中枢部遺構図（１：300）

されている。今回、幅3.4mの東西方向の参道を検出したことによって、中門、金堂、東西両塔でかこまれる境内地の中心に石敷きの参道が十字に設置されていた可能性が高くなった。

今回、発掘調査と平行して、金堂、東西両塔の礎石の実測調査を実施した（Fig.57）。東西両塔心礎の心々距離は71.606m、国土方眼に対する振れは0°21′27″北で西偏する。また、心礎上面の標高は、東塔が76.790m、西塔が76.717mで、西塔が約7㎝低い。東西両塔心礎心の中点を求めて、先述した方位の振れを伽藍中軸線に考えると、金堂の礎石配置はこれによく整合するが、中門の推定心は若干ずれる。今後の調査で検討すべき課題である。

出土遺物ではまず、本薬師寺創建期の瓦が大量に出土したことが注目される。軒瓦の出土量からみて、東塔の創建軒瓦は6276Aa－6641H、および6276E－6641K、の二組である。前者が本屋根用、後者は裳階用である。従来、東塔の基壇上には裳階の礎石がないことから、裳階の有無が議論されたが、今年度の1993－1次調査で中門南方から、使用された堂塔は不明ながら、裳階の礎石が出土したこと、また金堂周囲からも今回の東塔周囲からも裳階用と推定できる小型瓦が出土したことなどから、本薬師寺の金堂ならびに東塔には裳階が存在した可能性が高くなった。さらに、創建軒瓦以外に、奈良時代から平安時代の瓦も出土し、それらはすべて平城薬師寺あるいは平城宮と同笵であった。このような状況は昨年度の中門調査区での軒瓦の出土状況とほぼ軌を一にするものであり、創建の東塔が平城遷都後もこの地に存在し、平城薬師寺の管理下に管理・運営されたことを示すとみてよいだろう。また、東西溝SD207出土土器からみて、東塔の廃絶時期は10世紀代と推定できよう。

また、今回の調査で塑像の断片がまったく発見されなかったことにも注意したい。『薬師寺縁起』によれば平城薬師寺の塔には塑像群があり、本薬師寺の塔にも同様の塑像群を想定する説があった。しかし、今回、塑像の破片はまったく出土しなかったので、本薬師寺の東塔初層には塑像群は安置されていなかった可能性が高くなった。このことは、平城薬師寺の塔と同様に初層に大規模な塑像群を想定して広い空間を必要とするような建築構造を推定する必要のないことにつながる。現存する側柱礎石には基本的に地覆座が作り出してあったと考えられる。地覆座の作り出しをまったくもたない側柱礎石は1個だけであり、それ以外は破損品を含めて少なくとも片方には地覆座を設けている。なかには西北隅の側柱礎石のように地覆の幅に合わせて地覆座を作り直したものまである。したがって、側柱筋には地覆があり、壁が立ち上がっていたと考えたい。このことはまた、裳階が法隆寺塔のように付加的な構造であった可能性を示唆するものともいえよう。

今回の調査は東塔の裾まわりに限られた調査で、基壇部の調査を行っていない関係から階段規模の確定などは徹底的な調査を実施しなかった。しかし、本薬師寺東塔についてのこれまでの研究に再検討を迫るような重要な発見もあった。未解決の部分は多いが、周辺の調査を重ねるなかで調査の問題点や課題も整理されていくことと思う。

B　本薬師寺1994－１次

（1994年９月～10月）

本調査は個人住宅新築に伴う事前調査である。調査地は本薬師寺の寺地推定地内の西北に位置する。本調査区の南では1975年の１次調査で、西三坊大路と八条大路の交差点と、西三坊大路東側溝の東側に並行して築地の雨落溝と推定される南北溝を検出している。1993年に行った本薬師寺1993－２次調査Ａ区においても、西三坊大路東西側溝を確認している。本調査区の西端が西三坊大路の東側溝推定位置に位置することから、西三坊大路東側溝および本薬師寺の西限の区画施設の検出が期待された。検出した遺構は建物１棟、藤原宮期直前の東西溝、弥生時代の溝、流路で、西三坊大路東側溝および本薬師寺の西限の区画施設は確認できなかった。

藤原宮期以前の遺構　基本層序は地表面から耕作土、床土、明黄灰色土で、遺構はすべて明黄灰色土の地山面で検出した。

ＳＤ255は調査区東南でわん曲する流路である。幅約２ｍ、深さ約40㎝で、遺物は全く伴出せず、自然流路と思われる。

ＳＤ252は、発掘区西端の逆く字形の溝である。幅50㎝～１ｍ、深さは20㎝～25㎝である。東南辺の一部の溝幅が狭く、この部分が通路であった可能性がある。溝内からは弥生後期後半の土器が出土している。祭祀に関わる遺物は出土していないが、方形周溝墓の可能性が考えられる。また、斜行する溝ＳＤ253・ＳＤ254からも弥生後期後半の土器が出土している。

ＳＤ251はほぼ国土方眼方位に沿う東西溝である。溝幅は１ｍ～1.2ｍで、発掘区の中央部で途切れ、溝は西へ流れる。発掘区の西端での溝深さは、約30㎝である。溝内からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土しており、藤原宮期直前の遺構もしくは、本薬師寺造営頃の遺構と推定する。

藤原宮期の遺構　ＳＢ250は東西１間、南北１間の建物である。柱間寸法は東西3.6ｍ（12尺）、南北3.3ｍ（11尺）と広い。建物内部には丁度建物の中央位置に2.4ｍの間隔を隔てて２個の柱穴が並ぶ。これら柱穴が他の建物の柱穴の可能性もあるが、ＳＢ250の柱間寸法が大きなこと、その位置が建物の中央に位置することから、特殊な構造の建物と考えておく。

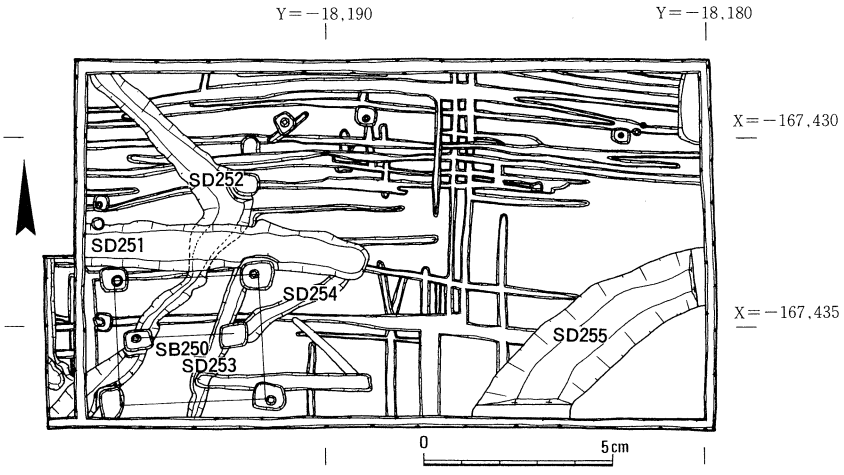


Fig.58　本薬師寺1994－１次調査遺構図（１：200）

発掘区西端で溝肩を検出し、ほぼ西三坊大路東側溝の東肩に位置するが、ごく一部の検出でもあり、耕作溝である可能性も捨て切れず、積極的に西三坊大路東側溝と認定するには至らなかった。

Ⅲ　飛鳥地域の調査

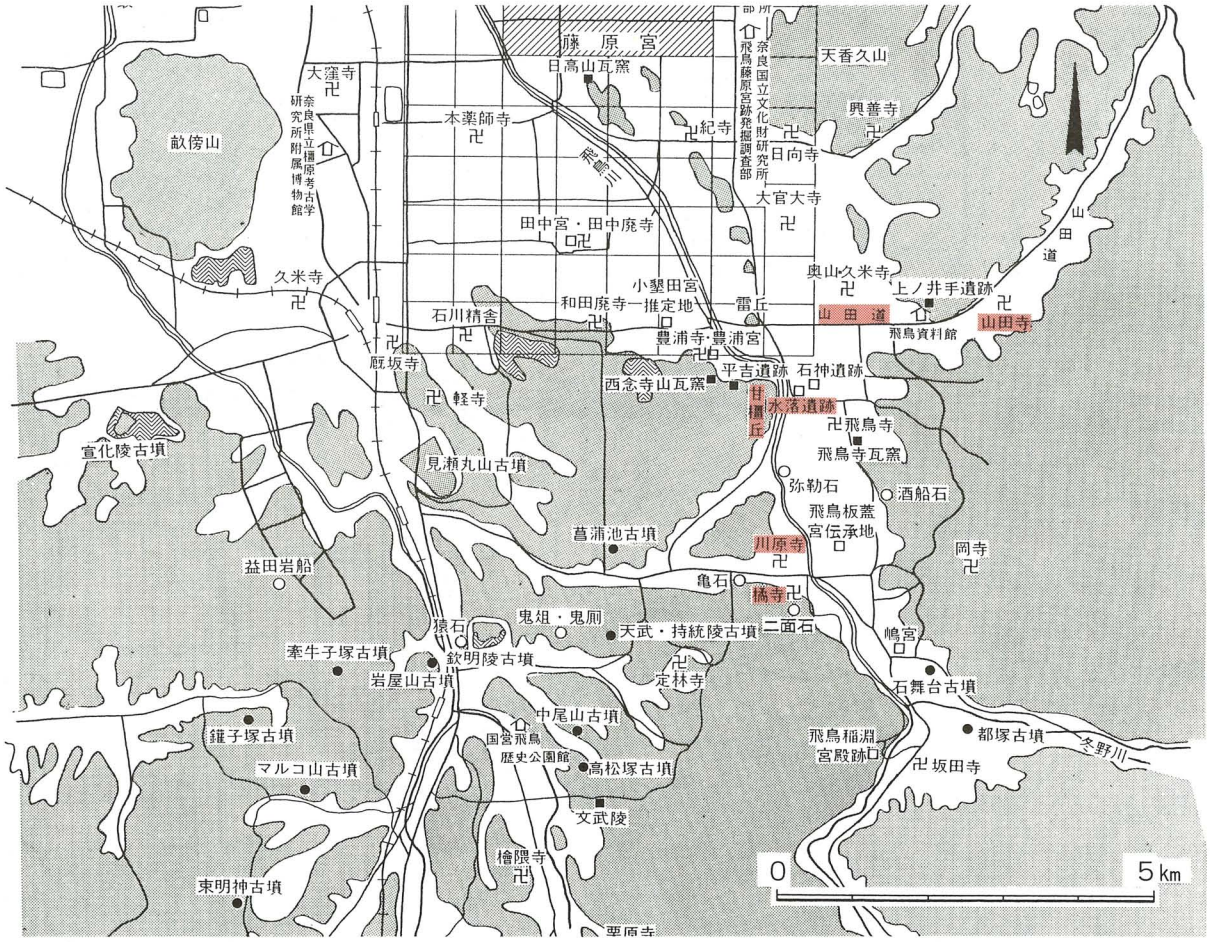


Fig.59　飛鳥地域の調査位置図

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調　査　地	所有者等	備　考	担当者	概報頁
藤原宮 71－12	6AMK－D	73㎡	94. 1.10～ 94. 1.12	高市郡明日香村豊浦（甘橿丘東麓）	国有地	登山道建設	金子　裕之	94
75－2	5AKG－L・M	360㎡	94. 5. 9～ 94. 6.30	明日香村川原（甘橿丘東麓）	国有地	駐車場建設	次山　淳	95～101
川原寺 1993－2次	5BKH－A	83.5㎡	93.12. 7～ 94. 1.27	明日香村川原	関西電力等	電線等埋設	花谷　浩	102～106
川原寺 1993－3次	5BKH－G	1㎡	94. 1.13～	明日香村川原876	河合義照	住宅増築	村田　和弘	107
橘寺 1993－1次	5BTB－C	4.1㎡	94. 1.26～ 94. 2. 7	明日香村橘字北ノ門	関西電力等	電線等埋設	花谷　浩	108
山田寺 第9次	5BYD－A・F	80㎡	94.11. 7～ 94.12. 7	桜井市山田994－1・1040・1245・1246	国有地	計画調査	黒崎　直	109～112
山田道 第7次	5AMD－P	255㎡	94. 4.18～ 94. 5.24	明日香村雷・飛鳥	奈良県	ポケットパーク設置	伊藤　武	89～93
水落遺跡 第7次	5AME－P・Q	600㎡	94. 8. 1～ 94.12.15	明日香村大字飛鳥291－1	豊田純行	計画調査	西口　壽生	77～88

Tab.12　飛鳥地域の調査一覧

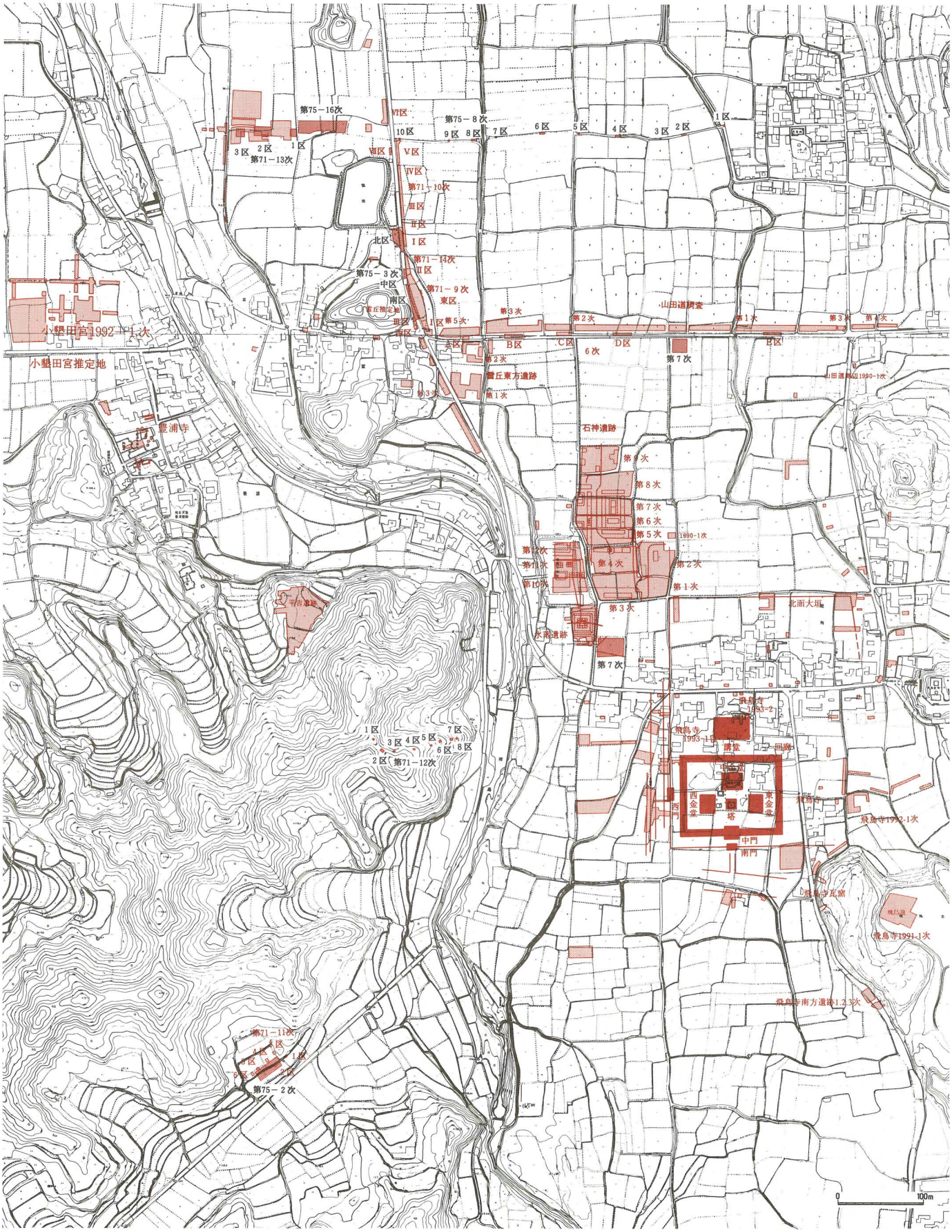


Fig.60　飛鳥寺・石神遺跡周辺調査位置図（1 ：6000）

1　水落遺跡第７次調査

（1994年８月～12月）

昭和47年に発見された水落遺跡は、特異な外観の基壇をもった大規模な礎石建物として昭和51年に国史跡に指定された。昭和56年からの史跡整備に伴う調査（第２～６次調査）によって、緩やかな斜面をなす正方形の基壇の中央に４間四方の総柱様建物があること、その柱は地下に埋設された礎石の上に立ち、礎石は縦横斜めに並べた列石によって固定されていること、建物中央地下に巨大な台石がありその上に漆塗木箱が据えられること、基壇内部には木樋暗渠が敷設され、水の一部は基壇上で利用した後に木箱に集められて西方へ排水され、余水は木箱を迂回して北方へ排水されること、また、建物からは木樋とは別に小銅管が北にのびることなどが明らかになった。さらに礎石建物の北と南には同様の基壇化粧をもった長大な掘立柱建物があり、すべてが一つの掘込地業によって造成されていることも判明し、こうした外観、構造、機能の特異さは遺跡の性格を反映したものであって、遺跡は出土土器の年代観からも矛盾のない斉明天皇６年（西暦660年）に中大兄皇子がつくった漏刻の遺跡と考えられたのである。

これと並行して昭和56年から継続的に実施してきた石神遺跡の調査は、昨年度の第12次調査までに総面積約12000㎡に達し、飛鳥寺西北方には長大な掘立柱建物と周囲の石敷・石組溝などで構成される大規模な遺構群が営まれ、それらは寺域北限塀の北約11ｍの位置を並行する大規模な掘立柱塀を南限とする南北160ｍ以上、東西140ｍ以上の範囲に展開することが明らかになっている。遺跡は７世紀代を通じてＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの４期に大別される幾多の造替を繰り返しているが、その最も整備されたＡ－３期（斉明朝）には、長大な掘立柱建物で囲んだ長方形区画が東西に２つ整然と並び、西の区画には南⅓の位置に正殿にあたる四面庇付建物が配置される。遺跡は先の大規模な掘立柱塀で水落遺跡と区分されるが、水落遺跡から延びた木樋暗渠は、このＡ－３期の建物の間を抜けて北方へ延び、建物周辺の石敷に覆われており、木樋の通過点周辺では遺跡南限の掘立柱塀がとぎれて通路となっていることから、少なくとも石神遺跡のＡ－３期には両遺跡は密接な関連をもって経営されていると考えられている。

いっぽう、斉明朝から持統朝に行われた饗宴の場として史料に散見する飛鳥寺西方については石敷の広場と考えられており、その西北の一画を占める位置にある水落遺跡の建物群を際だたせているが、その調査は限定的であり、水落遺跡の調査についても史跡指定地の約1000㎡について行ったにすぎず、ともに石神遺跡と対比する資料としては不十分にすぎる。

そこで、昨年度をもって飛鳥幼稚園敷地における調査が終了したのを期に、石神遺跡についての調査を一旦中断し、今年度からは水落遺跡の史跡指定地周辺から飛鳥寺西方の調査を進め、飛鳥寺西方における両遺跡の位置と性格を追究する手がかりを得ることになった。

調査地は史跡指定地の東南の南北に長い水田であり、約1900㎡の敷地を３年度に分けて調査

する計画のもと、北端に南北20m、東西30mの調査区を設定した。これまでの調査成果によれば、水落遺跡の遺構は礎石建物の時期（A期）とそれを埋め立てた後の時期（B期）に大別されるが、今次調査区内ではA期の遺跡全体におよぶ掘込地業の南端、掘立柱東西棟建物SB180の東に柱筋を揃えて建つ掘立柱建物（SB240)、南限塀の可能性がある掘立柱東西塀（SA295)、B期の東西溝（SD260）が検出されると想定された。

層　序

調査地の層序は基本的には、耕作土、床土、灰褐色土、褐色土、暗灰～黄褐色砂質土、灰褐色粗砂礫である。地山の弥生時代以前の河川に起源のある灰褐色粗砂礫の上には、古墳時代の自然流路の一部である暗灰～黄褐色砂質土が西に厚く堆積し、東半には東南から西北に向かって数条の灰褐色粗砂層が蛇行し砂礫層が露出している。平安時代の土器・瓦が含まれる褐色土は西北に厚く、東南に薄く堆積し、7世紀代およびそれ以前の遺構はその下面で検出され、また、平安時代以降の遺構はその上面あるいは灰褐色土面で検出される。いずれの遺構面も東南に高く、西北に緩やかに下降しており、7世紀代の遺構面は東西で約0.4m、南北で約0.1mの差がある。

遺　構

検出された遺構には、弥生時代の土坑、古墳時代の竪穴住居、7世紀代の掘立柱建物、石組溝、掘込地業、木樋暗渠、石敷、平安時代の井戸、土坑、小柱穴、素掘溝などがある。以下、7世紀代、平安時代、7世紀以前にわけて遺構を概述する。

7世紀の遺構　7世紀代の遺構には南北石組溝→掘込地業・建物→斜行石組溝の重複関係があり3小期に細分される。従来の時期区分に照らせば、礎石建物等と一連の遺構である掘込地業・建物がA期に属し、それらで壊された南北石組溝がそれ以前であることに疑いはないものの、それより新しい重複関係にある斜行石組溝はB期に属す可能性が残る。しかし、後述するように斜行石組溝は掘込地業の東南隅をかすめて迂回する位置にあること、溝の上端の高さと西方の掘立柱建物SB180の床面の高さとの関係からすれば、重複関係はA期の遺構の施工上の先後関係である可能性が高いと考えられる。なお、木樋暗渠と石敷については重複関係がみられず調査区内では決められない。以下ではA期以前、A期、不詳の順に記述し、石神遺跡、水落遺跡の時期区分との対応関係については後にふれることにする。

南北石組溝SD3400は調査区の西端で東側石列を検出し、調査区を一部拡張して溝幅0.6m、深さ0.25mの規模であることを明らかにした。溝は、人頭大の玉石を1～2段積んで側石とし、底には灰色砂が堆積し、暗灰色粘質土で埋められる。東西素掘溝SD3409、斜行石組溝SD3410、土坑SK3406等で壊され、側石も多くが抜き取られているが、斜行石組溝の北にも東側石抜取穴と溝堆積土が確認され、それらは掘込地業の南縁によって断ち切られている。溝の造営方位は北で東に約40′傾いている。なお、溝の東にある柱穴SX3414と斜行石組溝底で検出

した柱穴ＳＸ3441は埋土と重複関係の上から、この溝とともに造営されたＡ期以前の遺構の一部と思われる。

掘込地業はＡ期の遺構全てを包み込むもので、第４次調査で南端を確認している。今回その東延長線上で南端を確認するとともに、あらたに礎石建物中軸線から東22.8ｍの位置で東端ＳＸ3430を検出した。掘込地業は古墳時代の土器を含む自然河川状の砂質土、砂礫土を深さ2.1ｍについて掘り込み、底から砂礫土、砂質土、粘質土を細かな互層で積み上げている。第４次調査では掘込地業の南端は、深さ１ｍ付近で小さな段を設けた二段掘りであることが確認されたが、今回検出した東端は急傾斜で底に至っている。

掘込地業の東南隅部については斜行石組溝ＳＤ3410が重なっていて検出できなかったが、南端の位置も礎石建物の中軸線から22.8ｍ南の位置にあって、掘込地業が正方形であった可能性は高い。地業土の最上層は掘込地業外縁の外にのびて厚さ20㎝の整地土となっているが、整地土上面の高さは西方の掘立柱建物ＳＢ180の床面とほぼ同じ高さにあって、後述の斜行石組溝はその整地土上面から側石の据え付け掘形を掘っている。

掘立柱建物ＳＢ3440は調査区の西北隅で４個の柱穴を検出した。完掘した柱穴は東南隅の１個であるが、柱掘形は一辺1.5ｍ、深さ２ｍで褐色粘質土と灰褐色砂質土の互層で埋められる。掘形底には方60㎝、高さ50㎝の花崗岩切石を据え、黄色粘土で埋めた柱抜取穴が切石の中央上面に至っている。ところで４個の柱穴は東南隅の柱を最深として柱掘形の深さがそれぞれ異なり、一つの建物の柱穴とすることに若干の疑問が生じる。しかし西南の柱穴の底にも方形切石が据えられること、その上端が切石の確認されなかった北の２個の柱穴底と近い深さにあること、柱掘形埋土がよく似ていることからすれば４個の柱穴は一つの建物の柱穴とみなしうる。したがって建物は総柱様の建物であり、柱間は掘形底の切石間で東西1.9ｍ、南北方向は柱位置を確定できないが２ｍ弱に復原される。

これまでの調査成果では、東西８間のＳＢ180の東には、柱筋を揃えた東西棟建物（ＳＢ240）を想定してきたが、以上の調査所見からは一連の建物を想定することは難しい。すなわち、今回検出した柱穴の内南２本はＳＢ240、180の南側柱筋に一致するものの、両建物の妻柱は北によった位置に建ち、今回検出した柱の内の北２本の柱筋とは合わないのであり、既に検出されているＳＢ240の西妻柱筋と今回の東側柱筋との距離は約７ｍで、同じ柱間では割り切れない。建物の主要部分は未調査地にあり、規模構造に関する結論はその調査成果によらねばならないが、現状では３間×３間あるいは２間×２間の総柱建物が想定され、いずれの場合も従来の東西棟建物ＳＢ240は成り立たず、既掘の柱穴３個はＳＢ180の東庇とみるべきである。なお、東南隅の柱位置から復原される遺跡全体の企画を含めた検討については後述する。

斜行石組溝ＳＤ3410は掘込地業東南隅をかすめる位置に、北で東へ35～45°傾く方位に敷設された大型の石組溝である。東側石を平安時代の土坑ＳＫ3413で、西南部の南北石組溝との交

点を土坑ＳＫ3406で破壊され、溝全体は側石内外ともに側石の中程の高さまで平安時代に削られている。土坑ＳＫ3406の底で検出した側石の抜取穴を含めて、長さ12.5ｍ分を確認し、東北－西南方とも調査区外に延びる。溝は幅2.2ｍ、深さ0.6ｍの掘形溝を掘り、0.5～1ｍ大の花崗岩を使って側石とする。東西の側石で施工法がやや異なり、西側石が大型石１石を立てる傾向にあるのに対して、東側石は小ぶりの石を２段に積んだり、底が西側石よりも高い位置にあるため内傾した石が多い。また、東側石の裏込めには拳大の石を詰めた層もあって、東側石が積み替えられた可能性が想定された。しかし、掘形が一連であること、西側石でも大型石についてはその部分だけ深く掘り込んで据え、小型石の下面は高い位置にあることから、この違いは側石天端の高さを重視して用材の大きさに合わせて適宜底に土を入れたり、掘りくぼめたりした結果であると判断した。したがって溝は内法幅0.6ｍ、深さ0.5ｍであり、検出した西南と東北とではほとんど高低差がない。また、北端の側石の天端高が建物ＳＢ180の床面（海抜100.93ｍ）よりも約10㎝高い高さにあることから、溝は開渠であると考えられる。

石敷**ＳＸ3391**は調査区の東方にわずかに残る。東端には東に面を揃えた人頭大の石を並べた石列**ＳＸ3390**があり、石敷中に約70㎝離れてもう一列の石列がある。石列ＳＸ3390は北端から約11ｍでとぎれ、石敷ＳＸ3391も幅狭くなってなくなってしまう。しかし、調査区南方に残る石敷**ＳＸ3394**が石列ＳＸ3390の南延長線を越えては東に及ばないようであるから、北半の石敷ＳＸ3391と南の石敷ＳＸ3394は本来一体のもので、南北20ｍ、東西７ｍ以上にわたって敷かれ

Fig.61　水落遺跡第７次調査遺構配置図（1:300）

ていたものと考えられる。石列は北で西へ1°40′余り傾く方位に並ぶが、この方位は飛鳥寺の中枢伽藍や寺域西方の通称「入鹿首塚」の南で検出された南北石敷など西方一帯の石敷遺構の方位と類似する。

礫敷ＳＸ3392は拳大の石を乱雑に敷いたもので虫食い状に点々と残されるに過ぎないが、石列ＳＸ3391の東に石列上面とほぼ同じ高さで広がっていたとみられる。乱雑さと用材の大きさから地山の礫群と区別し難い状況であるが、一層だけで比較的面が揃うことから礫敷と考えた。南北20ｍ以上、東西は石列の東４ｍまでが確認できる。

木樋暗渠ＳＤ3370は調査区の南端で総長31ｍを検出した。木樋は幅1.4ｍ、深さ0.7ｍの掘形溝を東で南へ約11°傾く方位に掘って敷設される。西半は平安時代の東西素掘溝ＳＤ3409で抜き取られ、土坑ＳＫ3381にも壊されているが、その底に長楕円形の花崗岩玉石が1.5～3.3ｍの間隔で遺存する。石は木樋に直交する方向に長軸を向け、石の上面中央部がわずかにＵ字形にくぼんでいるものが多い。石の間隔から木樋はこの台石（枕石）３つで１本の長さの材を接合しながら敷設されたと考えられる。木樋の抜き取られていない東半では外法幅0.4ｍ、深さ0.3ｍの規模の木樋が確認できるが、すべて粘土化しており構造は明らかでない。水落遺跡の中枢部で検出した木樋は、一木をＵ字形にくり抜いて板状の蓋をかぶせる構造で、多くは釘による蓋の固定はしていない。今回も釘を検出していないことから土圧によるのであろう。木樋の直上には底に一段低い石敷面が残る土坑ＳＫ3382のほか、大小の平安時代の土器を含む土坑状のくぼみがある。土坑ＳＫ3382内の石敷は広く覆っていた石敷ＳＸ3394が木樋の腐朽によって陥没したもので、その他の土坑については石敷の抜き取り後に陥没したものとみられる。

平安時代の遺構　西北部の井戸、東端の小型甕を合わせ口にした土器棺墓、方形土坑と素掘溝のほかに、調査区全般に不整形土坑、小柱穴などがある。

土坑ＳＫ3418は調査区西北部の石組溝ＳＤ3410や建物ＳＢ3440柱穴を覆う範囲にひろがる不整形な土坑で、上半部の深さ20㎝程は多量の石で埋まっている。底はほぼ平らであるが、一部は石組溝ＳＤ3410の側石半ばの高さまで及んでいる。上層からは石に混じって平安時代前半の土師器、緑釉・灰釉陶器や飛鳥寺の瓦等が出土した。

土坑ＳＫ3406は石組溝ＳＤ3400と3410の交点に位置する不整形な土坑で、南北２ｍ、東西２ｍ以上で深さ0.3ｍの規模をもつ。２本の石組溝を壊し、上層に中小の石を密に詰めているが、底で石組溝ＳＤ3410の側石抜き取りが検出された。土坑ＳＫ3413は石組溝ＳＤ3410の東側石を壊す不整形な土坑で、中に壊した側石を投棄している。いずれも土坑ＳＫ3418と同様、周辺の石の処理を目的としたものであろう。

調査区の南端沿いには不整形で浅い土坑ＳＫ3396～3399が連なり、埋土に平安時代前半の土師器皿、黒色土器椀、瓦片が含まれる。中央部の土坑ＳＫ3389・ＳＫ3421も同様の時期で、ＳＫ3396・ＳＫ3389では底が石敷ＳＸ3394、ＳＸ3391上面に至っており、石敷目地からも黒色土

器等が出土する。調査区東南部に点在する小土坑は黒灰色粘質土を埋土とするものと黄色粘土を混えたものがあるが、いずれも平安時代前半の土器が含まれ、大型のＳＫ3381、3379、3378には大小の石が投棄されている。

井戸**ＳＥ3415**は石群土坑ＳＫ3418の下で井戸枠の抜取穴を検出した。井戸は一辺2.2ｍ、深さ2.6ｍの略方形の掘形を掘り、その底中央に直径42㎝、高さ25㎝の曲物を据え、それを包むように拳大の石を詰めて擂り鉢状の井戸底斜面をつくる。斜面の上端は大型の石を１～２段積んで平坦面とし、その上に井戸枠をくむ。井戸枠は四隅に柱を立てた内法約１ｍの横板組みであるが、地覆、柱、枠板、桟など木質部すべてが粘土化していて、組み合わせの詳細は確認できなかった。検出面から地覆までの深さは約1.8ｍで、上半１ｍ分の枠板が抜き取られている。抜取穴埋土は黄色粘土を混えた暗褐色粘土で１ｍ大の大型石が投棄されている。井戸枠内の埋土は底の曲物内部まで基本的に同じ暗灰色砂質土で、土師器、黒色土器など平安時代の土器が少量出土した。井戸は掘込地業の内側に位置するが、底は掘込地業底を約0.6ｍ掘り抜き、自然流路の砂層に達している。

素掘溝**ＳＤ3409**は、木樋暗渠ＳＤ3370の西半部を抜き取る溝で、木樋掘形を完掘し灰緑褐色砂土で埋められている。東南端を土坑ＳＫ3381、ＳＫ3380で壊されるが南に曲がる形跡がある。これと交差する南北素掘溝ＳＤ3420はより古くに掘られた溝で、幅1.4ｍ、深さ0.5ｍ。これも灰緑色砂土で埋められる。溝の方位は調査区水田の西畦とよく似た北で東へ約８°傾く方位にあって北流し、北端付近では石組溝ＳＤ3410の東側石を壊す土坑ＳＫ3413の延長部と思われる東西土坑ＳＫ3419に壊される。東西素掘溝ＳＤ3409と埋土が類似し、直線的な溝であることから、この溝も木樋の抜き取り溝の可能性はあるが明確な証左はない。むしろこの溝の掘削によって発見された木樋暗渠を抜き取るためにＳＤ3409が掘られたと考えておきたい。

南北素掘溝**ＳＤ3360**は調査区東端にある幅0.8ｍ、深さ0.4ｍの溝で、溝底は浅いＵ字形断面をなす。溝の西岸を壊す土坑ＳＫ3362の底には溝の西岸の傾斜に合った石があり、溝は部分的に護岸していたかもしれない。北端にある方形土坑ＳＫ3361の上層にそそぎ込むまでの長さ16.5ｍ分を検出した。土坑ＳＫ3361は東西3.4ｍ、南北3.5ｍ以上の規模で壁は緩斜面をなし、埋土からは平安時代前半の土器が少量出土した。水溜めの機能を果たしたのであろう。

土器棺墓ＳＸ3363は直径40㎝、深さ20㎝の土坑内に、直径25㎝大の土師器甕を南北に２個合わせ口にして倒置したものである。甕は平安時代前半のもので外面には煤が付着する。ただし、内容物から骨片等は検出されなかった。

以上のように、平安時代の遺構には互いに重複関係があるものの、出土遺物はほぼ９世紀後半から10世紀前半の近接した時期のものである。調査区全域に散在し、周辺の調査（水落遺跡第２次調査、石神遺跡第１・２・３次調査、飛鳥寺西方での調査）においても同様の時期の遺物を含む平坦な遺物包含層が確認されている。飛鳥寺の西北方の石神遺跡第１、２次調査では

小規模な建物や金銅製飾金具などを含む土坑が発見されており、生活の中心はそちらにあると思われるが、今次調査では井戸や土坑、小柱穴が発見されたものの建物にはまとめられない。なお、素掘溝や土坑群のようにA期の木樋、石敷を広範に壊すのはこの時期であり、7世紀後半～8世紀の遺構や遺物の少ないこととともに注目すべきである。

7世紀以前の遺構　弥生時代の土坑と古墳時代の竪穴住居がある。

調査区東南隅にある土坑SK3365は直径0.7m、深さ0.2mで、弥生時代中期の壺を口頸部を東に傾けて埋置し、下に高杯片を詰める。壺は肩部に櫛描き直線文を巡らせた広口壺で、底部近くの体側部に焼成後の小孔があく。南接する土坑SK3366にも弥生中期の土器が含まれる。

竪穴住居SX3425は調査区中央南寄りにあり、一辺約5.1mの方形で、深さ10cmほどが遺存する。北壁の東隅近くにカマドの一部と思われる幅0.5m、長さ1.4mの楕円形の穴SX3426があり、焼土と焼けた骨片が出土した。柱穴は東北、東南、西南の3個を確認したが、西北の柱穴は平安時代の土坑で壊されている。竪穴住居の西南隅の土坑SK3427は平安時代の土坑SK3398の下で検出した一辺0.5mの方形土坑で、5世紀末の完好な壺、甕、高杯などが含まれる。位置と土器の内容から竪穴住居の貯蔵穴と考えられる。なお、調査区中央北辺部にも焼土の集まった箇所や5世紀末の土器の入った暗灰色砂質土があり、ほかにも竪穴住居が存在したとみられる。また調査区東半には6世紀代の土師器、須恵器の入った灰褐色砂土の自然流路が東南から西北へ蛇行し、この竪穴住居の検出面上層にも6世紀末の須恵器杯が含まれていて、この地域の5世紀代の遺構はそれらによって流失、削平されたものと考えられる。

遺　物

調査区全域から、土器・土製品、金属製品、石製品、瓦類などが出土した。土器には弥生時代から平安時代までのものがあるが、比較的少量であり、時期の上では平安時代と古墳時代のものが目立つ。この点は北方の石神遺跡の遺物が多量で、その大半が7世紀後半から藤原宮期の土器類で占められることと極めて対照的である。また、水落遺跡の礎石建物周囲の基壇化粧貼石の埋土や漆塗木箱抜取穴埋土出土の土器類と同じ時期の土器は、石神遺跡の調査では多くないことから、それらは礎石建物と密接に関わる遺物と考えられているが、礎石建物に隣接した今回の調査でもほとんど出土せず、それらの特殊性が再確認される結果となった。土器にはほかに施釉陶器として平安時代の緑釉椀、皿、灰釉椀等があり、古墳時代の竪穴住居の貯蔵穴と思われるSK3427からは5世紀末頃の土師器壺、甕、高杯などが出土した。また、土製品には奈良時代の土馬1点などがある。

金属製品には鉄鎌、鉄釘、銅片などがあるが、鉄鏃が多い石神遺跡の金属製品の構成と異なっている。これも7世紀後半から藤原宮期の遺構や土器がないことと関わる特徴である。石製品はほとんど無く、軽石塊のほかは縄文～弥生時代の安山岩剥片である。瓦類は主に平安時代の土坑から出土した飛鳥寺軒丸瓦Ⅲ型式3点の他に、平安時代の平瓦細片がある。

まとめ

建物ＳＢ3440の復原とＡ期の遺構の配置計画　水落遺跡の第１～６次調査までの調査概報やそれらをまとめた調査報告では、南の掘立柱建物ＳＢ180の東にそれと柱筋を揃えた東西棟建物ＳＢ240を想定してきた。しかし、今回検出した柱穴は、ＳＢ180の南側柱筋の延長上に正しく位置するものの、柱間1.9ｍの総柱建物と考えられ、東西８間のＳＢ180の東にある柱３本を西妻柱列としたＳＢ240は成り立たないことが判明した。したがって、それら３本の柱はＳＢ180の東庇列であり、ＳＢ180は東西に庇をもつ10間の建物に復原される。また、今回の成果では東南隅の柱穴は礎石建物の中心から東西、南北とも22.8ｍの距離にあり、正しく対角線上に位置すること、さらにこれまで南縁だけが確認されていた掘込地業についても、新たに確認された東縁は礎石建物中心から南縁までの距離と等しい位置にあることが判明し、全体が正方形を呈する設計企画がなされていると考えられる。以下では建物ＳＢ3440の規模構造を遺跡全体の設計との関係で検討しておきたい。

遺跡の設計については、調査報告の中で第６次調査までの成果に基づく若干の検討が行われ、礎石に穿たれた円座によって精度の高い数値が得られる礎石建物ＳＢ200の柱間寸法（2.737ｍ）が、建物配置、石組基壇化粧などの設計の基準となっていると考えられている。すなわち、掘立柱建物ＳＢ280の桁行柱間は礎石建物のそれにぴったりと一致し、南側柱列が礎石建物中心から６柱間分離れた位置にあること。北側柱列については一部を検出しただけで不確定な要素もあるが、南の建物ＳＢ180南側柱列と等距離にある可能性が高いことが指摘され、また、ＳＢ180の北側柱列は基壇化粧外斜面の上端に接して立てられ、ＳＢ280の南側柱列とは対称の位置に無いが、これは基壇化粧底面が西北隅で北へのび、西折する位置から外斜面が立ち上がったとすると、ＳＢ280の南側柱列もその箇所では外斜面上端に接する位置にあり統一的な設計がなされているとみているのである。しかし、報告では調査によって得られた資料が南北方向に限定されていることに加えて、南のＳＢ180の桁行柱間は礎石建物のそれと微妙にずれるうえに、柱抜取穴から復原される建物方位は北で西へ１°20′傾いていることから、東西方向を含めた全体の設計については検討を保留している。

ところが今回検出したＳＢ3440の南側柱列の柱穴底には方形石が据えられ、それから復原される柱位置は、抜取穴から復原される柱位置よりも厳密であるから、これを基に検討すると、ＳＢ3440の南側柱列は礎石建物と同じ方位で計測したＳＢ180の南側柱列にぴったり一致し、南側柱列は礎石建物の中心からＳＢ280の北側柱列までと等距離の位置にあるうえに、ＳＢ3440の東側柱列についても等距離にあることが判明した。なお、ＳＢ180の建物方位を礎石建物と同じとした場合、ＳＢ180の桁行柱間は礎石建物のそれより幾分広く復原されるが、それはＳＢ180の梁行柱間が広いこととともにＳＢ180が遺跡の南正面にあって他の建物とは異なる機能をもつことを示すと想定されよう。

ところで、柱間寸法2.737mはそれ自体が隋尺とされる0.274mの10尺に近い数値であり、9尺とすれば単位尺0.3041m、7.5尺とすれば単位尺0.3645mが得られる。(これを唐尺、高麗尺とし、いずれがより完数に近い数値を得るかの議論は、3者がそれぞれ10:9:7.5の関係にあり、寸や分の単位までを容認した場合いずれでも成り立ちうるからここでは問わない。)いま試みに、柱間を9尺(単位尺0.3041m)として図(Fig.62)に示した。結果、中心からSB280南側柱列までが6単位54尺、SB180南側柱・SB280北側柱・SB3440東側柱など外側の柱列までは67尺(7単位+4尺)、掘込地業の南縁・東縁は75尺の位置にあり、礎石建物の基壇幅は8単位+2尺の74尺、基壇化粧溝底面幅(1.8m)は6尺、外斜面幅は5尺となる。

この数値に基づいて、今回検出した柱穴から復原される建物SB3440の柱間約1.9mを換算すると、南北、東西とも6.5尺となるが、東端からSB240西妻柱までは23尺であって6.5尺等間では割り付けられない。いっぽう、北の建物SB280の桁行柱間を9尺等間とすると中心から6単位目で想定される東側柱列まで残り13尺となる。この残り13尺は今回検出した柱間6.5尺の2間分にあたり、同様に、南北方向についてもSB280の梁行柱間を13尺とし、その南に梁行13尺、桁行9尺等間の南北棟建物を想定すると、ちょうど外観が一辺134尺の正方形の区画が復原され、その四隅には2間四方の総柱建物を配置することができる。

この復原が妥当であるとすれば、西辺の南北棟と石組溝状をなす基壇化粧の貼石遺構の西排水路との関係は、底石の中央に柱が建ち、排水路が床下をくぐる構造と考えられる。また、第1次調査の西拡張区の所見では、西側は深くまで後世の飛鳥川の氾濫でえぐられているとされるが、そこでは、氾濫原の中に3個の花崗岩を確認している。このうち西側の2個は明らかに氾濫の砂層中にあるが、東側で確認した花崗岩は氾濫の底にあり、この位置が想定される南北棟建物の柱筋に正しくのることからすれば、この石はSB3440のように柱穴の底に据えた石がかろうじて元の位置を保っていたものとみることができ、遺跡の西側についても再調査によって痕跡が確認される可能性が残されているといえよう。

また、桁行柱筋が礎石建物とあわない東西10間のSB180については、両庇の間8尺、中央間9.25尺等間とみ、隅の総柱建物との間を東は10尺、西は8尺に復原すれば、検出した柱抜取穴の位置と一致する。隅の総柱建物との間が東で広いのは通路と見ることもできる。

いずれにせよ、今回検出したSB3440は区画の東南隅に位置し、上述の復原からすれば2間四方の総柱建物で南北棟建物の南に位置する角楼状の建物と考えることができるのである。掘込地業がこれらの建物の外側8尺の位置から内側について行われているから、区画全体で一つの建物を構成する様な完結性に富んだ配置をもつとの想定は蓋然性が高く、遺跡の外観は正方形で、その四隅に一段高い角楼が突き出し、中央部からは更に高い楼閣状の礎石建物が顔を出していたとみられよう。

時期区分について　これまでの水落遺跡では礎石建物の時期をA期、その廃絶後の遺構をB期

とし、B期を重複関係からB－1期、B－2期に細分している。いっぽう、石神遺跡の遺構はA期（斉明朝）、B期（天武朝）、C期（藤原宮期）、D期（奈良時代）に大別され、A期はさらに、東区画の井戸SE800から延びる暗渠の付け替えや建物の重複関係、造営方位を根拠に細分されるが、この大別と細分は各調査区毎に微妙に異なり、調査地によってはA期以前の時期が確認されたり、A期を4小期に分けられる場合もあり、頻繁で複雑な造替を繰り返していると理解されている。石神遺跡の時期区分と水落遺跡のそれとの具体的な対応関係については、水落遺跡の中央を巡って北へ延びる木樋暗渠と石敷、建物の関係から、水落遺跡のA期が石神遺跡のA－3期（第12次調査のAd期）に対応すること、埋土の類似から水落遺跡B－2期が石神遺跡B期に相当するとされる。しかし、そもそも大垣で隔てられた石神遺跡と水落遺跡が常に同時に造替されるか否かも疑問のあるところで、個々の遺構を対応させることは難しい。ここでは、今回の遺構の理解に必要な部分に限って、遺構の方位を手がかりとした若干の検討によって現時点での理解を示し、将来の詳細な検討に備えたい。

A期の遺構の造営方位が北接する石神遺跡のA－3期の西の区画と一致することは、重複関係からした対応関係と矛盾しない。ところが、石神遺跡と水落遺跡を分ける大垣SA600と石神遺跡の東の区画が北で東に40′程傾く方位をもつのに対して、西の区画はほぼ真北か西へ40′傾く方位をもっている。すなわち、同じA－3期の遺構といえども同じ方位にないのである。この東と西の区画の関係については、第7次調査では西の区画が東の区画よりも新しく造営された形跡のあることが報告されており、西の区画はA－3期の新しい段階につけ加えられたことが考えられ、方位の違いはその際に生じたとみることができる。であれば、西区画の建物方位と一致する水落遺跡A期の造営は、石神遺跡のA－3期の新しい段階とみられ、掘込地業で壊された南北石組溝SD3400については石神遺跡のA－1期からA－3期の古い段階の遺構であることになる。南北石組溝の造営方位を検討すると、それは石神遺跡の南限の大垣SA600の東半とその南の東西棟建物SB530、東区画の南にある井戸SE800を挟む2棟の掘立柱建物などA－1期にはじまる遺構と同じく、北で東へ約40′傾く方位であり、南北石組溝SD3400は石神遺跡のA－1期に属し、大垣で隔てられた石神遺跡の南にはそれらとともに造営された遺構が存在すると考えておきたい。なお、水落遺跡の南限と考えた東西塀SA295についても同様の方位に復原することができる。

西へ約1°20′傾く石列SX3390の方位は石神遺跡では見あたらないが、この方位は飛鳥寺寺域西大垣の方位に近く、その点からは飛鳥寺創建時以来の遺構である可能性をもつことになる。しかし、飛鳥寺西門前の南北石組溝SD6685のように、7世紀後半の溝が寺域外郭線に規制されて西大垣と同じ方位につくられる例もあり、方位は造営時期の決定要素とはなり得ないことも明白である。それらは遺跡全体の変遷過程の中で理解すべきで、今回の石敷の方位は、飛鳥寺西に想定される石敷広場の一郭を占めるとする理解には意味があろう。

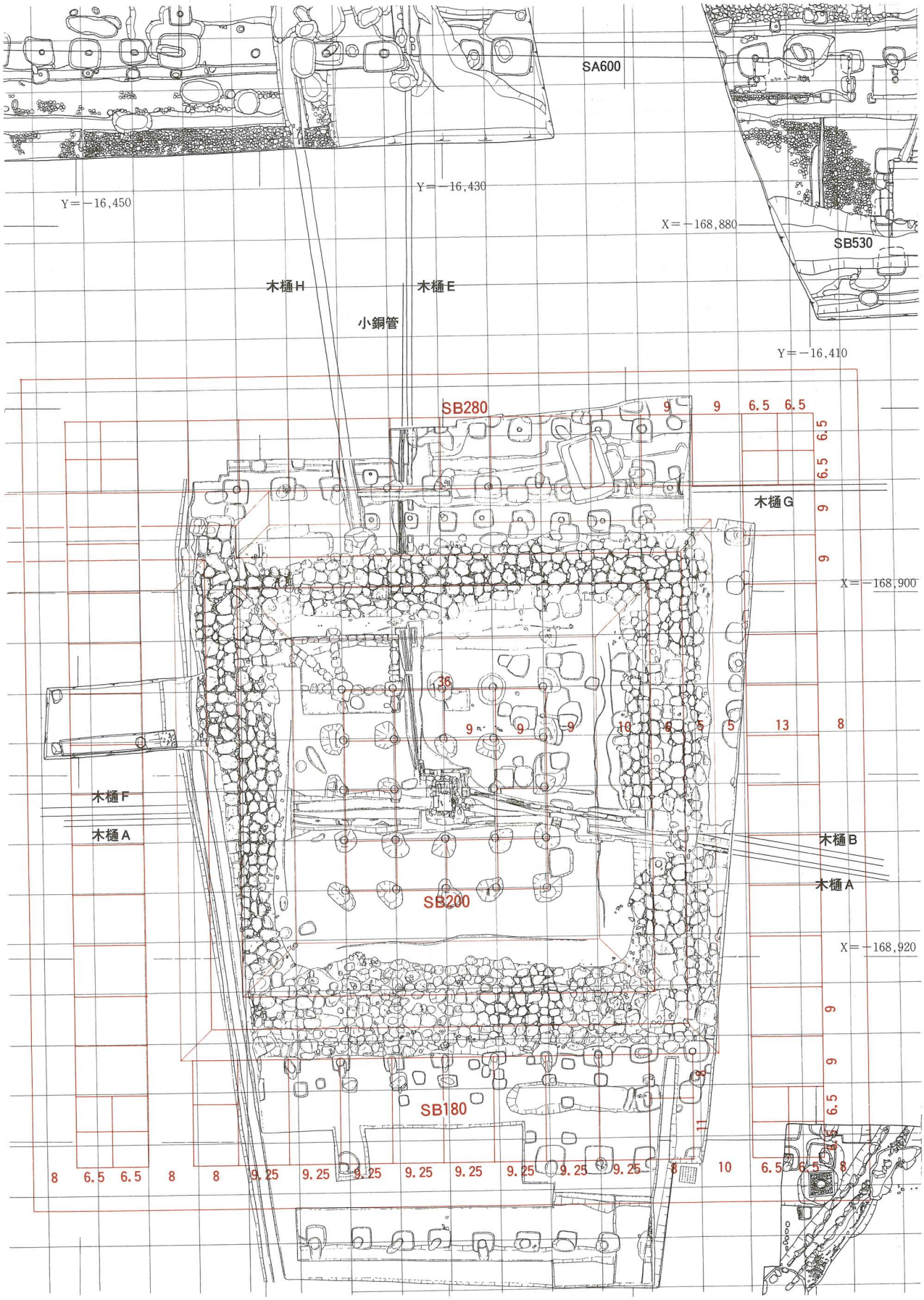


Fig.62　水落遺跡遺構配置復原図（1／300　細線は2.737m方眼、赤数字は1尺＝0.3041mとした値）

水路網　斜行石組溝ＳＤ3410は前述のように掘込地業と重複関係にあるものの、その造営と一連の遺構と考えられる。石組溝は当時の石敷面などから復原される旧地表面の等高線の方向にそって東北にのびるが、石神遺跡第３次調査区では検出されず、第１次調査のＳＤ330はＡ－１期の溝で規模も異なることからこれにつながることはない。であれば斜行石組溝は礎石建物の中心部に延びる２本の木樋（木樋Ａ・Ｂ）と掘立柱建物ＳＢ280の南側柱に沿う木樋Ｇの水源である可能性がある。いま、石組溝の底面の高さ（海抜100.60ｍ）を東北に延長し、木樋Ａ・Ｂ・Ｇの東延長線との交点でそれぞれの底の高さを比べると、いずれもほぼ同高にあり水位の上からはそれらの導水路として矛盾はない。また、３本の木樋の断面は幅、高さともに25㎝未満であり、木樋の断面積の総和は石組溝が満水であれば石組溝の断面積より小さく、この石組溝一本で充分供給できる。ただし、その接続と供給時の調整にはなお特別の構造、装置が必要であると思われ、そこには池などの貯水施設の存在が想定されよう。

なお、いま一本新たに発見された木樋暗渠ＳＤ3370については、そのまま西へ延長すると掘込地業の西南隅の南をかすめる位置を通る。礎石建物の中心部へのびる２本の木樋の南約30ｍの位置を並走するが、この方向が地形的要因による一致である可能性もあり、時期、機能、他の木樋との関係などは、飛鳥地域全体におよぶ複雑な水路網の中で検討する必要がある。

遺跡の南限と飛鳥寺西方との関係　調査当初、本調査区内には第６次調査で検出した掘立柱塀ＳＡ295とそれを壊したＢ期の東西溝ＳＤ260が延びていると想定した。このＳＡ295は南を調査していないことから建物の北側柱である可能性があるものの、掘込地業南縁に近接する位置にあることから遺跡の南限と考えられた塀である。しかし、今回の調査では両者とも検出されず、遺跡東限の施設もみえない。したがって、塀ＳＡ295は正方形区画を取り囲むように配置された遺跡の南限塀とは考えられず、先述のように塀は南北石組溝とともに石神遺跡のＡ－１期に属す遺構である可能性がある。

今回の調査区を含めて、遺跡周辺のＡ期の遺構は、石神遺跡の南限の大垣に近接する東西棟建物ＳＢ530のほかは、調査区の東方約50ｍの大粒の石敷（石神遺跡南方の調査、『概報13』）をはじめ、飛鳥寺の西大垣の西約７ｍの南北石組大溝、その西の南北に延びる小石敷、大垣の西約55ｍの西側が一段低くなった南北方向の石列（飛鳥寺周辺Ｂ調査地、『概報11』）など、南北方向の石敷・石組溝ばかりが確認されている。すなわち、それらが北へ延びた場合、想定される水落遺跡の正方形区画の東端から飛鳥寺の西大垣までの間約78ｍの大半は石敷で構成され、水落遺跡は石敷の空間に突き出したように位置するのである。完結性に富んだ配置を特徴とする遺跡はそれ自体として区画されたものとも理解されるから、その外をさらに塀などの外郭施設で区画されたかどうかについては意見のわかれるところである。水落遺跡の外郭施設についての結論は、今後の調査の進展に委ねたい。

2　山田道第７次調査

（1994年４月～５月）

本調査は、県道橿原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事の一環として、小公園「ポケットパーク」が設置されることとなり、その事前調査として行ったものである。今回の調査地は雷丘から東方に約300ｍの県道（推定山田道）に南接する水田で、山田道第１次調査Ⅳ区の南10ｍの位置にあたる。また当地は藤原宮東四坊大路（推定中ッ道）に東接し、所謂大藤原京を想定した場合には左京十二条五坊西南坪にあたる場所である。

県道拡幅工事に伴う調査は1988年度以来続けられている。山田道に関しては既に６次に及び、また昨年度からは雷丘東方でも調査が行われている。そのうち第１次調査では、今回の調査区以東で６世紀末～７世紀前半にかけての数期にわたる掘立柱建物群を検出しており、それらが山田道推定地に及ぶことから山田道の所在についての疑問が提起された（『概報20』）。しかし続く第２・３次調査では山田道とは断定できないものの、７世紀末～８世紀前半におよぶ東西溝ＳＤ2540とこれを北側溝とする道路ＳＦ2607を検出している。また出土遺物から奈良時代の小治田宮が周辺に存在していた可能性も指摘された（『概報21』）。第５次調査ではこの東西溝ＳＤ2540が雷丘裾部まで達している（ＳＤ2800）ことが確認されている（『概報23』）。しかし第６次調査では今回同様に県道の南側を調査したが、東西溝ＳＤ2540に対応する道路ＳＦ2607の南側溝ほか、山田道に関連する遺構は確認されなかった（『概報24』）。雷丘東方で行われた藤原宮第71－９・14次調査では、小墾田宮との関連を指摘された７世紀前半の遺構や７世紀後半から奈良時代におよぶ建物群が山田道推定地を越えて確認されたことから、山田道が従来の想定位置にあったのか再度疑問視されるようになった（『概報24』）。

山田道第１～６次までの調査が南北幅が狭い東西方向の発掘区であったのに対して、今回は南北15.5ｍ、東西16.5ｍの調査区を設定することができた。したがってＳＤ2540・2800に対応する道路ＳＦ2607の南側溝が調査区内を通ることが十分予想された。本調査では山田道関連遺構

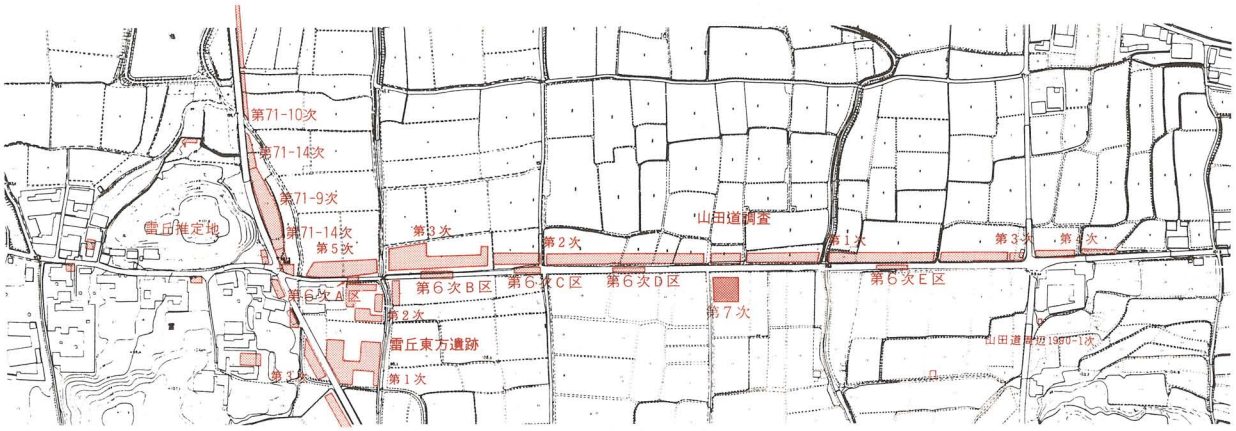


Fig.63　山田道第７次調査位置図（１：5000）

の検出を主な目的とし、あわせて上記のような調査所見を踏まえ、おもに７世紀以降の当地における土地利用状況の把握につとめた。調査面積は255㎡である。

遺　構

基本層序は上から耕土・床土・明黄灰色粘質土・茶灰色粘質土・赤褐色土・褐色砂・炭混灰色粘質土・暗灰色粘土（弥生時代包含層）・黄灰色粘質土（地山）である。調査区の西北隅は他の場所よりも地山が高い。検出した遺構は、赤褐色土から掘り込むもの（上層）と炭混灰色粘質土から掘り込む遺構（下層）の大きく２者がある。遺構検出はそれぞれ赤褐色土、炭混灰色粘質土上面で行った。

上層遺構　上層は建物３棟、塀４条、溝４条のほかに井戸、土坑等がある。遺構は重複関係、方位、出土遺物等から少なくともＡ～Ｃの３時期に区分できる。

Ａ期　Ａ期は北で西に約４°振れる遺構である。主な遺構は建物ＳＢ3292、塀ＳＡ3293・3294、溝ＳＤ3295・3296がある。

ＳＢ3292は調査区南端で検出した東西３間の東西棟である。北側柱筋のみを検出した。柱間寸法は2.0ｍ等間である。柱穴には黄色の山土が混入する。

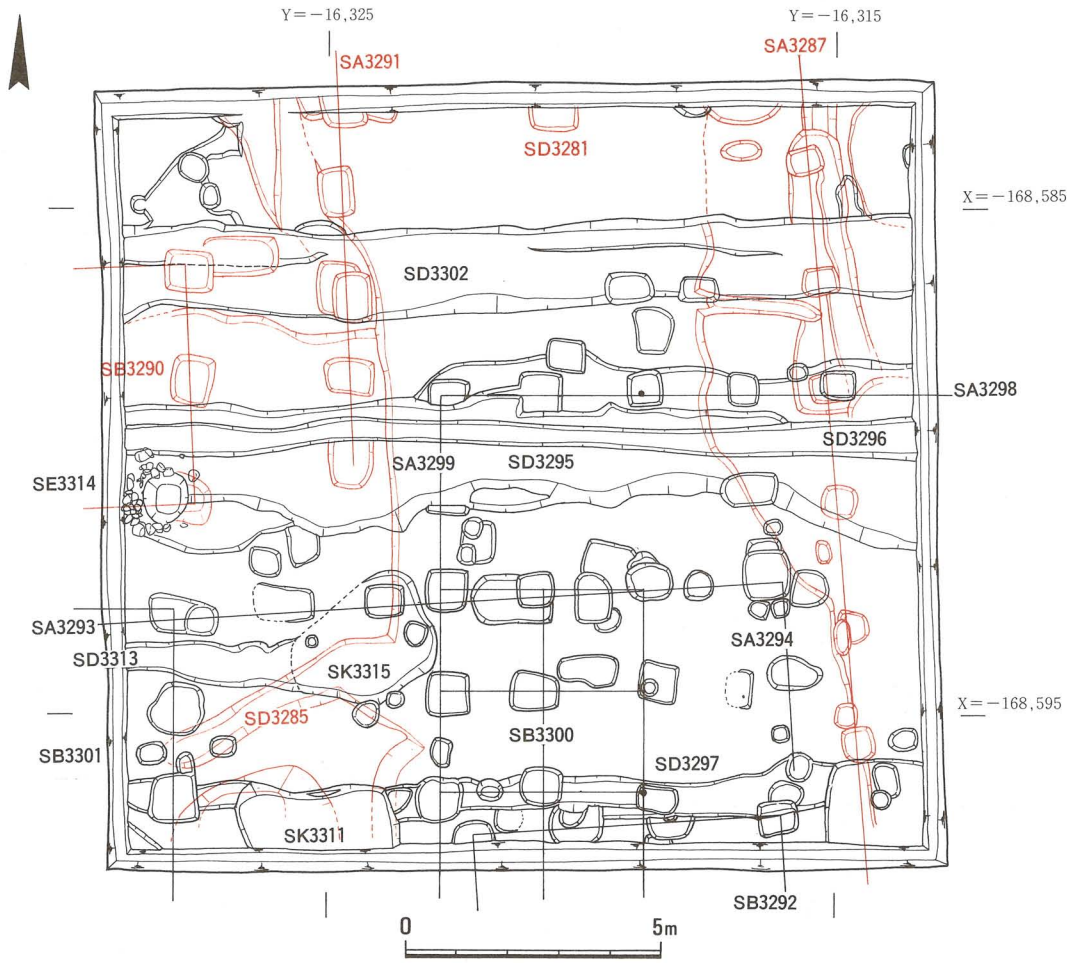


Fig.64　山田道第７次調査遺構図（１：150）

ＳＡ3293は建物ＳＢ3292の北に4.6m隔ててある東西塀である。６間分を検出したが、さらに西に延びると思われる。柱間寸法は1.9m等間である。

ＳＡ3294は塀ＳＡ3293の東端で南に折れる南北塀である。２間分を検出した。２間目の柱穴が建物ＳＢ3292の東北隅の柱穴と近接していることから、この塀は２間以上延びないと思われる。柱間寸法は1.9m等間である。

ＳＤ3295は塀ＳＡ3293の北の東西溝である。幅約2.6m、深さ0.5mで、やや蛇行する。埋土中には飛鳥Ⅲまでの土器を含む。この溝の下層北よりに幅0.5m、深さ0.3mの溝ＳＤ3296がある。溝の両肩はほぼ垂直に立ち上がる。両溝の性格的な関係は不明である。

Ｂ期　Ｂ期はＡ期の遺構を切り、また次のＣ期の遺構に切られる遺構である。主な遺構は溝ＳＤ3297がある。

ＳＤ3297はＡ期の建物ＳＢ3292の北側柱筋と重複する溝であり、明らかに建物より新しい。幅0.7m、深さ0.3mである。

Ｃ期　Ｃ期はＢ期の溝を切り、ほぼ方眼方位にのる遺構群である。主な遺構は建物ＳＢ3300・3301、塀ＳＡ3298・3299、溝ＳＤ3302、井戸ＳＥ3314、土坑ＳＫ3315などがある。

ＳＢ3300は調査区南方で検出した総柱の建物である。東西２間、南北２間を検出したが、さらに南に延びる南北棟であろうと思われる。最も南側の柱筋がＢ期の溝ＳＤ3297と重複し、溝を切る。柱間寸法は2.0m等間である。１本柱根が残る。

ＳＢ3301は建物ＳＢ3300の西の建物である。東側の柱筋２間分のみを検出した。柱間寸法は1.9mであるが、建物全体の規模は不明。溝ＳＤ3297と重複し、溝を切る。

ＳＡ3298は建物ＳＢ3300の北に４m隔ててある東西塀である。４間分を検出したが、さらに東に延びると思われる。柱間寸法は2.0m等間である。最も東の柱穴が下層の塀ＳＡ3287と重複し、塀ＳＡ3287より新しい。１本柱根が残る。

ＳＡ3299は塀ＳＡ3298の西端から南に折れ、建物ＳＢ3300の西北隅にとりつく南北塀である。柱間は２間で、2.0m等間である。

ＳＤ3302は塀ＳＡ3298の北の東西溝である。幅1.4m、深さ0.45mである。下層の建物ＳＢ3290、塀ＳＡ3291と重複し、両者を切る。堆積土内から飛鳥Ⅳまでの土器が出土した。

ＳＥ3314は建物ＳＢ3301の北の井戸である。下方が素掘りで上部を石で囲う。素掘りの部分では直径約１m、深さ0.5mである。堆積土を分析したが、トイレ遺構である可能性は低い。下層の建物ＳＢ3290、溝ＳＤ3295と重複し、両者を切る。

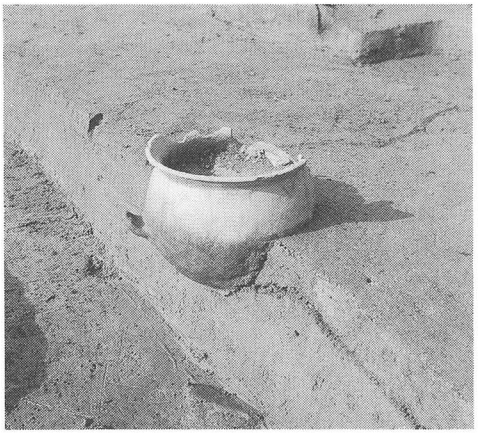


Fig.65　土器埋納土坑ＳＫ3315

ＳＫ3315はＳＢ3300の西の土器埋納土坑である。溝ＳＤ3313と重複するが、中・近世の耕作溝により重複部分を削平されていたために切合い関係は不明。土坑内に飛鳥Ⅳの時期の土師器の甕が直立した状態で埋設されていた。内部からは土師器皿１点が落下した状態で発見されている。

下層遺構　下層の遺構は炭混灰色粘質土から掘り込むものである。検出した主な遺構は南北大溝ＳＤ3281、南北塀ＳＡ3287・3291、建物ＳＢ3290である。

ＳＤ3281は発掘区の中心を南北に走る幅６ｍ以上、深さ0.7ｍ以上の南北大溝である。堆積土は粗い砂や粘土の互層であり、水量が豊富であったことがうかがえる。弥生時代中期から飛鳥Ⅰまでの土器が出土した。

ＳＡ3287はＳＤ3281の東の塀である。一部ＳＤ3281と重複し、ＳＤ3281の堆積土を切る。また上層の塀ＳＡ3298に切られる。５間分を検出したが、さらに南北に延びていたと思われる。柱間寸法は2.35ｍ等間で、北で西に約５°振れる。埋土には黄色の山土が入る。

ＳＡ3291は南北大溝ＳＤ3281の西の南北塀である。４間分を検出した。柱間寸法は1.8ｍ等間で、北で西にわずかに振れる。柱穴がＳＤ3281と上層のＳＤ3296と重複し、ＳＤ3281の堆積土を切り、ＳＤ3296に切られる。

ＳＢ3290は南北塀ＳＡ3291の西の建物である。東の柱筋２間を検出した。柱間寸法は2.4ｍ等間である。おそらく東西棟であろう。ＳＡ3291と同じく北で西にやや振れる。

遺　物

遺物としては土器・瓦・木製品が出土した。

土器には弥生土器、須恵器、土師器の他に韓式土器、東国系内黒土師器が１点ずつある。瓦は飛鳥寺同氾の垂木先瓦小片１点である。木製品では南北大溝ＳＤ3281から鍬と下駄の一部と思われる製品が出土した。鍬は柄と鍬身とが装着したままの状態で出土した。鍬身はいわゆるナスビ形の叉鍬で、柄は反柄である。

まとめ

まず各期の時期について簡単に述べ、当地における土地利用の変遷を記す。

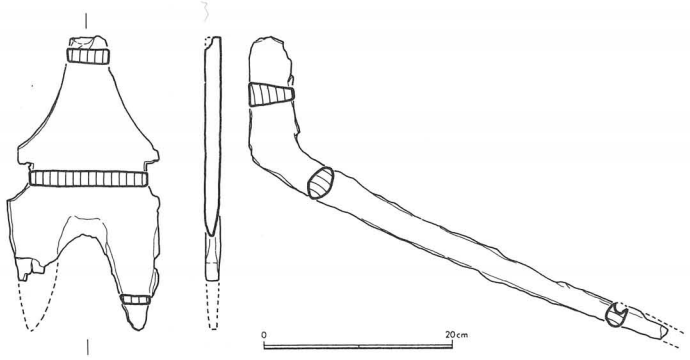


Fig.66　ＳＤ3281出土鍬（１：８）

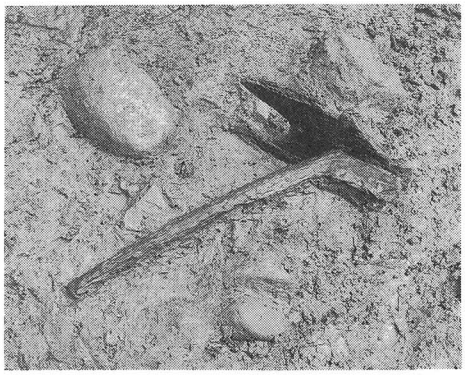


Fig.67　鍬出土状況

下層の南北大溝ＳＤ3281から出土した最も新しい土器は飛鳥Ⅰの段階のものであり、大溝の下限を７世紀初頭とすることができる。この溝が埋まった段階で南北塀ＳＡ3287や建物ＳＢ3290・南北塀ＳＡ3291が建てられる。南北塀ＳＡ3287と建物ＳＢ3290・南北塀ＳＡ3291とは、振れの違いから時期差が読み取れるが、両者の前後関係は不明である。その後７世紀中頃にこの付近を褐色の微砂が覆う。この褐色砂は人工的な整地層ではなく、自然堆積によるものと思われる。７世紀後半に入り、その上を赤褐色土で整地して、Ａ期（飛鳥Ⅲ）から下限を飛鳥Ⅳの時期とするＣ期まで当地を生活空間として利用する。藤原宮期には当地は利用されない。

以下今回の調査成果を簡単にまとめておく。

①　南北大溝ＳＤ3281が埋まった７世紀初頭以降、７世紀後半までの間に当地は宅地化される。最低４回の建物の建替え、およびそれに伴って溝の付け替えなどが行われたことが復原できる。周辺の調査成果ともあわせ、これら７世紀代の遺構の性格を積極的に検討する必要があろう。なお当地に於て藤原宮期以降の遺構・遺物を検出できなかったことは、藤原京、および大藤原京の範囲等を検討する上で重要である。

②　近年雷丘東方に所在した可能性が指摘されている奈良時代の小治田宮関連の遺構は、今回の調査地からは検出できなかった。また当地以東を調査した第１次調査でも大土坑ＳＫ2335以外同期の遺構は確認されていない。小治田宮が雷丘東方に所在していたとしても宮域は当調査地までは及んでいない可能性が高い。

③　今回検出した東西溝ＳＤ3295、ＳＤ3302から出土した最も新しい遺物は７世紀後半のものであり、両者の溝はこの時期には埋まったと考えられる。したがって７世紀末～８世紀前半の土器を含むＳＤ2540、ＳＤ2800とは対応しない。つまり藤原宮の時期には存在していたと考えられる山田道の側溝とは考え難い。今回の調査結果からも、山田道は当初の推定線上には存在しない可能性が高くなった。ただしそれよりも古い道路の南側溝であった可能性もあり、両溝に伴う建物が溝よりも南で検出されているという事実とも合わせ今後検討していく必要がある。

④　土器埋納土坑ＳＫ3315出土の土師器甕は明らかに人為的に埋設されたものである。甕内にあるものを埋納した後に皿で蓋をして埋められたことが容易に復原できるが、内部から皿以外の遺物は発見されておらず、性格を把握するには至らない。近年同様の遺構が大阪を中心にいくつか検出されており、今後その機能を明らかにしていく必要がある。

⑤　遺物では、ナスビ形の叉鍬と反柄とのセット関係を明らかにすることができた。今まで両者が一対である可能性は指摘されてはいたが、実際に装着状態で出土した例はなかった。農具の変遷等を考えていく上で重要な資料であろう。ただし鍬が出土したＳＤ3281の堆積土中には、弥生時代中期から7世紀初頭までの遺物が含まれており、共伴遺物から鍬の年代を決めることは難しい。

3　甘橿丘東麓の調査

A　第71－12次調査

（1994年１月）

本調査は国営公園整備の一環として、東の麓から頂上に登る一般登山者向けの登山道を設置する計画があり、これに伴う事前調査として実施した。調査区は登山道の予定地に沿って、頂上付近から登り口まで、１区から８区までの８箇所に設定した。８調査区の合計面積は73㎡である。各調査区の位置、形状は下図の通りである。

いずれの発掘区も層序は基本的には同じで、表面の腐食土の下に、黄灰色土、暗緑色土がある。その堆積層の厚さにはばらつきがあるが、各発掘区ともに顕著な遺構および遺物は見出されなかった。

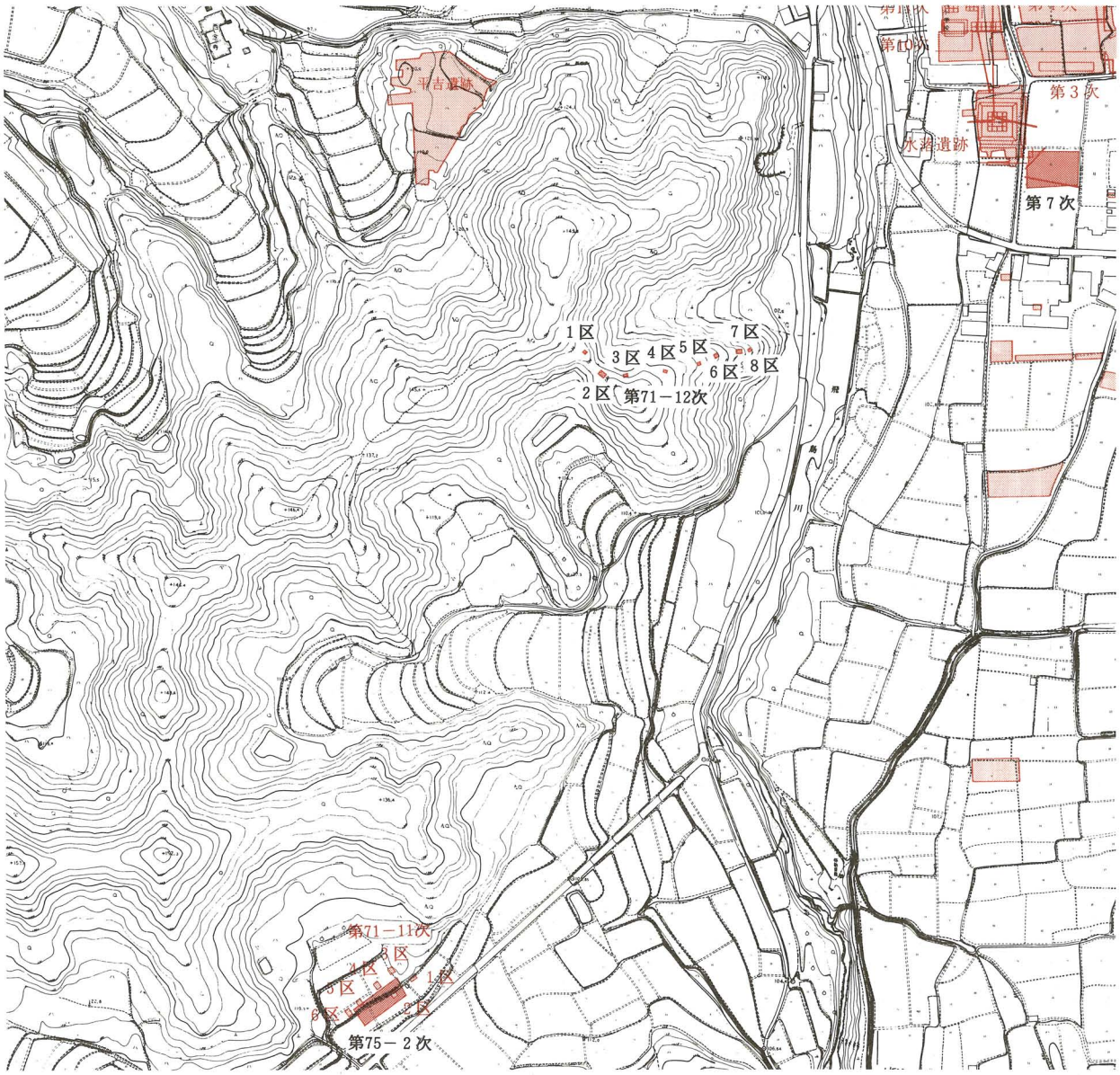


Fig.68　第71－12・75－２次調査位置図（１：4000）

B　第75－２次調査

（1994年５月～６月）

本調査は、飛鳥国営公園整備事業の一環として、甘橿丘東麓に一般登山者向けの駐車場建設計画があり、その事前調査として実施したものである。調査地は奈良県高市郡明日香村大字川原字極楽寺に所在する。

前年度、1993年12月に試掘調査をおこない（第71－11次調査『概報24』）、その成果をうけて、今年度本調査を実施した。６箇所の小規模な試掘調査の結果、旧地形と埋没谷のおおよその状況を把握し、谷の中央部に相当する箇所に６世紀末から９世紀初頭ごろまでの遺物を含む包含層が形成されていること、また試掘坑２区において遺構の存在する可能性が指摘された。このため、本調査では、谷の中央部分を中心に、南北両崖がかかり谷筋に対して直交するように、南北30ｍ、東西12ｍの調査区を設定した。５月９日に機械掘削を始め、６月30日に現地調査を終了した。調査面積は約360㎡である。

甘橿丘は、海抜145.6ｍ、比高差50ｍの花崗岩の残丘であり、その直下を飛鳥川が丘の東麓に沿って北西へと流れる。調査地は、この丘の東南麓に刻まれた小支谷のうちのひとつで、その谷の出口にあたる。調査区西方の谷頭部分は緩やかな平坦地になっており、柑橘果樹林として利用されている。調査地は、果樹林以前の棚田の形状をいかして雛壇状に造成されており、そのため調査区の西辺と東辺では地表面で約1.6ｍの比高差がある。谷口にあたる調査地からの視界は東北方向に開け、約500ｍ先に飛鳥寺を望むことができる（Fig.60）。

調査区内の基本層序は、上層から表土、柑橘果樹林造成時の客土、耕作土となり、調査区の南北両隅では地表下1.4ｍほどで、地山である黄褐色の風化の進んだ岩盤に達する。さらに、一段低くなった調査区の東半および谷の中央部では、平安時代から鎌倉時代までの遺物を含む灰褐色砂質土が厚く堆積する。この灰褐色砂質土の下の整地層上面において、７世紀後葉の遺構を検出した。

遺構および遺物包含層

今回の調査で検出した遺構および遺物包含層は、切り土埋立て整地層２面、土石流による埋没層１面、焼土層１面、石組溝１条、素掘り溝、土坑などである。これらの時期は大きく、平安時代から鎌倉時代、７世紀後葉、７世紀中葉の３時期に分れる。

平安時代から鎌倉時代　遺物包含層である灰褐色砂質土層、および多数の素掘り溝、小土坑がある。これらの包含層・遺構からは、土師器、須恵器、瓦などのほかに黒色土器、瓦器、灰釉陶器などが出土した。

７世紀後葉　土石流によると考えられる埋没層を間に挟み、前後２時期にわたる切り土埋立て整地層とこの整地層にともなう溝がある。下層の切り土埋立て整地層ＳＸ030は、丘の岩盤を切り崩した黄褐色粘質土による埋立て整地層で、調査区のほぼ全面にわたり谷の中央部分を埋

立てている。この整地層の上面では２条の溝を検出した。ＳＤ032は、調査区のほぼ中央で検出した東西溝である。長さ約９ｍ分を検出した。幅1.5～２ｍ、深さ30～40㎝。抜き取りの痕跡などは確認されなかったが、北岸で塊石が遺存している箇所があり、ＳＤ033と同様に石組溝であった可能性も考えられる。埋土からは飛鳥Ⅳの段階の土器が多量に出土した。このなかには漆の付着した須恵器の壷が数点含まれる。ＳＤ033は、上層の埋立て整地層ＳＸ031の下で確認した石組溝で、調査区の東壁に一部かかっていたことから、その周囲に断ち割り調査をおこない検出した。SD032にほぼ平行する東西溝で、幅0.8～１ｍ、側石３石分約1.4ｍを検出した。側石、底石ともに長さ40～60㎝の塊石を用いており、側石は内側に面を揃えている。これより上流の部分は土石流ＳＸ036により破壊されたものと考えられる。

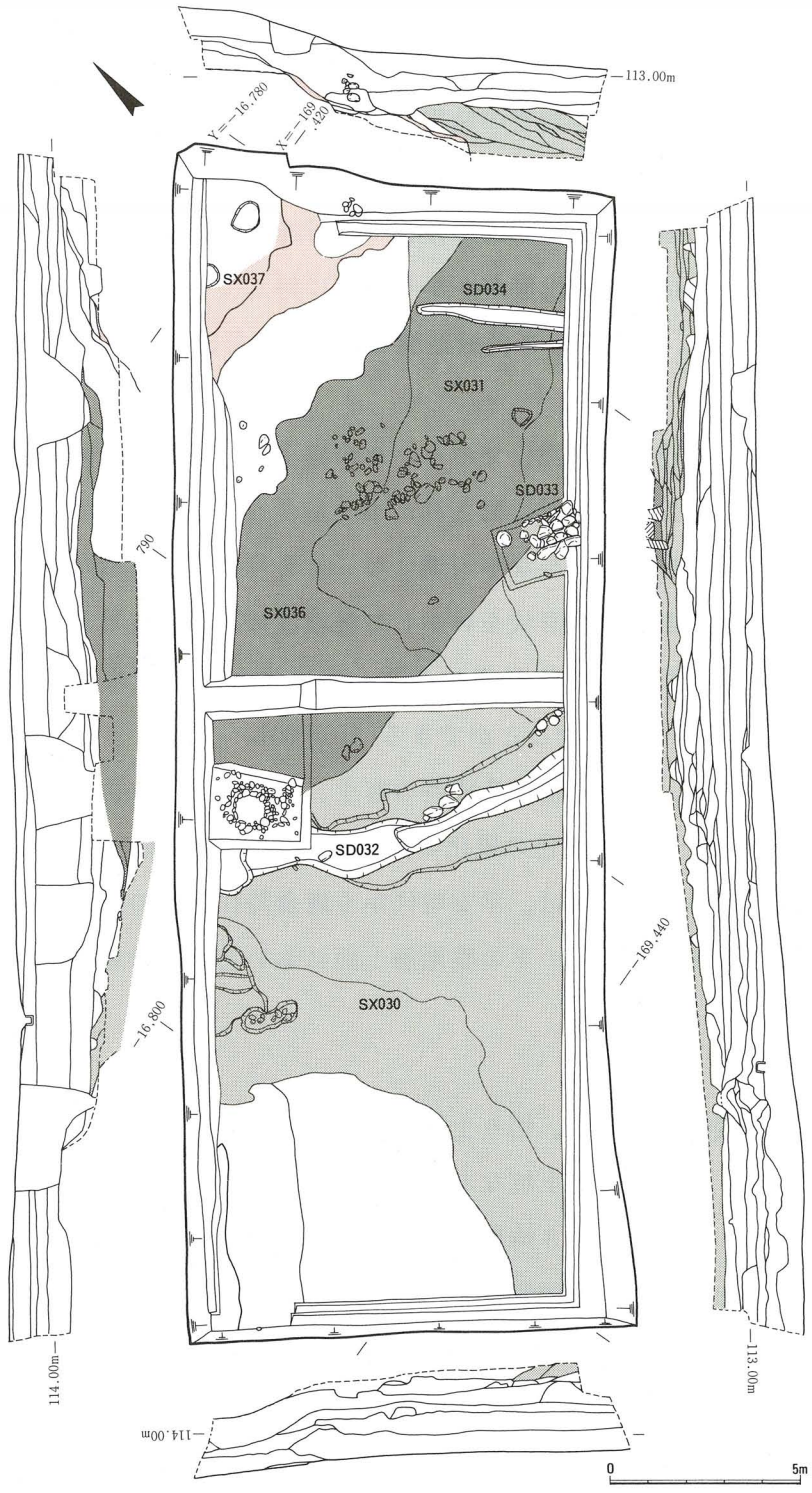


Fig.69　第75－２次調査遺構図（１：200）

整地層ＳＸ030およびこれにともなう遺構をおおい、かつ破壊する状況で土石流によると思われる埋没層ＳＸ036がある。調査区西辺中央から、東隅にかけて幅約7.5ｍで東流する。埋土はグライ化した青灰色粘土を主体とし、多量の粗粒砂を含む。地下水の影響を受け

ているため含水率がきわめて高く、非常にしまりがわるい。層中には、長さ40～60㎝程の塊石や多量の土器、木材などを含む。切り土埋立て整地層ＳＸ031は、調査区北東部において認められた埋立て整地層で、東壁・北壁および断ち割り調査による層位的な確認によれば(Fig.70)、土石流ＳＸ036による谷の埋没後、その下流部分に対して、ＳＸ030同様に地山を切り土して埋立て、整地をおこなっている。黄褐色粘質土を主体とし、厚さ20～40㎝の互層状をなす。ＳＤ034は、調査区北半でＳＸ031の上面において検出した東西溝である。長さ約４ｍ分を検出した。埋土中からは、飛鳥Ⅳ・Ⅴの段階の土器が多量に出土している。

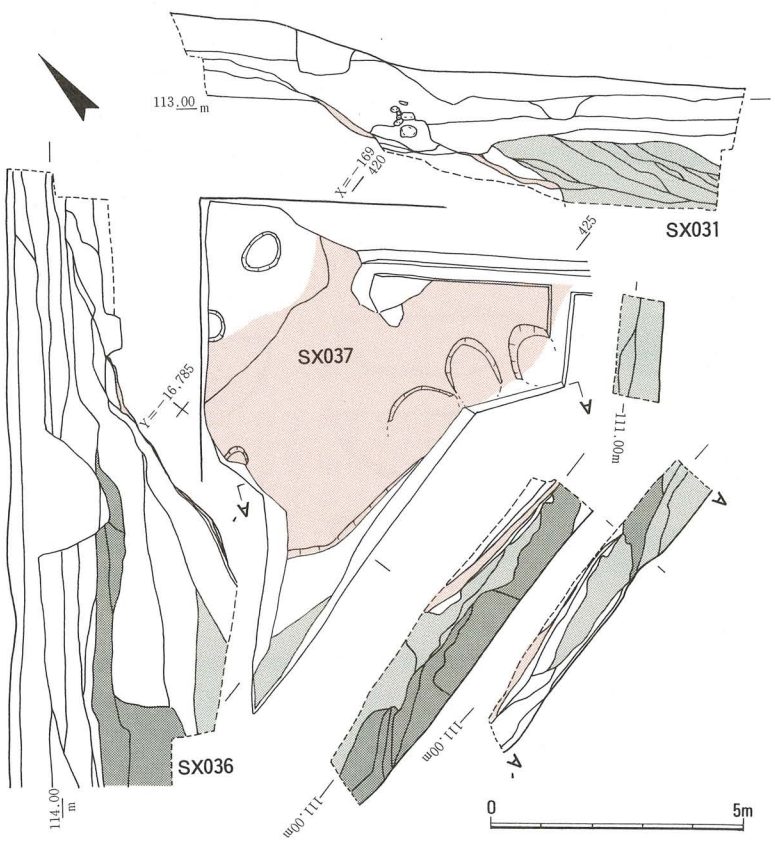


Fig.70　第75－２次調査　調査区北隅断割図（１：150）

７世紀中葉　排水溝掘削の過程で、北壁および西壁の地山上面に焼土層の存在が認められたため、その性格と広がりを確認する目的で、調査区北隅にかかる谷壁斜面部分について、さらに周辺部を拡張し、埋没層および埋立て整地層の掘り下げをおこなった（Fig.70)。その結果、この焼土層ＳＸ037は、地山である岩盤上面に谷壁斜面の全面にわたって、これをおおうように遺存していることを確認した。斜面上では、焼土・焼け壁土・炭化木材・土器片が地山起源の黄褐色を呈する風化土とともに包含層を形成しており、その厚さは２㎝から厚いところで20㎝に及ぶ。この堆積は現地表下約４ｍの谷底部分にまで達するが、谷底部では土壌がグライ化しており炭化木材に加えて多量の草木灰および土器片を含む青灰色砂質土となる。斜面上の焼土層と青灰色砂質土層間で土器片が接合することから、これらは一連の堆積と考えられる。焼土層中の土器は飛鳥Ⅰの新しい段階に相当する。

遺　物

上層の遺物包含層である灰褐色砂質土、ＳＸ036、ＳＤ032、ＳＤ034、ＳＸ037を中心に、土師器・須恵器を主体とする多量の土器類、瓦、木製品、石製品、金属製品が出土した。７世紀後葉の遺物の中には、漆や赤色顔料の付着した土器、針描き土器、陶硯（円面硯)、滑石製勾

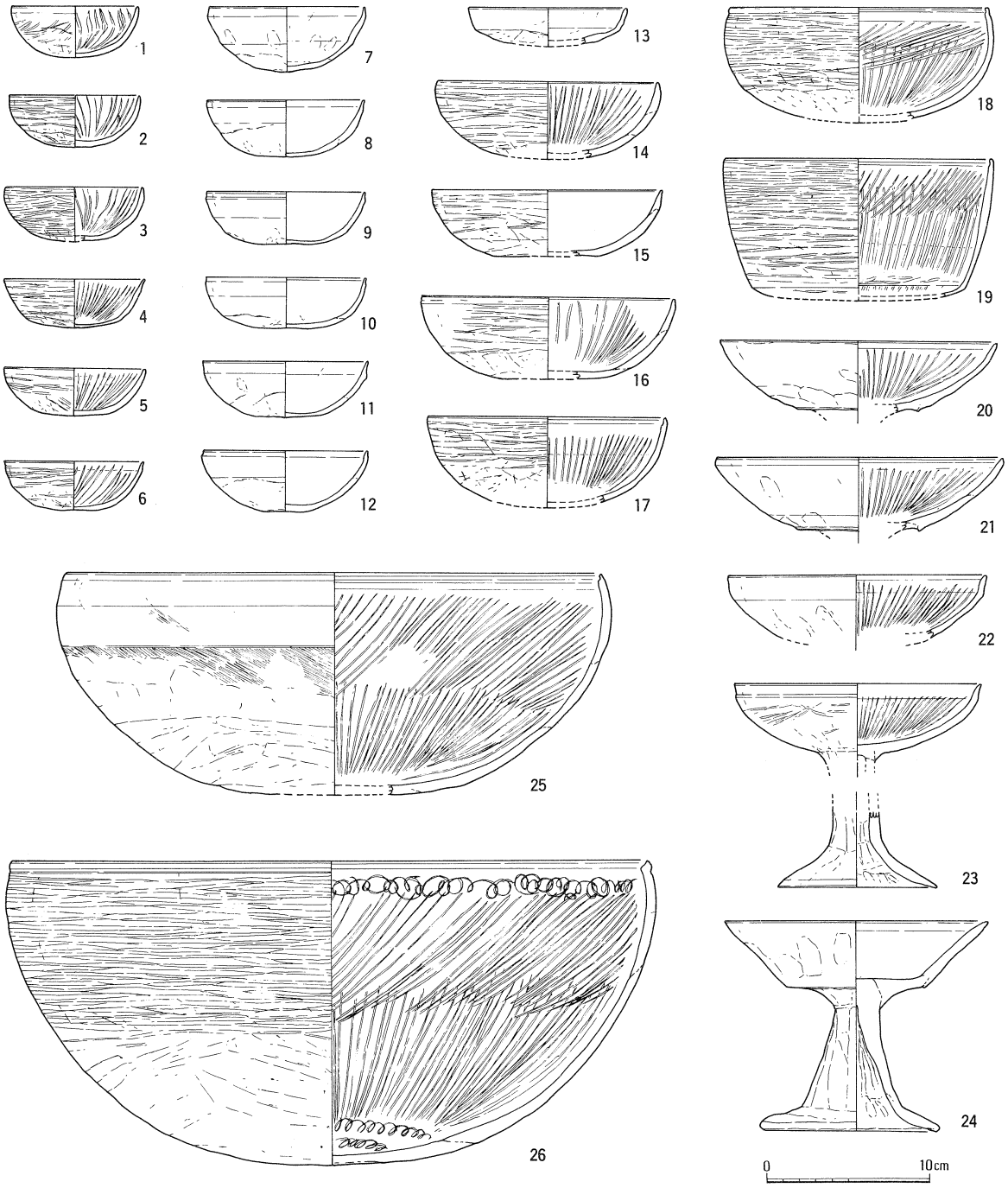


Fig.71　焼土層ＳＸ037出土土器実測図（１）土師器（１：４）

玉などがある。７世紀中葉の焼土層ＳＸ037からは、包含層を形成する焼土、炭化木材、草木灰に混じって、多量の土師器、須恵器、焼け壁土、焼け焦げた建築部材などが出土した。また、ＳＸ036からは、縄文時代の所産と思われる磨製石斧も出土している。

ここでは、焼土層ＳＸ037中に含まれていた土師器・須恵器について簡単に紹介する（Fig. 71・72)。ところで、焼土層ＳＸ037と切り土埋立て整地層との間には、無遺物の花崗岩風化砂層があり、さらにこの砂層の下では、地山起源の褐色土・岩片を含み酸化鉄の沈着により硬化した厚さ４㎝ほどの橙褐色砂質土層が、焼土層をおおっていた。また、焼土層中の土器は細片

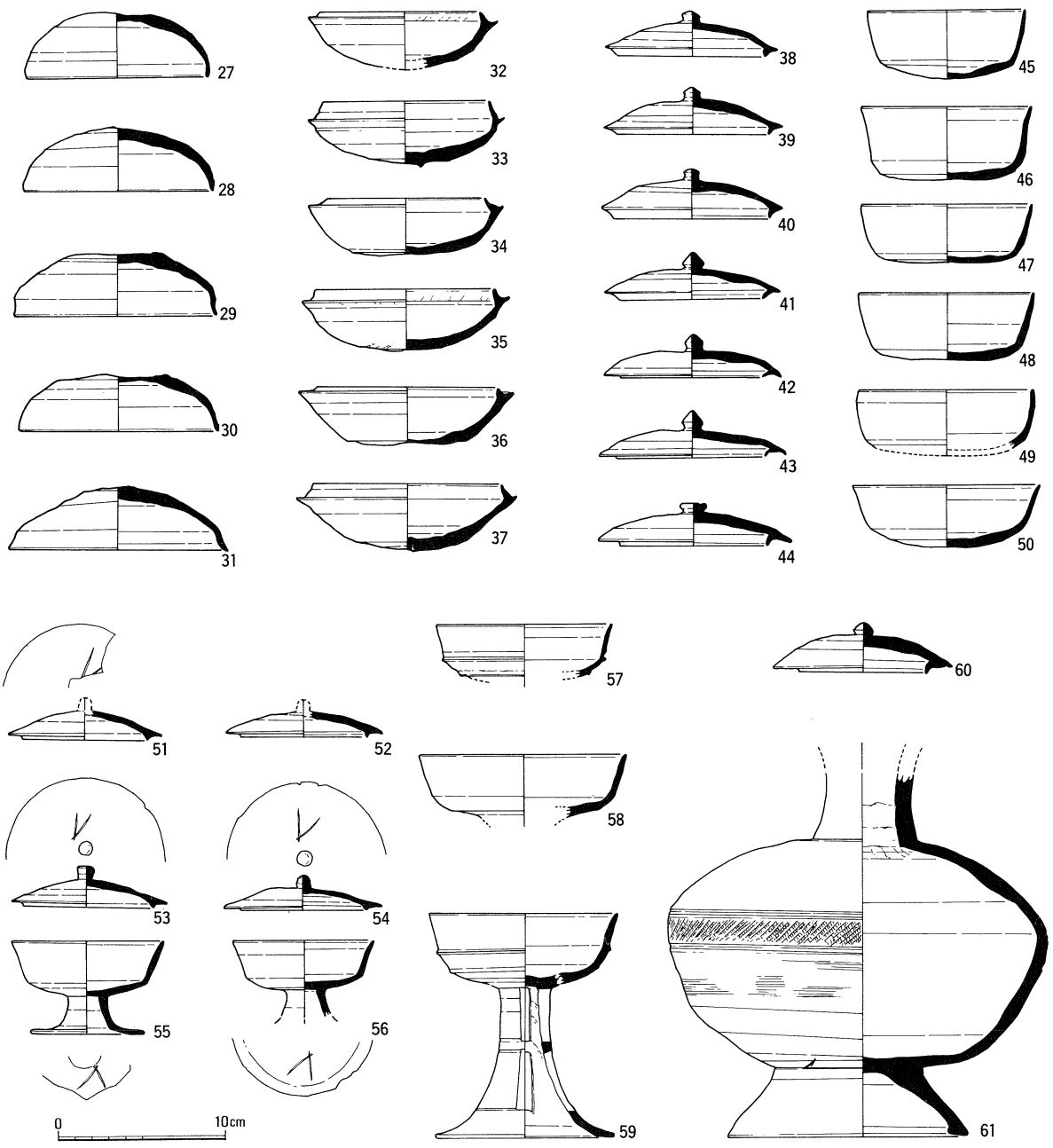


Fig.72　焼土層ＳＸ037出土土器実測図（２）須恵器（１：４）

化したものが多いが接合率が高く、型式学的にも大きな幅がみられない。したがって、廃棄の同時性が認められ、焼土層中の土器群は、良好な一括資料として扱うことができる。

土師器には、杯Ａ（19）・Ｃ（１～６，14～17）・Ｇ（７～12）・Ｈ（13）、椀（18）、高杯Ｃ（20～23）・Ｇ（24）、大型鉢（25，26）、皿、甕などがある。杯類では、杯Ｃ・Ｇが多量にある。杯Ｃは、外面を幅２㎜ほどのミガキで横方向に底部まで磨き込むもので、内面の暗文も同様に工具幅が広く施文方向も不安定であり、従来知られていた杯Ｃとは、調整技術のうえでややありかたを異にする。径高指数は28～40前後である。杯Ｇは、口縁部および体部内面にのみ横ナデを施し、外面下半は無調整のもので、粘土紐の痕跡とともにひび割れ状の皺を残すことから、

成形に型を使用した可能性も考えられる。杯C・Gともに口径7.8cm～8.6cm、9.6cm～10.1cmの小型のものが多量にあり（1～12)、それぞれきわめて高い規格性をもつ。木箱に破片を敷き詰めると前者が2.5箱、後者が3箱となり、Gのほうがひと回り大きいことを考慮する必要があるが、やや多い。これらに対し、口縁が直立し外面下半を削る杯Hは、ごくわずかしかみられない。多量にある小型の供膳形態に比べて甕などの煮沸形態は非常に乏しく、偏りのある器種組成となっている。

須恵器では、杯H（27～37）・G（38～50)、高杯（55～59)、蓋（51～54, 60)、長頸壷（61)、提瓶、甕などがある。杯Hは、蓋口径10.8cm～13.1cm、底部外面はヘラキリ未調整のものが多い。杯Hには、東海地方産の可能性のあるものも含まれる（33)。杯Gは、身の口径9.4cm～11.2cmで、底部にはいずれも回転ヘラケズリを加えている。杯G蓋は、つまみの形状によりいくつかのまとまりがみられる。すなわち、頂部が緩やかにまるく付根のすぼまりのあまいもの（38～40)、宝珠形のもの（41～43)、扁平で頂部の窪むもの（44）である。胎土・かえりの形状などの特徴もこれに対応する。杯HとGとは、ほぼ等量でGのほうがやや多い。低脚の高杯（55, 56）とその蓋（51～54）では、蓋の外面、杯部の底部外面に同様の「V」字状のヘラ記号が施されており、両者の組み合わせを知ることができる。長脚の高杯は、二段二方透しである（59)。

これらの土器群は、その特徴から飛鳥Ⅰのなかでも新しい時期の所産と考えられる。この時期の土器群については、すでに、川原寺下層SD02（『概報』10）→山田寺下層SD619および整地土（『概報』20）→飛鳥池灰緑色粘砂層（『概報』22）→坂田寺SG100（『概報』3：飛鳥Ⅱ）という序列が提示されている。土師器杯Cの径高指数、須恵器杯H・Gの蓋・身の口径をひとつの目安としてこの序列に照し合せてみると、山田寺南門前面の整地土下で検出した溝SD619および整地土出土の土器群にちかく、飛鳥池灰緑色粘砂層出土土器よりもやや古いという位置づけをあたえることができる。山田寺の整地の時期については、『上宮聖徳法王帝説裏書』に641年（舒明13年）と伝えられており、この記述に従えば、本土器群の年代も7世紀第二四半期末頃に求めることが可能であろう。

ところで、土師器では、器種・法量の違いをこえて、胎土・器形・製作技術の特徴を共有するいくつかのまとまりに分けることができる。すなわち、①：杯C（1～6, 14～16)、②：杯A（19)、杯C（17)、椀（18)、高杯C（20, 21)、大型鉢（26)、③：杯G（7～12)、高杯C（22, 23)、大型鉢（25)、④：杯H（13)などである。杯C・G・Hの構成比に着目すると、本土器群では、C・Gが多量にありHはわずかである。これに対して飛鳥池では、杯C・Hに比べてGの少ないことが報告されており、両者は対照的なありかたをみせる。同様に、他の遺跡で知られているような杯Hと同系の技術による高杯・鉢なども、この遺跡ではみられない。ごく狭い地域のなかにおいて、このような複数の技術基盤による土器群がみられ、遺跡によってその構成比に相違のあることについては、遺跡差・時間差・または遺構（資料）の性格の違

いなど様々な要因が考えられる。同時期の資料について比較検討をすすめ実態の把握に努める必要があろう。さらに、個々の器種のなかにあっても、杯Cにみられた調整手法の差異や、口唇部形態の特徴などにもとづいた細分が可能であり（例えば、杯Gは、(7), (8, 11, 12), (9, 10) といった細分ができる。杯Gの細分については、『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』において試みられている)、ひとつひとつの製作単位のありかたを知るうえでの手がかりとなろう。

まとめ

① 甘橿丘に対する本格的な発掘調査は、1977年に実施した西北麓の平吉遺跡の調査に次いで2回目であり（Fig.68・『概報8』)、東南麓においても7世紀代を中心とする土地利用の状況の一端が明らかになった。

② 7世紀後葉から藤原宮期にかけての時期に、2度にわたり丘を切り土して、大規模な埋立て作業をおこなっていることが判明した。この埋立てによって、旧地形が改変をうけ、SX036にみられるように、本来西→東方向の谷筋であったものから、現在のように東南方向に開口するように変化したものと推定される。このことは、下層の埋立て整地層SX030にともなうSD032およびSD033の方向と、上層の埋立て整地層SX031にともなうSD034の方向の違いにも反映されている。また、多量の遺物のありかたから、調査区西方の平坦地、もしくは南・北方の尾根の付近に何らかの施設が営まれていたものと推定される。

③ 7世紀中葉の焼土層は、検出状況や包含層の内容、また土師器の中には二次的な加熱をうけて灰白色に変色したものも見られることなどから推定して、調査区北方の尾根上に存在した建物の焼失に伴う灰塵の投棄、もしくは流れ込みにより形成されたものと考えられる。上面は、自然堆積層により完全におおわれているため、これらの遺物は単一時期の所産であり、土器研究の面からも良好な資料といえる。

④ 7世紀代の甘橿丘についての史料は乏しく、その状況を窺い知ることは難しいが、『日本書紀』には、皇極3年（644年)、「冬十一月に、蘇我大臣蝦夷・兒入鹿臣、家を甘檮岡に雙べ起つ。大臣の家を呼びて、上の宮門と曰ふ。入鹿が家をば、谷の宮門と曰ふ。男女を呼びて王子と曰ふ。家の外に城柵を作り、門の傍に兵庫を作る。」との記載がある。さらに、翌皇極4年（645年）の“乙巳の変”に際しては、「蘇我蝦夷等、誅されむとして、悉に天皇記・国記・珍寶を焼く。」とする。今回の調査では、これらの記述と対応する遺構などの直接的な資料は出土していないが、焼土層SX037のありかた、および土器の年代観は、『日本書紀』の記述と重ね合わせて考えることのできる材料を提示することとなった。

4　川原寺の調査

A　川原寺1993－２次調査

（1993年12月～1994年２月）

本調査は、史跡川原寺の史跡指定地の南を通る県道多武峰見瀬線の歩道改修と電柱撤去など周辺整備工事による現状変更に伴う事前調査である。調査地点（Fig.78）と調査面積、そして工事内容は次の通りである。

Ⅰ区：南門南方。Ⅰ－１区：4.2㎡、１-2区：2.5㎡。（電灯線埋設工事）

Ⅱ区：南門・南面大垣。Ⅱ－１区：33.4㎡、Ⅱ－２区：8㎡、Ⅱ－３区：８㎡。（歩道改修工事）

Ⅲ区：寺域南西部。Ⅲ－１区：6.8㎡、Ⅲ－２区：4.7㎡、Ⅲ－３区5.3㎡。（明日香村公共下水道）

Ⅳ区：南面大垣。10㎡。（電灯線埋設工事）

これらの調査によって、川原寺南門と南面大垣について新たな知見をうることができた。

Ⅰ区

Ⅰ－１区では現、地表下１ｍで、まばらなバラス敷きを検出した。バラス敷きには少量の瓦片が混じる。

Ⅰ－２区はⅠ－１区の西、２ｍを隔てる。Ⅰ－１区同様、地表下0.9ｍで瓦片を含むまばらなバラス敷きを確認した。バラス敷きの下は花崗岩の岩盤であった。

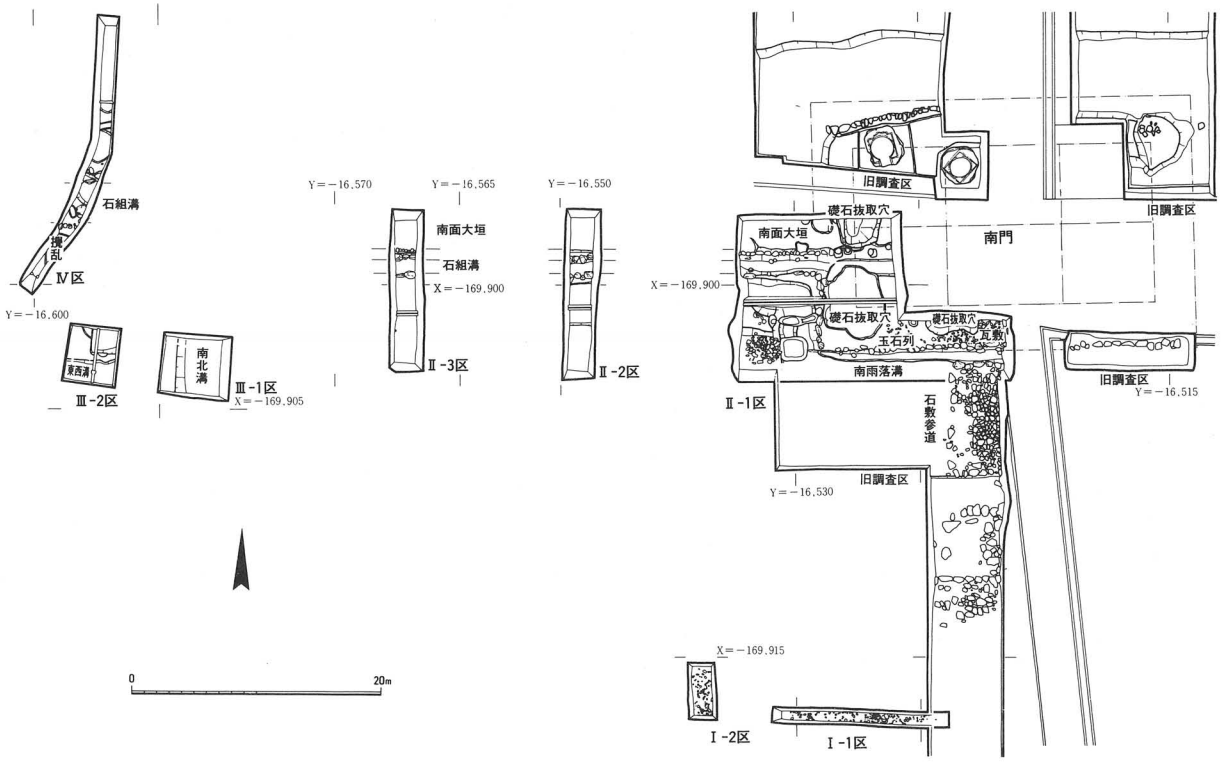


Fig.73　川原寺1993－２次調査遺構図（１：200）

Ⅱ区

史跡指定地南辺に隣接する県道北側の歩道上に、南門と南面大垣の確認を目的として３箇所の調査区を設けた。

Ⅱ－１区　Ⅱ－１区は南門の確認を目的とする調査区である。川原寺南門については、すでに1925年に内務省による小範囲の調査があり、さらに1957～58年の奈良国立文化財研究所を主体とする調査によって基壇および基壇縁の玉石列と移動した礎石２個、南にのびる石敷きの参道などが確認されている。今回はこれら旧調査区を一部含みながら、南門の西南部について調査を行った。調査の結果、南門の基壇、礎石抜き取り穴、南雨落溝、南面大垣と南門から南に延びる参道の一部などを確認した。

調査区の層序は、現道路および旧県道の盛り土（40～50cm）、水田耕土・床土（10～20cm）、茶褐色土層（20cm）、褐色ないし明灰色砂層（10cm）などがあり、その下層で遺構を検出したが、調査区内北半の旧県道部分とその南側の旧水田部分では堆積土の状況にかなり違いがあった。最終的な遺構検出面は調査区東端で現地表面から深さ70cm、西端で深さ95cmであった。

南門　基壇南辺と西辺の玉石列を確認した。基壇南辺の玉石列は1957年の調査ですでに確認されたものを再度発掘した。人頭大程度かそれよりやや大きめの石を並べたもので、並べ方はやや粗雑である。一部ずり落ちかけた石もある。西辺の玉石列も同様だが、なかに塼の断片が混じっている。この塼は一辺36cm（１尺２寸）、厚さ12cm（４寸）ある大型の矩形塼である。西辺の玉石列は北へ約３ｍ延びて西に折れ曲がる。

南門の基壇上では、礎石抜き取り穴３個と瓦敷きを検出した。礎石抜き取り穴は南側柱礎石の西側２個と西妻柱礎石１個である。西南隅の抜き取り穴が直径約３ｍ、ほかは直径約２ｍある。西妻柱礎石抜き取りは遺構検出面から深さ35cmあり、その底面に花崗岩礎石および根石の表面が付着して残っていた。さらにその下層に礎石据え付け掘形の埋土を認めた。

瓦敷きは基壇の南辺、特に南側柱中央間にあたる部分を中心に認められ、基壇南辺の玉石列によくなじんでいる。軒丸瓦713

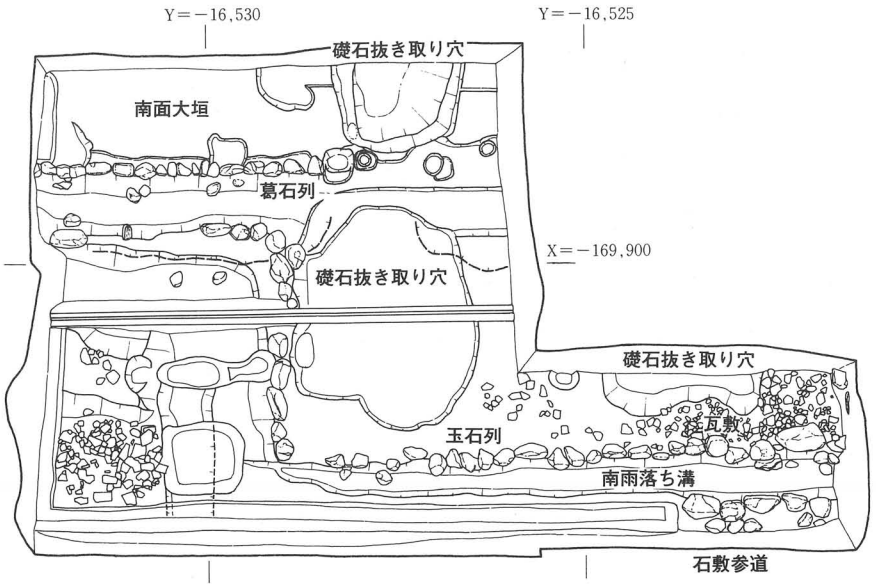


Fig.74　川原寺南門遺構図（Ⅱ－１区）（１：100）

型式(Fig.75－３；平安時代後期)をはじめ、奈良・平安時代の瓦を含む。

南門の基壇築成は、基底の花崗岩岩盤をある程度平坦にした上に灰青色砂質土層を厚さ40cmほど盛り、これをベースに基壇を築成する。基壇の掘り込み地業は基壇の全体にはおよばず、棟通り筋に幅2.6m以上の地業をおこなう。この掘り込み地業は岩盤をさらに30cm掘り込む。基壇の南辺では掘り込み地業は部分的で、中央間のあたりは整地土上に直接基壇土を版築し、黄褐色土の基壇土は厚さ５cmほどしか残らない。瓦敷きとこの基壇土との間には黄褐色土混じりの灰色粘土層があるが、これは本来の基壇土ではないであろう。

南門基壇南辺には雨落溝があり、基壇南辺の玉石列が北側石となる。南側は素掘りだが、石敷き参道を横切る部分では南側にも側石を立てる。この側石は大型で、石敷き参道の北縁石を兼ねる。雨落溝は調査区の東端で幅約60cm、深さ25cmある。西端は浅く細くなって途切れる。埋土は３層あり中層には多量の炭粒を含む。瓦、土器のほか金銅製瓔珞が出土した。土器は10世紀前半代までの年代である。

基壇西側では鍵の手に折れ曲がる玉石列に沿ってまがる幅1.5mほどの素掘りの溝がある。撹乱が著しいが、上層の灰色砂層、下層の灰色粘土層ともに大量の瓦が堆積していた。

南面大垣　築地塀の南面大垣を検出した。築地本体は削平されていたが、築地葛石列と掘り込み地業を確認した。葛石列は川原石のほかに瓦や塼が混じる。葛石列の東端約0.6mは南門基壇上にくいこんでおり、それに接して一辺40cmほどの柱掘形がある。築地の添柱であろう。この柱掘形の北1.2m、さらにその西1.2mにも直径30cmほどの柱穴がある。これらは南門脇の潜り戸に関連する可能性がある。掘り込み地業は南縁だけを確認した。葛石南辺からさらに1.3m広がり、幅2.7m以上、現状での深さは0.6mである。

石敷き参道　南門の南には石敷きの参道がある。今回は南門南雨落溝の南側石を兼る北縁石とその南側の石敷き１石分を検出したにとどまる。

Ⅱ－２・３区　Ⅱ－２区はⅡ－１区西辺から17mを隔て、Ⅱ－３区はⅡ－２区のさらに17m西にある。ともに南面大垣の確認を目的とした。現地表から0.9～1mで南面大垣築地基底部とその南側に石組みの東西溝を確認した。築地は幅1.3mないし1.6mを確認したが、北辺は調査区外にあるため築地基底部の幅は明らかにできなかった。Ⅱ－３区では築地の南の縁に沿って平瓦片を10枚ほどならべた瓦列がある。築地掘り込み地業の南縁は、石組み溝をこえてさらに南にある。石組みの東西溝は側石の内法で幅50～60cm、深さ30cm。底石はない。

Ⅲ区

明日香村公共下水道の縦坑予定地３カ所を調査した。縦坑予定地は、県道多武峯見瀬線の道路面にあり、県道とそれから川原集落へ北進する道路との交差点（Ⅲ－１・２区)、そしてそれから約50m西（Ⅲ－３区）で３つの調査区を設定した。

Ⅲ－１区　道路アスファルト面から1.05mの深さに灰色粘質土層の包含層があり、その下層、

地表から1.2mの深さに淡緑灰色砂質土の整地土層がある。この上面で遺構を検出した。

遺構は南北溝１条である。西の岸のみ検出した。溝は幅1.8m以上、深さ0.5m。少量の瓦や土器、木片が出土した。

Ⅲ－２区　Ⅲ－１区の西1.5mを隔てる。層序はⅢ－１区と同じ。整地土層の上面で遺構を検出した。遺構は東西溝１条などである。この溝は幅0.9m以上、深さ15cmほどで、東ほど削平を受け浅くなる。元来はⅢ－１区で確認した南北溝と接続していたものと推測される。少量の瓦と土器が出土した。

なお、Ⅲ－１・２区で確認した整地土層は花崗岩岩盤に直接のっており、ごく少量の瓦を含む。

Ⅲ－３区　地表から深さ0.9～１mまでは道路の盛り土があり、その下で花崗岩岩盤が現れた。この岩盤は調査区の中程で東に向かって急激に落ち込む。落ち込みの肩はほぼ東北－西南方向にのびる。落ち込みの埋土は植物質を含む細かい粘土層である。少量の瓦が出土した。

Ⅳ区

Ⅲ－１・２区の北に長さ12mほどの調査区を設けた。道路面から0.5～0.6mは盛り土と水田耕土があり、その下に褐灰色粘土層などの包含層がある。遺構はその下層、明黄褐色砂質土層の上面で検出した。主な遺構は、南面大垣の北雨落ち溝と思われる東西溝である。この溝は両岸に花崗岩川原石を立てた石組み溝で、側石の内法で幅約1.5mある。瓦と土器が出土した。土器は10世紀代。雨落ち溝の南側には南面大垣の築地本体が想定されるが、この部分はすでに最近の水道管埋設工事によって完全に破壊されていた。

遺　物

大量の瓦のほか、塼仏、土器、金属器などが出土した。

軒瓦は面違い鋸歯紋縁複弁八弁蓮華紋軒丸瓦（Fig.75－１；川原寺601型式）と四重弧紋軒平瓦（Fig.75－２）、つまり川原寺式軒瓦が最も多く出土した。Ⅱ－１区からの出土が多く、南

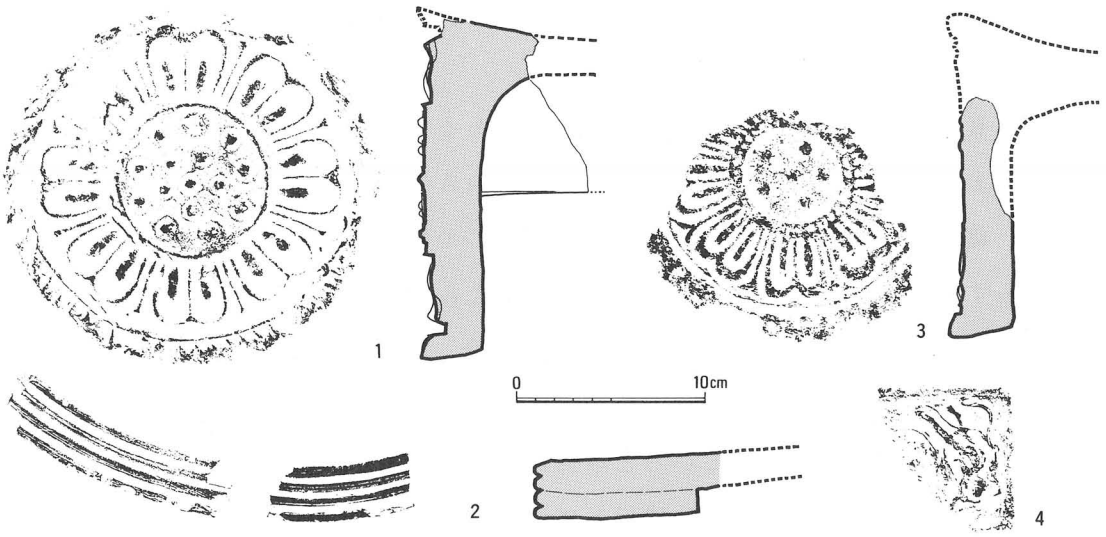


Fig.75　出土軒瓦・塼仏（１：４）

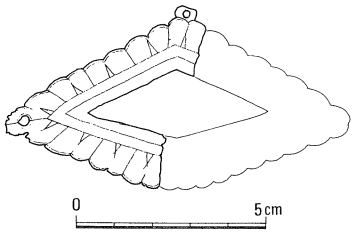


Fig.76　金銅製瓔珞（1：2）

門の所用瓦をこの組み合わせと考えてよいだろう。そのほか、平安時代の軒瓦が少量ある。丸瓦は1810点・290.5kg、平瓦は7128点・1577.2kgが出土した。

塼仏は方形三尊塼仏の断片が1点出土した（Fig.75－4）。従来から川原寺で出土するものと同笵である。火中している。Ⅱ－1区から出土した。

土器は、土師器、須恵器、黒色土器、白磁、青磁、などがある。

金属器は、金銅製瓔珞（Fig.76）のほか、宋銭（「元祐通宝」；1086年初鋳）、鉄釘など。金銅製瓔珞は、薄い金銅板を菱形に切り抜いたもので、周囲に複弁の蓮華紋を蹴り彫りする。上端に孔のあいた小さな突起があり、ほかの三つの角には垂飾を下げる孔があくと思われる。Ⅱ－1区の南門南雨落溝から出土した。

まとめ

今回の調査は、いずれも面積は小さかったものの、これまで調査の少なかった川原寺の南限部分について新たな知見を提供した。

まず、南門については1957年の調査で検出した基壇南辺と西辺の玉石列を再確認した。『川原寺発掘調査報告』（以下、『川原報告』）では、この玉石列が南門の基壇土とよくなじむこと、南雨落溝に落ち込んだ瓦にも新しいものが認められないことなどを根拠にして、この玉石列を当初のものと考えた。しかし、今回の調査で、南雨落溝から出土した土器は10世紀に降るものであることがわかり、さらに玉石列の中に塼の転用品を含むこと、玉石列裏込め土に瓦片が含まれることなどから、この玉石列を創建当初のものとは断定しがたい。玉石列の仕事が劣ることや南門基壇上の瓦敷きが平安時代に下ることなどからも、検出した玉石列は少なくとも後世の手が入っていることは間違いない。したがって、この玉石列の方向から、南門が伽藍中軸線に対して若干振れている（1°33′西偏）とみた『川原報告』の見解についても、再考の余地があろう。

南面大垣はⅡ－1区とⅡ－3区で検出した瓦石列あるいは瓦列を築地塀の葛石列と考えると、その方向は国土方眼とほぼ一致する。南門とのとりつき位置ではこの葛石列が南門基壇に入り込んでいる。葛石列の東端には小型の柱穴がある。この柱穴の北1.3mのところにも柱穴があって、位置からするとふたつの柱穴は一対のものと考えられる。後者の柱穴を築地心とみると築地基底幅は2.4m（8尺）前後と推測される。この場合、『川原報告』が推定したように南門の建物が振れをもっているとすると、南門の西妻柱位置が築地心より南にずれることとなり、むしろ建物は伽藍方位に正しくのっているとみたほうが築地塀との関係からは理解しやすい。ただ、南面大垣の築地については北辺を検出していないので、詳細は今後の調査に期待するところが大きい。

B　川原寺1993－３次調査

（1994年１月）

本調査は個人住宅の増築に伴っておこなったものである。調査面積は１㎡である。

基本的な層序は、盛土・暗茶褐色粘質土・暗黄灰色砂（地山）の順である。遺構の検出はできず、丘陵の地山面を確認したのみである。

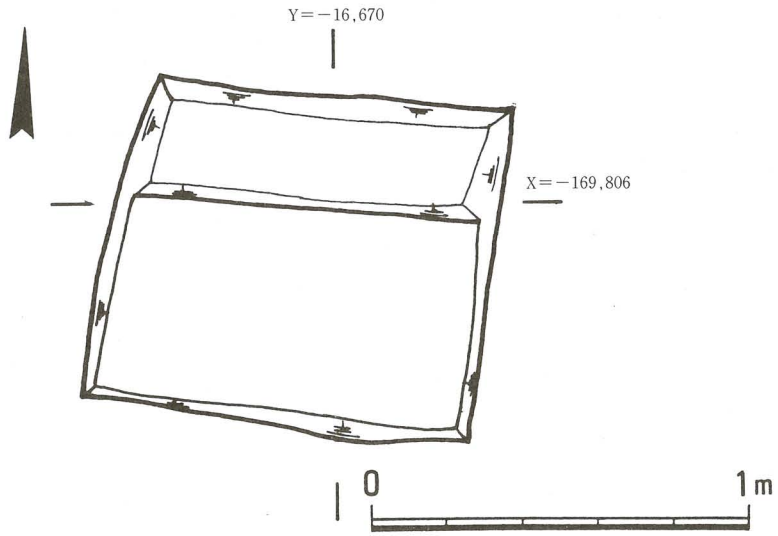


Fig.77　川原寺1993－３次調査遺構図（１：20）

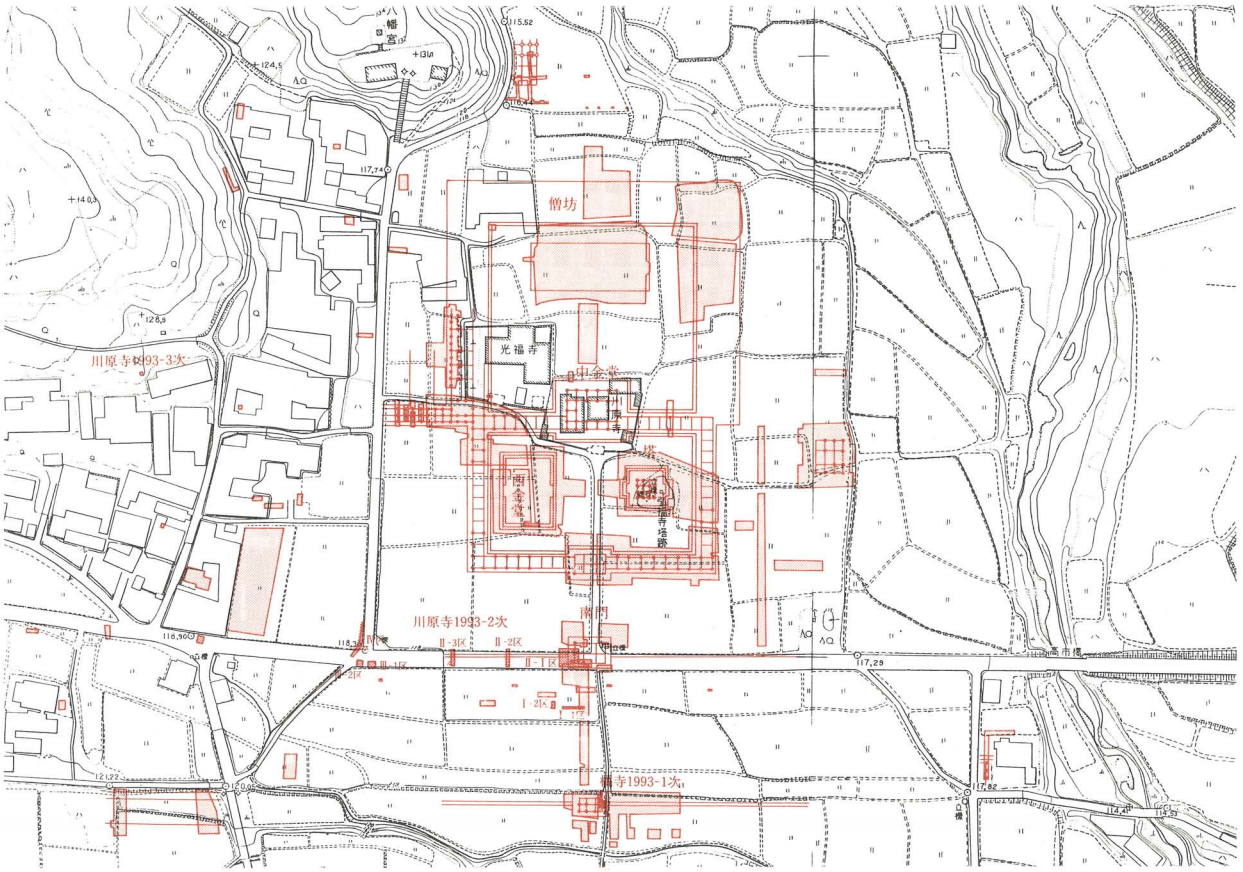


Fig.78　川原寺1993－２・1993－３次調査位置図

5　橘寺の調査（橘寺1993－１次）

（1994年１月～２月）

川原寺から橘寺にいたる参道脇の電柱立て替えと、道路敷きへの電灯線の埋設工事に伴う調査である。橘寺の北門にかかる部分について発掘調査を実施した。調査区は幅0.6m、長さ6.8m、面積4.1㎡である。

調査区の東半分は現道路擁壁工事によってほとんど破壊されており、遺構を検出できたのは西側の幅0.3m部分に限られた。現道路のアスファルト面の下には厚さ0.3mの盛土層、その下に旧水田耕土・床土があり、さらに褐色粘土層と褐色砂層が堆積する。この二つの土層には室町時代までの瓦が多量に含まれていた。さらにこの層の下層、現道路面から－0.9mで黄褐色土層基壇土を確認した。厚さ10～30cmあり、瓦は含まれない。黄褐色土層上面には東西方向の素掘り溝があり、その底面で掘立柱柱穴１個を確認した。掘形に焼け土を含み、柱抜き取り穴をともなう（Fig.79）。

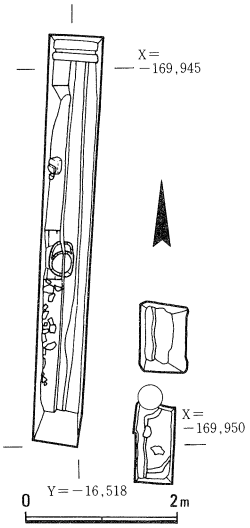


Fig.79 橘寺1993－１次調査遺構図（１：100）

さて、橘寺北門は1957年～1958年にその西半分が発掘調査され、小さな花崗岩自然石を礎石に用いた、桁行３間、梁行２間の八脚門が確認された。基壇規模は東西10.4m×南北7.5m、柱間は桁行中央間が3.3m（11尺）、脇間と梁行が2.1m（７尺）である。この門は鎌倉時代に建立され、永正年間の橘寺焼亡時に焼失したと推定されている。門には基底幅５尺の築地塀がとりつく。さらに、この鎌倉時代の門の下層で、東西10.6m×南北8.2mと推定されるより規模の大きい基壇が確認され、これが創建の北門と考えられた。柱位置は再建門と同じらしい。

今回の調査で確認した黄褐色粘土層は橘寺北門の基壇土と推測される。『川原寺発掘調査報告』では、橘寺北門の南北心と川原寺南門の南北心との距離を164.55尺（49.86m）とする。今年度再発掘した川原寺南門との距離を測ると、今回の調査区は橘寺北門の東辺ほぼ中央に位置することとなるが、調査区が狭いため基壇幅など詳細は明らかにできなかった。

遺物は、瓦、須恵器、土師器、火舎などが出土した。軒瓦は鎌倉時代の巴紋軒丸瓦２点、軒平瓦１点、鬼瓦１点である。軒平瓦（Fig.80；１）は、先端が三つ又に分かれた特徴的な唐草紋で、東大寺や京都・栢杜遺跡（Fig.80；２）、尊勝寺跡などと同紋である。この型式の軒平瓦は、12世紀末～13世紀初めにかけて東大寺再建を推進した重源、さらには大仏様建築との強い関連が指摘されている。橘寺では建仁三年（1203）に塔の再建に着手したことが記録にあり、伽藍地ではこの頃の瓦窯が見つかっている。13世紀に進められた橘寺の再興の状況を知る上で興味深い瓦といえよう。

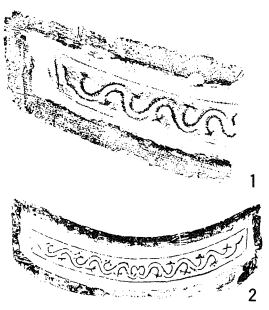


Fig.80　出土軒平瓦（1;1：4）京都・栢杜遺跡出土軒平瓦（2；1：8）

6　山田寺第９次（寺域東南隅）調査

（1994年11月～12月）

山田寺跡については、1976年以来、８次にわたり、塔・金堂・回廊・講堂・宝蔵などの伽藍主要部、および南門・東西南面の大垣など寺域の確認調査を行ってきた。これらの調査成果を受け、特別史跡の追加指定・土地公有化事業が進められたが、それによって史跡整備の必要性が高まってきた。今回の調査は、これから着手される整備事業の実施設計にあたり、これまで未解明であった寺域東南隅部の状況を知るために実施したものである。

寺域の東辺については、第４次調査（1982年）と第８次調査（1990年）において、東面大垣とそれに伴う石組溝などを確認し、南辺については、第７次調査（1989年）で南門とそれにとりつく南面の大垣、およびその前面を流れる東西溝などを確認している。これらの調査成果からすると、寺域東南隅の平面位置は予測できるものの、東へ急激に標高を増す現在の地形が寺域本来の地形なのか、後の崩壊土の堆積によるものか速断できなかった。このようなことから、今回の調査は寺域東南隅の位置と地形、および大垣の構造と変遷の解明を目的としている。

調査地周辺の地形は、東から西へ下がる雛壇状の水田地帯で、一条の小川がほぼ真西に向かって流れている。想定される寺域東南隅の位置は、ちょうどこの小川によって分断されており、直接コーナー部分を検出することが困難と思われるので、若干北へずらした位置に発掘区を設定した。また、東側からの崩壊土が厚く堆積している可能性があり、安全勾配を考慮した結果、最終的に遺構を確認した範囲は、東西７ｍ・南北10ｍの約70㎡である。

遺　構

発掘区の基本的な層序は、表土（厚さ20㎝）、床土（10㎝）、暗茶褐色土（20㎝）の下に、丘陵側からの崩壊流出土である微砂と粘土と粗砂の互層が地表下2.0～2.2ｍまで何層も繰り返して堆積しており、その下で古代の瓦片や土器片を含む黒灰色粘質土となる。この黒灰色粘質土層は70～90㎝の厚さを持ち、その下面で瓦列を伴う土塁状の遺構ＳＸ535を検出した。なお、ＳＸ535の両側にも流水や崩壊によってもたらされた粘土と砂の層が交互に堆積しており、その中には大垣が倒壊した際の建築材や落下瓦を含む層もある。それらの下面、すなわ

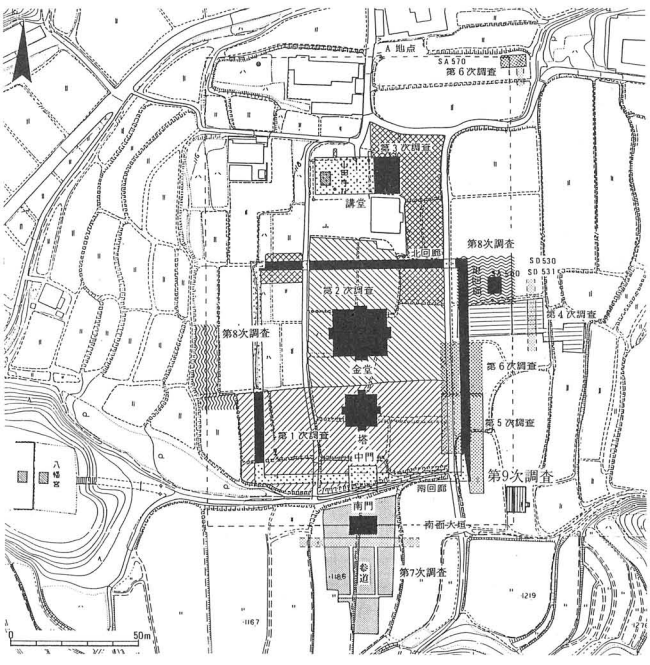


Fig.81　山田寺第９次調査位置図

ち地表下3.8mで花崗岩の岩盤からなる地山層となる。

調査によって検出した主たる遺構には、東面大垣ＳＡ500とその東を流れる２条の南北溝ＳＤ530・ＳＤ531、および瓦列を伴う土塁状の遺構ＳＸ535がある。

東面大垣ＳＡ500は、第４次調査の所見から、東西1.8m、南北1.4m、深さ1.7m前後の柱掘形を持つ掘立柱塀で、柱間寸法は2.4mであることが判明している。このため今回の調査では、上層の土塁状遺構を保存するため一箇所でのみ柱穴を確認した。その結果、東西1.4m、南北1.3m、深さ2.1mの柱掘形を検出し、さらに柱掘形底面から浮いた位置で礎板を確認した。この礎板は、長さ93.5cm、幅22.5cm、厚さ13cmの桧材で、ほぼ中心に貫通しない枘穴（直径7.5cm）があり、それを中心に直径約20cmほどの柱の圧痕がしるされていた。礎板が掘形底面から70cmほど浮いた位置に存在することは、第４次調査で確認された偏平な自然石や第７次調査の瓦詰めなどとも共通しており、掘立柱塀が創建当初のものではなく、ある時期に改修されたことを示している。なお、東面大垣ＳＡ500は、花崗岩の地山岩盤を削り残して作った高まりの上に砂質土と粘質土を積み上げて造った幅約２ｍの基壇を伴っていた。この基壇の東側には、屋瓦や垂木などの建築部材が散乱しており、その様子から一本柱塀であった東面大垣の上部には瓦が葺かれていたこと、その大垣塀が東側に倒壊していることなどが判明した。

東面大垣の東で２条の南北溝を確認した。西寄りにある南北溝ＳＤ530は、東面大垣心から東3.65mに西肩を持つ幅1.2m以上、深さ0.4mの素掘り溝である。また南北溝ＳＤ531は、ＳＤ530の東半に重複して掘られた幅0.9m、深さ0.3mの素掘り溝である。この２条の南北溝は、すでに第４次調査で検出されており、今回はその南延長部を確認したことになる。しかし第４次調査で検出した溝ＳＤ531は、石組を伴う溝であったが、今回検出した部分では石組みはおろか、その抜き取りの痕跡すら確認することができなかった。調査した範囲が狭いこともあり、あるいは別の溝の可能性も残るが、溝ＳＤ530との先後関係も共通するため、上記のように理解しておく。

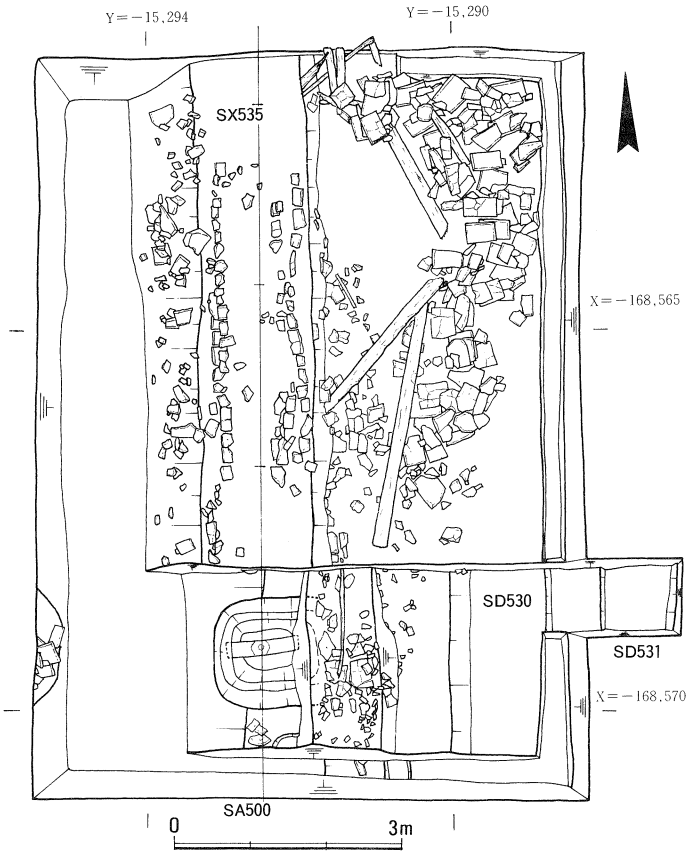


Fig.82　山田寺第９次調査遺構図（１：100）

瓦列を伴う土塁状遺構ＳＸ535は、東面大垣ＳＡ500の倒壊後、落下瓦や倒壊

した建築部材などを埋め込むように整地した上に、大垣の基壇をも包み込むように盛り上げた土塁状の高まり遺構で、下端幅約３ｍ、上端幅1.2ｍ、高さ約70㎝の規模をもつ。盛土には、瓦を交えながら粘質土や砂質土を交互に積み上げており、現存する最上部には1.2mの間隔で南北に走る２列の瓦列が残っていた。なお、落下瓦などを埋め込んだ整地土中から「延喜通寶」が出土している。

遺　物

調査によって瓦類、土器、金属製品、建築部材、石製品、銭貨などが出土した。これらは整理途中であり、ここでは主要なものについて触れておく。

瓦類には、軒丸瓦５点（山田寺式Ｃ：２点＜以下括弧内「点」省略＞・Ｄ：３）、軒平瓦38点（重弧文Ａ：２・Ｂ：10・Ｃ：６・Ｄ：２・Ｅ：１）、垂木先瓦７点（Ａ：１、Ｂ：２、Ｄ：４）、鴟尾片１点のほか、破片を含む大量の丸瓦と平瓦がある。ここでは出土状態からみて、東面大垣の一本柱塀の倒壊によって、そこから落下したと判断できる完形あるいは完形に近い丸瓦と平瓦を中心に述べる（Fig.83）。このような丸瓦は８本あり、すべて粘土板巻き作りである。行基式は３本で、凸面に縦位縄叩き目を施す（全長40㎝前後）。玉縁式は５本で、うち凸面に斜格子叩き目を施すもの（筒部長31㎝前後）が４本で、縦位縄叩き目を施すもの（筒部長34㎝）が１本あり、後者の凹面の布目痕は粗い。完形かそれに近い平瓦は54枚ある。粘土板桶巻き作りの平瓦は33枚で、凸面に斜格子叩き目を施す。これらのうち全長が41㎝前後のものが26枚で、36㎝前後のものが7枚ある。一枚作りの平瓦は21枚あり、凸面に縦位縄叩き目を施す。うち凹面の布目痕が密なものが20枚で、粗いものが１枚あり、前者は全長39㎝前後のもの（13枚）と34㎝前後のもの（７枚）に細分される。以上から、東面大垣の一本柱塀には当初、石川麻呂～天武朝の造営期に作られた凸面斜格子叩き目の玉縁式丸瓦と平瓦を中心に葺き、奈良時代以降の塀の改作や修理の際に、凸面縄叩き目の丸瓦と平瓦を補足したことが判る。さらに布目痕が粗い丸・平瓦があるので、10世紀頃に

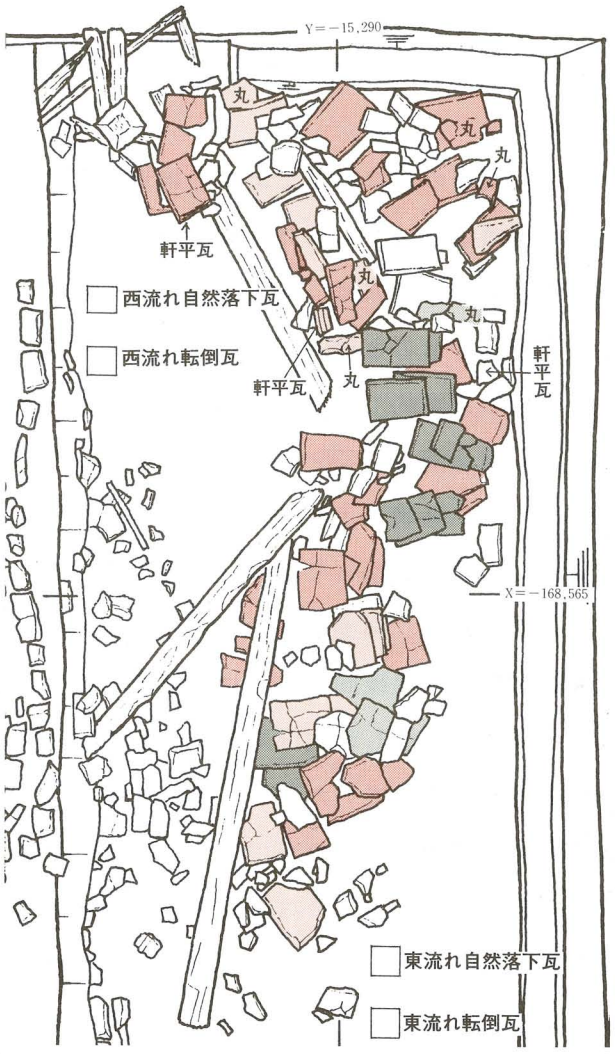


Fig.83　ＳＡ500所用瓦出土状況図（１：50）

も若干の瓦を補足したといえる。落下丸瓦は平瓦に比べて非常に少なく、軒平瓦も4枚と少なく、軒丸瓦に至ってはみつかっていないが、落下瓦のなかには若干であれ軒平瓦があるので、この塀には本来軒瓦も葺いていたのだろう。平瓦凹面に残る重なりの痕から判る葺足（16～20㎝）と後述の垂木の残長から、この塀には軒丸・平瓦各1枚と丸瓦2本、平瓦3枚を葺いていたと推定される。その後長い年月のなかで、瓦はつぎつぎ落下し、片づけられ、平瓦主体になったのである。

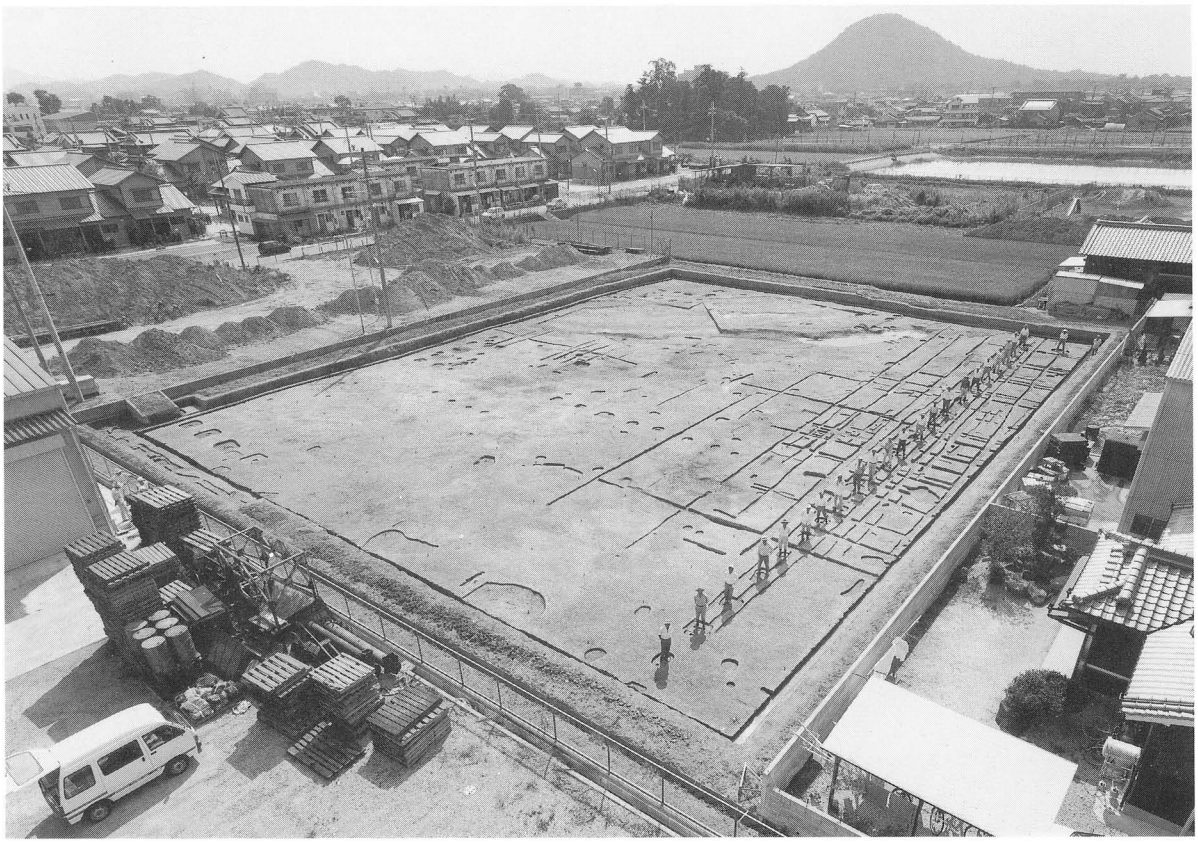
出土した建築部材は垂木、斗、棟木である。垂木は発掘区北端から2本出土し、現存直径は約8㎝、長さは66㎝と118㎝である。端部を枘につくり、枘部分に円い穴をあけ、短い方の材では枘の足元を斜めに切っており、垂木の拝み部分と考えて間違いない。斗は敷面部分を残すのみで、斗繰、斗面部分は完全には残さない。平面形は約30㎝の方形で、東回廊出土の巻斗の寸法にほぼ等しい。棟木材は断面円形で上面にほぼ一定間隔ではつった痕跡があり、垂木を納めるための簡略な仕事と思われる。ただし、はつりは前後揃わずにずれており、垂木は前後ずれて掛かることになり、前出の垂木とセットとするには疑問を残す。

石製品には蓮弁を削り出した砂岩片があり、灯篭の一部かと考えられる。また銭貨は、貞観永寶（初鋳870年）2点、延喜通寶（初鋳907年）1点が出土した。

まとめ

今回の調査の主な目的である寺域東南隅の解明については、東面大垣一本柱塀の柱穴、およびその倒壊後につくられた瓦列を伴う土塁状高まり遺構を確認することによって達成できた。調査で検出した柱穴は、第7次調査で確認した南門および南面大垣の成果から、寺域東南隅から北3間目のものと推定できる。また今回調査地の基盤面の高さを回廊東南隅のそれと比べると、今回の方が約1ｍ低い。これは第4次調査でも確認されているように、創建時の整地が、回廊から南北溝ＳＤ530へむけ東に傾斜をもたせて行われたことを示している。しかし、東面大垣塀が低い基壇の上に建てられている事実が今回判明したから、回廊と大垣間の雨水などは東面大垣の西裾に沿って南へ排水されていたことになる。大垣の東にある南北溝ＳＤ530・531の主たる役目は、斜面上方からの水を境内地に入れないことにあるのだろう。

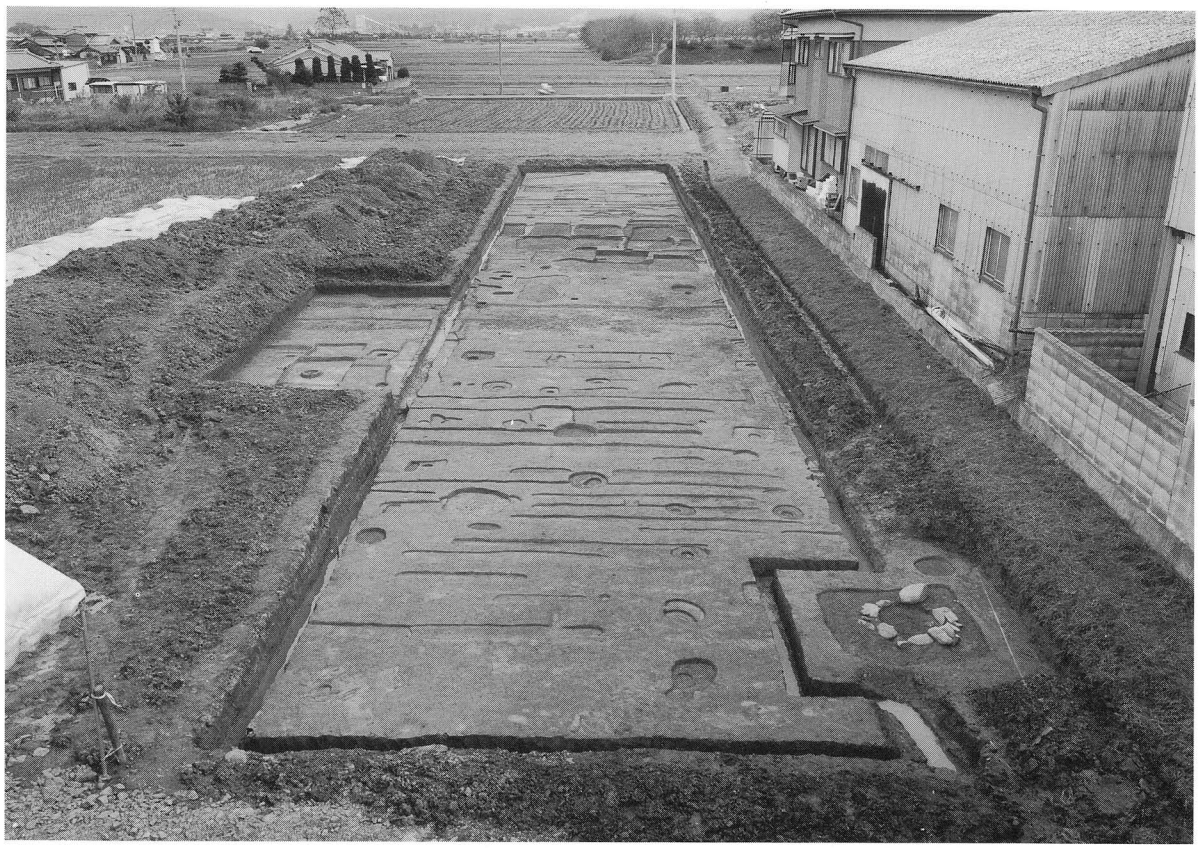
東面大垣が創建後間もなくに建替えられたことは、すでに第4・7次調査で判明していた。今回大垣塀が倒壊した状況で発掘できたことにより、それが瓦葺きであること、瓦の差し替え補修を何度か受けていたこと、それの倒壊した年代が10世紀前半頃であることが判明した。そして大垣倒壊後に、それらの廃材を埋め込むように整地した上に大垣と同じ位置に土塁状の高まり積み上げたこと、それが再び東からの崩壊土によって埋没してしまったことなどがたどれたのである。おそらくこの東からの崩壊土は、東回廊を倒壊させたものと同じ可能性があり、もしそうであるなら、土塁状高まりは構築後まもない10世紀末頃に、寺域東辺の諸施設ともに廃絶したことになる。さらに今後の検討を待ちたい。



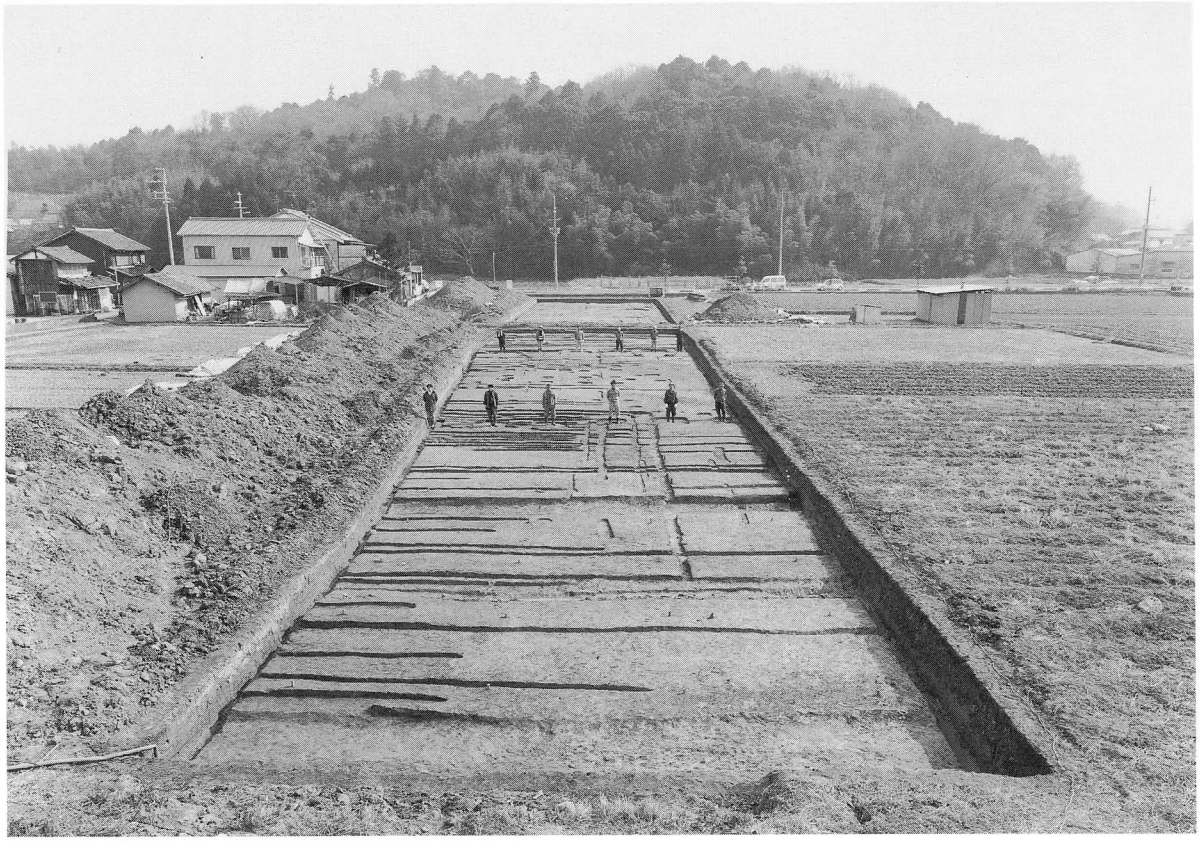
ＰＬ．１　第76次調査区全景（北東から：人列はＳＡ1216・7000）

ＰＬ．２　第75－６次調査区（下層）全景（北から）

ＰＬ．３　第75－７次調査井戸ＳＥ8350（南東から）



ＰＬ．４　第75－12次調査区全景（西から）



ＰＬ．５　第74次調査中区（東から：人列は手前がＳＡ245、後方がＳＡ230）

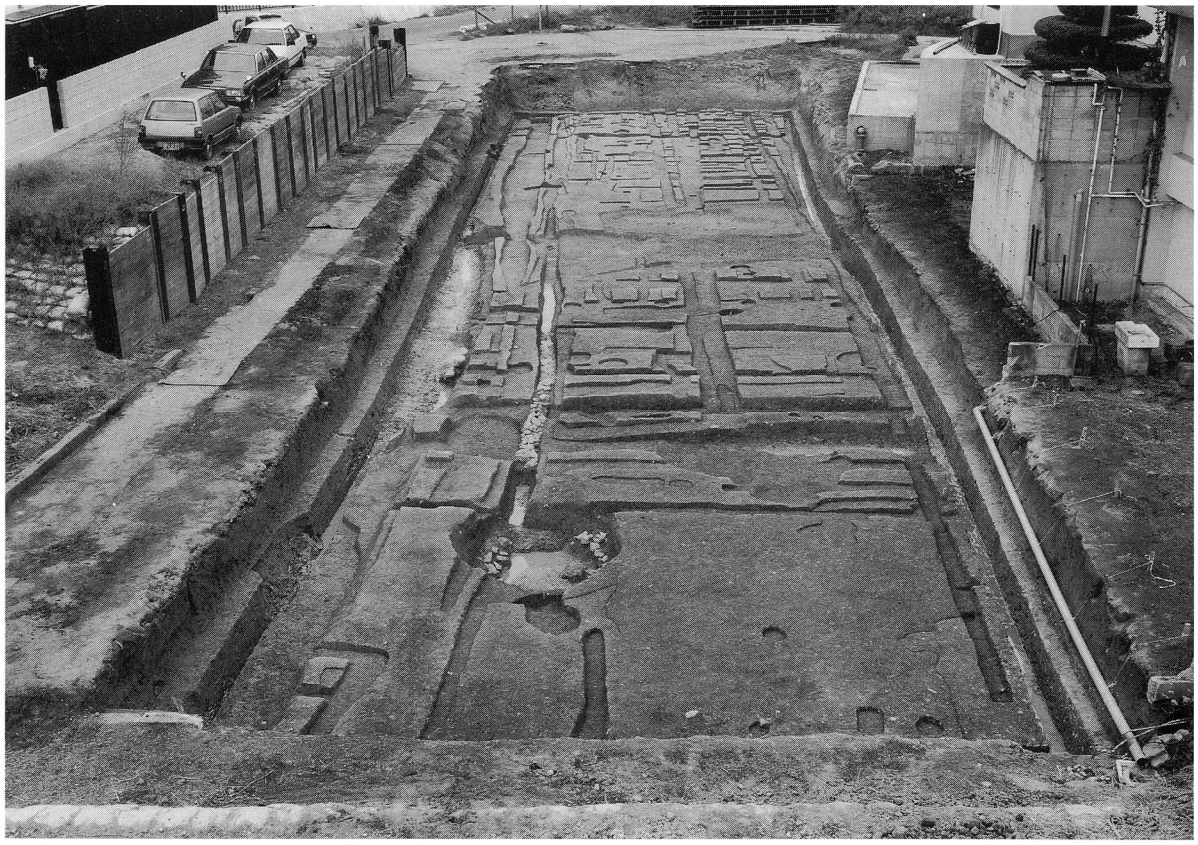
ＰＬ．６　第74次調査桝状遺構ＳＸ215（北から）

ＰＬ．７　第75次調査西区（下層）建物ＳＢ350（北から）

ＰＬ．８　第71－13次調査（雷丘北方遺跡第４次）２・３区全景（東から）

ＰＬ．９　第75－３次調査（雷丘東方遺跡）
北区ＳＸ3333（北から）

ＰＬ．10　第75－10次調査区全景（南から）



ＰＬ．11　第75－11次調査区全景（南から）

Ｐ Ｌ．12　本薬師寺1993－３次調査東塔基壇周囲（南西から）

Ｐ Ｌ．13　水落遺跡第７次調査区全景（西北から）

ＰＬ.14　山田道第７次調査区全景（東から）

ＰＬ.15　第75－２次調査区全景（北から）

ＰＬ.16　川原寺1993－２次調査Ⅱ－１区全景（西から）

ＰＬ.17　山田寺第９次調査区全景（西北から）

飛鳥・藤原宮発掘調査概報　25

１９９５年５月発行

編集
発行：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

〒634　橿原市木之本町宮ノ脇
Tel　07442－(4)－1122
Fax　07442－(4)－1742

PRELIMINARY REPORTS
OF EXCAVATIONS
AT THE ASUKA FUJIWARA PALACE SITES
NO. 25

Table of contents

Page

List of archaeological excavations conducted by the Division of the Asuka and Fujiwara Palace Site Investigations in 1994 and their locations 2

Chapter I : Excavations at the Fujiwara Palace site 5
1 Govermental office compound in the western quarter 7
A. 76th excavation of the palace and capital site investigations [PL.1] 7
B. 75−6th excavation [PL.2] 13
C. 71−15th excavation 17
D. 75−7th excavation [PL.3] 18
E. 75−12nd excavation [PL.4] 20
2 Eastern section of surrounding outer moat, eastern surrounding wall of the palace and second avenue of eastern sector of the capital (75−13rd excavation) 25
3 Western section of surrounding outer moat (75−1st excavation) 35
4 Other quarters
A. 75−5th excavation 36
B. 75−9th excavation 36

Chapter II : Excavations at sites in the Fujiwara Capital area 37
1 Second and third blocks on the seventh street, eastern sector of the capital (74th excavation) [PL.5 • 6] 39
2 First and second blocks on the seventh street, eastern sector (75th excavation) [PL.7] 45
3 Fourth block on the eighth street, eastern sector (75−4th excavation) 51
4 Third block on the elventh street, eastern sector (71−13rd excavation) [PL.8] 52
5 Third block on the twelfth street, eastern sector (75−3rd excavation) [PL.9] ... 58
6 Other blocks on the eastern sector
A. Third block on the fifth street (75−10 excavation) [PL.10] 61
B. Fourth and fifth blocks on the eleventh street (75−8 excavation) 62
7 Second block on the seventh street, western sector (75−11 excavation) [PL.11] 63
8 Moto-yakushiji Buddhist temple in the third block on the eighth street, western sector 66
A. 1993−3rd excavation [PL.12] 66
B. 1994−1st excavation 74

Chapter III : Excavations in the Asuka Area 75
1 Mizuochi Site (7th excavation) [PL.13] 77
2 Yamada-michi ancient highway (7th excavation) [PL.14] 89
3 Eastern foot of the Amakashi-no-oka Hill
A. 71−12nd excavation 94
B. 75−2nd excavation [PL.15] 95
4 Kawahara-dera Buddhist temple
A. 1993−2nd excavation [PL.16] 102
B. 1993−3rd excavation 107
5 Tachibana-dera Buddhist temple (1993−1st excavation) 108
6 Yamada-dera Buddhist temple (9th excavation) [PL.17] 109

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
May, 1995